厚生労働省 令和元年度障害者芸術文化活動普及支援事業　南関東・甲信ブロック 広域センター

東京アール・ブリュットサポートセンターRights（ライツ）報告書

連絡帳がポエム化したんです

気がついたら、捨てずに取っておくようにしています

未知数なんですよね、できることが。でもいつもすごいことをやってます

どんなものでも遊びに変えて、自分の創作に使うんですよ

まなざしラジオ!!

"アート"って見方もあるんだって最近気づいて

見方によっては問題行動なんだけど、

"たっぷりミルクのなんとかプリンとか書いてるの見ると、多分目の前にあったモノを見てたんだなとか（笑）

うちはね、昔から絵で"真実を見たい"って気持ちがあったの

東京アール・ブリュットサポートセンターRights 報告書

令和元年度障害者芸術文化活動普及支援事業
南関東・甲信ブロック 広域センター

OLだって会いたいんがいる　勇気づけられる言葉をその人にあげる

ある意味、芸術かもしれないですね

私が出会った頃はけっこうとんがってチクチクするような刺激が好きだったようです

口のなかに入れてすごーく丁寧に噛むんです

実は破いてる瞬間って見たことないんですよ

唾をつけるだけだと消えてっちゃうので、さらに剥がしてコリコリコリコリ

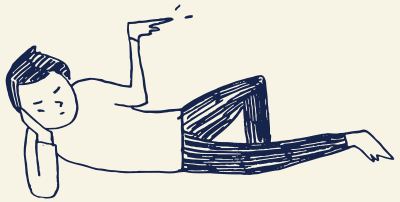
あの壁を外せるなら今の状態で一枚だけでもキープしてあげたいんです

今年に入ってから服を破く行為がパタンとなくなりまして

結局、なくなった決定的な理由はつかめていないんです

自分が苦しいと感じることはやらないってことで、いまは服づくりは休憩中

生きる欲望に着目することは悪いことじゃないって言いたいね



厚生労働省 令和元年度障害者芸術文化活動普及支援事業　南関東・甲信ブロック 広域センター

東京アール・ブリュットサポートセンターRights（ライツ）
報告書

まなざし**ラジオ!!**

本書について

平成から令和に時代が変わったこの2019年度、東京アール・ブリュットサポートセンターRights(ライツ)は、厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業において南関東・甲信ブロックの広域センターとして活動してきました。本事業3年目となる今年度は中間支援とは何かを考え、また、これまでの事業で大切にしてきた「日常のなかに存在する、形にとどまることに限らない表現」を見つけ出す支援者やご家族にも光を当てて、「まなざし」をキーワードに活動しました。

南関東・甲信ブロックは、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県の1都5県からなります。今年度は千葉県に初めての支援センターが立ち上がり、埼玉県と東京都には2つの支援センターが設置されたことで、ブロック内で6つの支援センターが事業を行いました。これらの支援センターと都県の事業担当者が集まるブロック連絡会議では、初年度の支援センターが抱える疑問に対して、経験のある支援センターからアドバイスが提供されるなど、年度を重ねたことにより、ブロック内の連携に広がりと深みが感じられました。

このネットワークは、広域センターの活動にも大きな力となりました。東京芸術劇場で行った企画で取り上げる表現者のリサーチには、まずこのブロック内でどのような表現が存在するのかを知る必要がありました。支援センターと都県の事業担当者からご紹介いただいた表現とそれを生み出す障害のある方が、展示へと結びつく。「まなざしラジオ!! in 芸劇」は、表現者のリサーチや準備において、そして企画そのものにおいても支援センターをはじめ多くの方にご協力をいただいたおかげで実現したのです。

また、支援センター未設置の長野県においては、中間支援と支援センターの在り方について考える人材育成研修「まなざしラジオ!! in 長野」を開催し、長野県に必要な支援センターの形について考えました。今後支援センターの設置に向けて、県内での議論が進むことを願います。

本書では、今年度追いかけた「まなざし」というテーマを中心に、当センターの事業をご紹介します。

2020年3月
東京アール・ブリュットサポートセンターRights

目次

本書について …… 2

まなざし写真 …… 4

まなざしラジオ!! in 芸劇 …… 16
- 「まなざし」を分かち合うために必要な場づくり[アサダワタル] …… 17
- AIKAさんのラジオ …… 20
- 勝山直斗さんのラジオ …… 34
- ぎんがさんのラジオ …… 43
- 関根悠一郎さんのラジオ …… 53
- 西野克さんのラジオ …… 64
- 森田博康さんのラジオ …… 72
- まなざしを撮るということ[たかはしじゅんいち]/演劇的な展示[牧野宏一] …… 83
- [批評]もうこれ以上 誰にも殺させないための「まなざし」のちからについて[鈴木励滋] …… 84
- 「まなざしラジオ!! in 芸劇」トクバン! …… 86
  - トクバン!①どちらかと言えば舞台寄りなまなざし編 …… 87
  - トクバン!②どちらかと言えば美術寄りなまなざし編 …… 92
- 「まなざしラジオ!! in 芸劇」メインスタジオ …… 97
- 「カプカプーズによるカプカプラジオ」in 芸劇 …… 110

東京アール・ブリュットサポートセンターRights …… 114
- Rightsとは/愛成会とは …… 115
- 南関東・甲信ブロックの紹介 …… 116
- まなざしラジオ!! in 長野 …… 118
- 芸術文化が全ての人に開かれるために—Palabra株式会社の想い …… 120
- 視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ …… 121
- 相談支援・専門アドバイザー紹介 …… 122
- Rightsに寄せられた相談事例 …… 124
- 2019年度 南関東・甲信ブロックの動き …… 126
- 本年度の事業を終えて[小林瑞恵] …… 127

まなざし写真

AIKAさん

[左上] 録音中の AIKA さん [左下] リベルテ・スタッフ黒岩友香さん
[右] リベルテ新棟へ向かう AIKA さんと黒岩さん

まなざし写真

勝山直斗さん

[上] 勝山直斗さんが描いた壁画のある部屋
[左下] 久美学園・スタッフ小川順子さんと勝山さん
[右下] 唾を使って壁に絵を描く勝山さん

まなざし写真

ぎんがさん

[左上] ブロックで遊ぶぎんがさん
[左下] コラージュを制作中のぎんがさん
[右] ひまわりばたけ・スタッフ佐藤久美子さん

まなざし写真

関根悠一郎さん

自宅で会話をする関根悠一郎さんと母・涼子さん

まなざし写真

西野克さん

[左上] 工房集・スタッフ森田博子さんと西野克さん
[左下] 施設の中で過ごす西野さん
[右] ウエスの山から取った布を耳に入れる西野さん

まなざし写真

森田博康さん

[左] 2回の取材の間に破られたトレーナー
[右上] 緑の牧場学園・スタッフ吉田さんと森田博康さん
[右下] パズルを楽しむ森田さん

厚生労働省 令和元年度障害者芸術文化活動普及支援事業　南関東・甲信ブロック　広域センタープログラム

まなざしラジオ!! in 芸劇

"メインスタジオ" ギャラリー2（☞ P97-）

－展示やパフォーマンス、トークなどが交わるプログラム－

2020年1月11日(土)－1月15日(水) 10:00－19:00

【表現者（50音順）】

- **AIKA**（特定非営利活動法人リベルテ／長野）
- **勝山直斗**（社会福祉法人久美愛園 久美学園／埼玉）
- **カプカプーズ**（NPO法人カプカプ／神奈川）
- **ぎんが**（鹿島開発株式会社 生活介護事業所 ひまわりばたけ／東京）
- **関根悠一郎**（山梨）
- **西野克**（社会福祉法人みぬま福祉会 工房集／埼玉）
- **森田博康**（社会福祉法人からし種の会 緑の牧場学園／長野）

1月12日(日) 13:00-15:00　AIKAさんによるポエム創作・リーディング

1月14日(火)・15日(水) 11:00-14:00　カプカプーズによるカプカプラジオ

"トクバン!" シンフォニースペース（☞ P86-）

－障害者の表現に寄り添うまなざしについて語り合います－

① どちらかと言えば舞台寄りなまなざし編　1月11日(土) 13:30－18:00

② どちらかと言えば美術寄りなまなざし編　1月13日(月・祝) 13:30－18:00

会場：東京芸術劇場（東京都豊島区西池袋1-8-1）

【主催】東京アール・ブリュットサポートセンターRights(社会福祉法人愛成会)
【共催】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
【協力】埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集(社会福祉法人みぬま福祉会/埼玉県)、YAN山梨アール・ブリュットネットワークセンター(社会福祉法人八ヶ岳名水会/山梨県)、アーツサポ東京（社会福祉法人トット基金/東京都)、千葉県障害者芸術文化活動支援センター HONGERA(オンゲラ)!（特定非営利活動法人いちかわ市民文化ネットワーク/千葉県)、ART(s)さいほく(社会福祉法人昴/埼玉県)、信州ザワメキアート展実行委員会 関孝之、大谷典子(長野県)、特定非営利活動法人リベルテ(長野県)、関根涼子(山梨県)、HIKARI(神奈川県)
【企画・演出】アサダワタル　【空間構成】牧野宏一(MNoKa Architects代表)　【写真】たかはしじゅんいち
【調査・記録】アサダワタル、鈴木絵美里、米津いつか　【マネジメント】米津いつか

来場者数：メインスタジオ 401人(5日間)／トクバン!①39人 トクバン!②63人

manazashi radio in GEIGEKI

「まなざし」を分かち合うために必要な場づくり

アサダワタル（東京アール・ブリュットサポートセンターRightsディレクター）

南関東・甲信ブロック（埼玉、東京、神奈川、千葉、山梨、長野）の広域センターである東京アール・ブリュットサポートセンターRights（以下、Rights）[詳細P114～]のディレクターを務めてはじめに感じたこと。それは「障害者の芸術文化活動」の「中間支援」を「広域」で行うという、本事業の目的そのものが、実施事業者に相当高度な専門性と企画運営スキルを要求するものであるということだ。批判を恐れず言えば「満遍なくなんでもやる」は無理ではないだろうか。各事業者にまず求められるのは、「何をもって中間支援と考えるか」という明確なスタンス、絞り込んだ方針を示すこと。今年度のRightsでは、以下のようなコンセプトをまとめるところからスタートさせた。

“障害のある人が過ごす日常のなかに潜む「表現のたね」をキャッチする。そのための支援者の「まなざし」を育み、それらを分かち合うための「中間支援」を目指す。”

これは、過去に広域センターとして展開してきた「表と現 アーツプロジェクト」の流れを組みつつ、また、筆者が表現者としてこの障害福祉領域に関わってきた上でもベースとなる考え方だ。いわゆる「作品」にならなくとも、いわゆる「舞台」に上がらなくとも、障害のある一人ひとりの「○○さん」が日々行う（時として問題行動としても扱われる）行為に対して、「これも表現かもしれない」「なんだかこれは面白いのかもしれない」という、ポジティブな「まなざし」を向けること。そのまなざしを持つことは、実は「健常者」と言われる支援者の思考や創造性の枠までをも広げてくれる。しかし、このまなざしを忙しい支援現場のなかで持続させるためには、支援者が一歩立ち止まってこのまなざしの存在を確認し分かち合うための「支援」が必要だ。その共有作業が結果的に、障害のある人がいわゆる芸術文化活動に関わってゆく機会拡充にもつながるだろう。そう、こうした「中間支援」についてじっくり考え、必要なプレイヤーにつなげ、アクションを起こしていく。そんな広域センターを目指すべく、本年は活動をした。その象徴的な企画が、ブロック内の各支援センターや各施設と連携して開催した「まなざしラジオ!! in 芸劇」だ。ここでは、企画・演出を担った立場から、この「まなざしラジオ!! in 芸劇」の意図を記す。

■「まなざし」というコンセプト

「まなざしラジオ!! in 芸劇」は、2020年1月11日から1月15日まで、東京芸術劇場ギャラリー2をメインスタジオに、障害のある人たち一人ひとりの日常からうまれる「表現」を、支援スタッフや作者のインタビューとともにお届けする「展覧会」であり「ラジオ番組」だ（東京芸術劇場シンフォニースペースで開催された「トクバン!」についてはP86～P96参照）。十数年、障害のある人たちと共に表現活動をする機会や、その表現を言葉にする機会をいただいてきた筆者は、今回、Rightsのディレクターになったことを契機に、南関東・甲信ブロック内における障害者の表現を調査した結果、埼玉、東京、山梨、長野で暮らす6組の作者のリサーチを行なった。また、神奈川で活動する1組のグループ「カプカプーズ」（P110～P113参照）

とのコラボレーションの機会を検討した。彼ら彼女らが持っている日常に対する独創的な視点。その視点は、本人のなかにとどまるだけではもったいない程に、この世界の出来事をまったく新しい価値観で捉え直す「まなざし」がある。しかし、それらのまなざしとセットで繰り広げる行為が、時として問題行動とされるものも含めて「個性」としても認められる状況が生まれるためには、普段寄り添っているご家族や支援スタッフの「まなざし」こそが必要であることに気づいたのだ。

この「まなざし」という考え方は、表現を取り上げることよりも、障害のある人とその支援者の「関係性」をどう「表現」するか、という問いを生む。そのひとつの答えとして、今回は、写真家のたかはしじゅんいち氏によるリサーチ現場の記録写真を通じて、作者の表現（形を伴う作品）から、それらが生み出されるために営まれる、より日常的な行為へと焦点をあわせた。さらに、その行為を温かく見守り、時にそれとなく手を差し伸べながら自身も変化を遂げていく支援者のまなざしも。たかはし氏には、この点から線、線から面へとなり、やがて関係性として立ち現れる現象を撮影いただいた。そして、もうひとつの答えとして、「声」を扱った。それは作者自身が語る声でもあり、また、支援者が語る声だ。

■「声」という力　「ラジオ」という表現方法

作者や支援者が語るまなざしは、テキストとして公開し、会場で配布することも可能だ。しかし、今回、肉声にこだわったのには明確に理由がある。とりわけ支援者においては、作者の「表現」に出会ったときの感動や戸惑い、戸惑いを受容するプロセスなどを、テキストという「意味（内容）」を超えて、「感情」や「空気感」も含めて伝えて欲しかったのである。もしかしたら、そもそも言葉のみに還元できない（あるいは作者にとってはそもそも言葉を主なコミュニケーション手段として使わない）「表現」にあえて「言葉」を与える際の態度として、「声」という身体性を添えることは、「カタチを伴うことを前提にしない表現」を紹介する場づくりにおける一つの答えになりえるのではないか、そう考えたのだ。（行為の痕跡としての）作品の展示とともに、それらが生まれる関係性を捉えたたかはし氏の記録写真が眼前にある空間において、観覧者の「耳」に訴えることで、そもそも視覚優位の「展覧会」という形式に対する別の回答を導き出したかったという理由もある。この「まなざし」というコンセプトと、それを表すための「ラジオ」という表現方法。それらを総合的に空間として立ち上げてくれるパートナーとして、今回は、福祉事業所の設計・リノベーションなどで知られる建築家の牧野宏一氏に参画いただいた。作者一人ひとりの展示空間を「ラジオスタジオ」という体裁で設計してくれた牧野氏の尽力は大きく、また、そのスタジオの施工においては牧野氏コーディネートのもとで、神奈川県横浜市にて丁寧な家具づくりに取り組む地域活動支援センターHIKARIさんにご協力いただけたことも、「まなざしラジオ!! in 芸劇」という場づくりのプロセスにおいて、非常に重要なことだったと思う。

■「表現」とは、「生活」とは何かを問うために

改めて確認するが、そもそも「表現」という言葉は、思いや考えを「表（おもて）」に「現す」と書く。「まなざしラジオ!! in 芸劇」は、その「表現」がたった一人のものから、身近にいる誰かとの関係によって、より一層「表」へ、そしてそれがさらなる別の誰かによって「社会」という得体の知れない三人称の「表」へと放たれる、そのプロセスを記録し発信したものだ。しかし一方で、これまで「表現」という言葉が持つ狭義の意味・イメージだけではどうにも現すことができなかった、つまり「裏（うら）」と見做されているものをまさに裏返すその先に、「表現」の担い手である一人ひとりの「その人自身」に出会ってもらうということを考えた。

「表」と先に言ってしまったので敢えて「裏」という言い方をしたが、しかし、それは本来「裏」ではなく、「表」と思われている面にのみこれまで光があたりがちだった際に「影」になってしまっていた大切なその人の尊厳そのものなのだ。その人の日常を、パチパチと影送りをするかのような、ある意味では回りくどいプロセスを経て、はじめて「その人の輪郭をはっきりと知る」ことにようやく一歩近づけるのではないか。つまり目の前のその人が仮に「障害者」だとしたら、そのことを踏まえた出会い方が時としてその人の持つ輪郭をぼやかしてしまうことがあり得るという実感に基づき、その人が生み出す「表現のような何か」の「影」を辿ってこそ、「その人と正しい出会い方をする」ことになる。いや、なるとは言い切れないが、少なくとも、「そういう出会い方もあり得るのだ」と思えるようになるのではなかろうか。そう、それが「まなざし」を獲得するということであり、筆者が取材をした支援スタッフ、家族の方々は少なからずその「まなざし」を内化している人たちである。そして、それを再び外化し、多くの人と分かち合うためにこの企画に取り組んだ。

「表現」の手前に、あるいは一体的に、その人の「生活」というものがある。この「生活」という言葉は、「生きるという活動」なのだと、実感する。もう少し言うならば「たった一人の自分にとって、より善く生きる、という活動」ということか。これは自分勝手ということではない。しかし、その人にとっての「より善く生きる」が場合によっては誰かを傷つけることも、やはりあるかもしれない。それは「問題（行動）」ではないか、と福祉現場から声があがることはしばしばある。そこで、もう一歩深く踏み込んで立ち止まってみるのだ。もし「それ」を「問題（行動）」だと言うのであれば、形は違うかもしれないが、「私」だって誰か傷つけているのではないか、あるいは「私」だって周囲を困らせているのではないか、と。そう、この「当事者性」は実は広いのだ。そしてこのことを考えることは、「より善く生きる」の「善」を根っこから掘り下げることにもなる。これはけっこう過酷な作業だ。意識しないとすぐに隠されてしまう。しかし、そこを隠さずに生き切る人たちだっている。自分の感性に従って生きざるを得ないことと、生きてゆきたいと希求することとの違いは難しいが、いずれにせよ生き切る人たちは存在する。「まなざしラジオ!! in 芸劇」はつまるところ、「生活」を扱う。アートであるかどうか、それよりも大切なことがあるはずだから。

次頁からは、会場で公開されたラジオを、できるかぎり全文掲載することを心がけた。なぜなら、作者やその家族、支援スタッフの「声」が持つ表情やニュアンスを、少しでも感じてもらえることが、報告書という媒体においても大切だと感じたからだ。ぜひ読者の皆さんと、この取り組みが伝えたい「まなざし」を分かち合えることを、心から期待している。

AIKAさんのラジオ

「AIKAさんのラジオ」は、Rightsのウェブサイトhttps://rights-tokyo.com/aikaradio/ から聴くことができます

トラック01：オープニング

みなさん、こんにちは。東京アール・ブリュットサポートセンターRightsがお届けする「まなざしラジオ!! in 芸劇」パーソナリティのアサダワタルです。

さて、これよりお送りする内容はこちらです。

「AIKAさんのラジオ」

長野県上田市にある特定非営利活動法人リベルテに通うAIKAさんは、詩人です。題材となるのは、仕事や生活における努力、ほのかに抱く恋心。そして、彼女の目指すべき「OL」について。OLとはオフィスレディかと思いきや、「大きなLOVE」だというのです。彼女のまっすぐな言葉は、特定のスタッフやメンバーに向けて、時に歌にまで昇華されます。しかし、その「歌」がどんなものか、ほかのスタッフには告げられません。彼女は言います。「OLの役割は、人を勇気付けられる言葉を、その人にあげること」だと。

以前からノートやパソコンに、好きなアイドルの歌詞を書き写していたAIKAさん。その行為が、毎週土曜に通所するリベルテの連絡帳にまでおよび、自分で考えたオリジナルの言葉へと変化していきました。ポエムは、いつしか地域にファンを生み、街の書店などで彼女を招いてのポエムの会が開催されることになります。一連のプロセスを見守り続けるリベルテの代表 武捨和貴さんは「作品のみでなく、その人自身をフィーチャーしてくれる人が、地域から出てくる」という状況に励まされたと語ります。

一方では特定の人に捧げられ、その一方ではオープンな表現として広がっていくAIKAさんのポエムの「開かれ方」は、とても興味深いものです。このスタジオでは、AIKAさんのポエム群、創作風景の記録とともに、リベルテ開設から7年間彼女に寄り添い続ける武捨さんとスタッフ黒岩友香さんの「まなざし」を、音声と写真をもとに紹介します。

それでは、「まなざしラジオ!! in 芸劇」「AIKAさんのラジオ」から、参りましょう。

まずはAIKAさんがポエムの活動を始めたきっかけを、リベルテの武捨さんとAIKAさんのお二人に語っていただきました。どうぞお聴きください。

トラック02：ポエムづくりのきっかけ

武捨：いちばん最初の（活動が）スタートする前に、契約というか、唯一のメンバーで入ったのがAIKAさんなんです。

――何年前ですか？

武捨：えー、今年7年目だから、6年半前くらいに、AIKAさんが入ったところからスタートしています。

――最初（のメンバー）はAIKAさんお一人だったんですか？

武捨：はい。週1日、土曜日だけ通っていました。1週間誰もいなくて、土曜日だけAIKAさんが来るっていう（笑）

――平日は誰もいない状態（笑）

武捨：当時、（AIKAさんは）ノートに歌詞を写していたんだけど、だんだんそれがAIKAさんと僕らの連絡帳になり、だんだんポエム化していって。

――連絡帳がポエム化するってどういうことや(笑)

武捨：それと並行して、土曜日にAIKAさんが来たら、窓に絵を描く「窓ローイング」もやっていました。メンバーが増えていくにつれ、それが絵でしりとりする「しりとり窓ローイング」になっていって。でも、だんだんマンネリ化していき、いったんやめようかなとなりました。そこで街の人に向けて窓にポエムを書くことが始まりました。

（ジングル挿入）

――Jポップの歌詞って、好きなJポップのミュージシャンがいるんですか？

AIKA：ミュージシャンじゃなくてジャニーズ系ですね。

――誰が好きなんですか？

AIKA：Sexy Zone。

——Sexy Zone！

AIKA：前は嵐だったけど、今はSexy Zoneが好き。

——Sexy Zoneの好きな曲の歌詞を写していたんですか？

AIKA：はい。

——そこから始まっているのか。

AIKA：その歌詞を書こうと思ったら、歌詞を写すのはだめってお母さんから言われて。

武捨：あぁ、著作権的に（笑）。お母さんからチェック入ったんだ。

——お母さんけっこう厳しいな(笑)。じゃあ、ジャニーズの歌詞を写すのをやめてから自分で書き出したんですか？

AIKA：自分で考えたことを書いてるんです。

——おぉ、そうなんだ。

武捨：並行して、それを録音もしてるんですよ。

——AIKAさんが自分で書いたポエムを朗読で自分で読むんですね？で、それを録音しているんですか？それはめっちゃいいな。

武捨：今日持ってきたんだ、珍しい。

AIKA：歌だけだから。

武捨：入ってないの？いつも持っているじゃん。

AIKA：あるんだけど。

武捨：いいじゃん、出してみたら。

AIKA：ダメ。

武捨：なんで、恥ずかしいの？まぁ、そうだね。

AIKA：自分の後輩の歌が入っているから。

武捨：あぁ、そっか、そっか。

——何に録音しているの？スマホか何か？

AIKA：スマホじゃなくてCDプレイヤーがあって、そこにCD入れて、歌が流れているときに、自分の声を入れるみたいな。

——えぇ！それはめっちゃおもしろい。カラオケじゃなくて歌も入っている曲を再生していて、その上から朗読しているみたいなこと？

AIKA：はい。その機械が2つあって。CDカセットがあって再生して、こっちに自分の声を入れる。その機械に曲がいっぱいたまっているときは、もう一つの機械に録音して。

——あぁ、録りすぎてメモリがいっぱいになったら。だからこれは予備で持っているのか。何分くらい録れるの？

AIKA：50曲録れる。

武捨：それを聴いてるんだよね、送迎のときとか。

AIKA：うん、送迎のときとか仕事のときとか。

武捨：自分の歌が吹き込まれているやつだよね。

——それは人には聴かせないんですか？

AIKA：聴かせない（笑）

——なるほど(笑)

武捨：人にもよるでしょう？

トラック03：OLについて

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「AIKAさんのラジオ」をお送りしております。

まずはAIKAさんのポエムがどのように生まれていったかを、AIKAさん自身の言葉とリベルテの武捨さんの言葉で語っていただきました。次は、このメインスタジオ会場にも展示してある米袋に書かれたカラフルなポエム群について、特に「OL」という題材について、AIKAさんが解説してくれます。そして、なんと「OL」にまつわる２編の朗読までしてくれました。「OL」とは一体、どんなコンセプトなのでしょうか？それでは、続きをどうぞ。

——まず目の前の紙に書いてあるポエムを見ていいですか？ 以前は歌詞を写していたけれど、オリジナルでつくり始めたものなんですよね。

武捨：そうですね。

——1枚の紙にワンポエム、1個の作品を書いているんですね。手書きからパソコンに変わったのは何か理由があったんですか？

AIKA：パソコンから直接本にする気でいたから。

武捨：あ、なるほど。そうだったんだ。

——パソコンの方が本にしやすいから。それでか。けっこうストレートにスタッフさんへの想いを書いているんですね。

武捨：そうですね。当時はあこがれのスタッフが近くにいたんだよね。

AIKA：あこがれって？

武捨：好きだったスタッフがいたじゃん。女性の。

AIKA：いない。

武捨：いないんだ。もう忘れちゃったの？過去になっちゃったんだ。

AIKA：今は男の子だから。

――恥ずかしそうに大事なことしゃべってるじゃん、AIKAさん(笑)

AIKA：自分より年下の子だけど。

――そんなん関係ないじゃん。

武捨：ぼくが邪魔しているけど（笑）

――悪い施設長(笑)

武捨：当時はあこがれていたスタッフがいたんだよね。そのスタッフに向けて想いを書いたんだよね。

――ってことは、プレゼントすることもあったの？

AIKA：スタッフにはプレゼントはない、かな。

武捨：返されちゃうのか。作品にしようねって感じで。

AIKA：うん。

武捨：だからここに溜まってきているんですね。

――ポエムは、本人に読んであげたりしてたんですか？その場でちょっと聴いて、みたいな。

AIKA：してました。

――ああ、それはラブレターだね。

（ジングル挿入）

――OLになるんですか？

武捨：OLになりたかったんだよね。

AIKA：今はおまじない。

武捨：もうOLなんだ。

AIKA：おまじないもOLも一緒だから。

武捨：ああ、そうか。

――おまじないってどういうこと？

AIKA：人の恋を占うっていうこと。

武捨：前は大きなLOVEだったよね。

――大きなLOVEでOLなんだ（笑）。OFFICE LADYではなかったのか、なるほど。

AIKA：その意味がわからないから。

武捨：大きなLOVEに。

――確かに。OLってなんだって話だもんね。OLはけっこう出てくるんですね。けっこう重要なキーワードですね、OLって。

（ジングル挿入）

（AIKAさん朗読）

「OLになるために」

大人のOLになる勇気がある

すてきなOLになる

仕事も人の役に立つ事はOLのする事

信じてずっとOLになりたいって想いつづけてきた

かわいいって言われるようにOLになりたい

だってそれがOLのやり方だから

――この「OLのやり方だから」っていうのは…何なんでしょうね。最後の一文がむっちゃぐっときたんですけど。OLのやり方っていうのはAIKAさんの中では一言では言えないかもしれないけれど、どんなやり方なんですか？ OLとはこういうものだというのがAIKAさんの中であるんですか？

（少し考えている）

AIKA：OLの仕事のやり方だったら、あきらめかけている仕事をまた一から始める。

――ほう。あきらめずに、またはじめに立ち返って一から頑張ろうって思うってこと？ それがOLにとって大事なことなんだ。向き合うんですね、OLは。

AIKA：ここに書いてある「勇気がある」っていうことは、人が勇気づけられる言葉。ここにも書いてある言葉でも、勇気づけられる言葉をその人にあげられる。

――それはAIKAさんが普段からやってることだね。それがOLの大切なことなんだ。もう一つOLの詩、読んでもらってもいいですか？

（AIKAさん朗読）

「OLだって会いたい人がいる」

会いたくて好きでたまらないのに

泣く程 会いたくてたまらなかった事がある

ずっとこんな想いも何度もある

切ない想いをしてきた

でもそんな笑顔でいなきゃ

OLのことだから

――OLはけっこう日々、苦労しているんですね。毎日が楽しいというよりは、つらいこともあるけど、っていう感じの文章になっていますよね。

AIKA：会いたいけれどそれでも頑張る。

――そうそう、くじけないっていうか、逃げないっていうか。だから最後は、「だってOLだから」っていう感じで終わっている（笑）。さっきもそうだったし。文章にすごく型があるんだなと思って、このシリーズ。それがおもしろい。

武捨：なるほど、たしかにそうかもしれない。

AIKA：頑張れば会えるっていう。

武捨：そうだね。AIKAさんってそうだよね。

トラック04：レコーディングとスペシャルトーク

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「AIKAさんのラジオ」をお送りしております。

AIKAさんの「OL」というコンセプト。「人が勇気付けられる言葉を、その人にあげる」というAIKAさんの実践そのものなんだとわかりました。こうしてAIKAさんの実際の朗読に触れながら、米袋のポエム群をご覧いただくと、また新たな発見があるかもしれませんね。しかし、AIKAさんの表現は、これにとどまりません。なんと、音楽を聴きながら、オリジナルの「歌」を生み出すのです。その創作プロセスについてAIKAさんに語っていただきましたが、知れば知るほどまぁ不思議で。とにかく「その人にだけ伝えるための歌」や「スペシャルトーク」があるとのこと。このメインスタジオ会場に展示されている動画では、既存のJポップのうえにさらにAIKAさんがオリジナルで歌をつけるという内容がみられますが、どうも、これだけでもないようです。しかし、AIKAさんの歌は、あくまで特定の個人のために捧げられたものであるために、これ以上はここではお聴かせできません。あしからず。では、そんな歌にまつわる創作秘話、聴いていただきましょう。ぜひ、会場の動画も合わせてご覧ください。

――録音しているところは誰にも見られたくない感じ？

AIKA：見られたくないというか、声が入っちゃうと録音にならないから。一人だと自分だけの声になる。

――それはわかるわ。レコーディングだもんね。

AIKA：声がでかいから親に聞こえちゃうんだよね。

――ああ。メロディーがついてるの？

AIKA：メロディーはついてます。

――ちょっとちょっと、そのメロディーは、かけている曲のメロディーになっているの？そうじゃなくて、オリジナル？

AIKA：オリジナル。メロディーがかなしみのやつだから、かなしみ系のメロディーをかけて泣きながらやったりとか。

――かなしみ系のメロディーは、歌付きで流れてるんでしょ？

AIKA：カラオケバージョンのピアノの音だけ。

――なるほど。そのカラオケバージョンのピアノの音は、ジャニーズの曲なの？

AIKA：ではなくて。

――あ、話がだんだんわかってきた。そういうことなんだ。

AIKA：親のCDをかけてる。

――例えばお母さんの持っているCDはどんなものなの？そのピアノの曲が入っていたりとか？

AIKA：ピアノの曲だったりとか。子供三人兄弟のイメージの曲が入ってて。

武捨：お母さんのでしょ？

AIKA：お母さんが出しているCD。

――ちょっと待って、お母さん、ミュージシャン？

AIKA：ミュージシャンじゃなくて…（笑）

武捨：なんて言ったらいいんだろう、個人で出しているものですね。

――お母さん自身もCDをつくったりしてる人なんだ。

武捨：CDを出しているというか、子供が生まれたタイミングで3枚CDをつくったんだよね。

AIKA：うん。

武捨：作曲家にお願いして。お母さんが歌っているCDがあるらしくて。僕らはちょっと聴いてないんですけど。AIKAさんがそれを持ってて、そのカラオケバージョンに詩をのせてるの？

AIKA：うん。

――ちょっと、なにこの話。めちゃめちゃおもしろくなってきたじゃないですか。AIKAさん、それすごいですよ。でもお母さんもCDを出したっていうことは、お母さんもその当時、人に聴いてほしいから出したってことですよね。

武捨：記念のCDなのかな。リリースはしてないんだよね。

AIKA：リリースはしてない。

――なるほど。リリースはしていなくて自主製作で、家族に向けて。（AIKAさんが）週4で通っているカフェの方が、作曲できる方なんですか？

AIKA：はい。

——その作曲できる方が、お母さんのために作ってくれた曲を、お母さんがピアノで弾いている。そのピアノとかをバックにAIKAさんが朗読しているということですよね、今の話を整理すると。それはちょっとすごいな。

AIKA：はい。

——なるほど。僕が今勝手に盛り上がっていますけど、基本的には、それは世に出さないというか、あまり人に聴かせないものなんですか？

AIKA：歌は流さないけれど、メロディだけは聴かせられる。

——うん。メロディは聴かせられるんだもんね。あ、その歌は出さないというのは、お母さんの歌。お母さんの歌は、いったんカラオケバージョンにして、ピアノが流れてたりする。そのピアノが流れてるCDをかけながらAIKAさんが歌っている。それをさらに録音しているわけですよね。それは世に出さないんですか？

AIKA：出さない。

——ここまで誘導尋問したのに、出さないのか（笑）

AIKA：うちが歌っている歌は後輩たちにはあげられるけど。

武捨：他の人には聴かせられないってことだよね。

——そうか、歌の相手になっている人には聴かせられるけど。ってことは、リベルテのスタッフもそんなにいっぱい聴いたことがないってことですよね。

武捨：その人の歌はあまり聴かないようにしているというか。

——すごいな。それはとっても素敵なことですよね。その人だけに贈られる歌がある。みんなに、いろんな人に聴いてもらいたいということではなくて、この歌はこの人に聴いてもらいたいから録音しているっていうわけだよね。そのことはすごくよくわかりました。

AIKA：メロディーを自分でつくった、スペシャルトークをつくったりしてるから、いま。

——スペシャルトーク！？

AIKA：スペシャルトーク。

——AIKAさん、自分で書いたポエムがあって、それを歌うでしょ？　その歌についてのスペシャルトークをしているんですか？

AIKA：違う。歌が終わったときに、親の曲を流して、ピアノだけのメロディを出して、かけて、そこで自分の声を入れる。

——そのとき声を入れるのは、ポエムの朗読を歌っているのではなくて、何かをしゃべってるんだ。それがスペシャルトーク？

AIKA：そう。好きな子のことでも後輩もことでも。想いを。

武捨：言葉で。

——それは手紙みたいな感じで、相手に語りかけるようにしゃべっている、と。なるほど、それはサウンドレターですね。歌も入っていてトークも入っていて。

AIKA：今なかなか会えない子とは、手紙交換したりとか。ずっと休んでいる人もいる。そのときはLINEでも体調良くなってゆっくり休んでねとか送ったりするけど。

——LINEだけじゃなくてスペシャルトークも送ってあげる、みたいな。優しいな。

AIKA：実際、自分もCD化したいから。

——CD化とは！？

AIKA：CDデビューして、CD出す。

——ちょっと、ちょっと、質問です。CDデビューするという事は、その曲は周りの人も聴くってことだよね。それはありなんだっけ？

AIKA：好きな人だったら聴かせられる。

——CDデビューするってことは、僕のイメージでは、CD屋さんに「AIKA」っていうCDが並んで、誰でも好きに聴けるというのがイメージなんだけど、そうではなくて？　CDにしたものを、あくまでそれも好きな人に渡すって感じ？

AIKA：はい。

——っていうことは、もう「相手限定CDデビュー」ですね。そこは本当にこだわりがあるんですね。

AIKA：好きな子でも、親でも。ここにいるスタッフでも、全部。

——それめっちゃいいですね。一人一人のためのCDがあるみたいな。

AIKA：スペシャルトークをつくって、ここに書いてあるポエムを全部歌にして、それでCDを出すみたいな。

——ちなみに武捨さんに向けてつくったことはないの？

AIKA：ない。

——冷たい目をしたな、今。「ない」って（笑）

AIKA：ここに通っているメンバーだったら。

——そっか、スタッフじゃなくてメンバーなんだ。

AIKA：男の子だけだったら（笑）。年は関係ないけど。

——だんだんのってきたぞ（笑）

AIKA：がんばっている後輩たちに歌をあげたいっていう。

（AIKAさんの録音した歌が流れる）

♪ 前のリベルテのときから　私は　ここで　レコーディングしたとき　やっとそれが　私の人生〜の ♪

トラック05：武捨和貴さんのまなざし

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「AIKAさんのラジオ」をお送りしております。

さて、AIKAさんのラジオ、最後のトークになります。AIKAさんが毎週金・土曜に7年間通い続け、これらのポエムが生まれるきっかけともなった、特定非営利活動法人リベルテ。そのリベルテの代表の武捨和貴さんの、AIKAさんに対する「まなざし」の変化、地域に開かれていく表現の可能性について改めてインタビューしました。それではどうぞお聴きください。

武捨：当初はお母さんの希望として、（AIKAさんが通っていた事業所は）これまで生活介護だと喫茶やったりとか余暇支援的なお仕事的活動の取り組みをされてきた事業所だったので、それ以外に、生活の幅というか楽しめるものが増えたらいいなという話があって。（お母さんとは）前職から知り合いということもあって、リベルテへ通うのはどうかなと思っているんですという話で、僕らもぜひぜひって感じでした。

――最初からリベルテには仕事とか作業しに来るというよりは、いろいろな活動の幅を広げたいというのがあって通いだしたんですね。

武捨：そうですね。最初はさっき話した窓に絵を描く（窓ローイング）という週一回土曜日に彼女が来てくれて、午後にご飯食べたら窓に絵を描こうという時間があって。毎日の連絡帳にどうやらスタッフに対する伝えきれない思いをたくさん書いてくれているということがわかって。本人はどう思っているかわからなかったけれど、詩的に見えたので、だったら是非それはやってみたらどうかな？ということで、最初に、まちの人向けに毎週土曜日にポエムを書くということからスタートしたんです。

――最初から不特定多数というか、大きな規模ではないけれど、いろいろな人と一緒にポエムを書くというのをやってきたんですね。

武捨：そうですね。元々スタッフに伝えたいポエムのノートというか連絡帳は、そう、もともとお母さんとの連絡帳に本人が書いてたんです。

――親御さんとの連絡帳に本人の文字で書いていたってこと？

武捨：はい。じゃあそれは分けて、AIKAさんのノートに書いていこうかとなって。長文の想いがノートに書かれて来るようになって。それは今も続いているんですけど、内容とか面白そうだからやってみようかという感じで、ガラスに書き始めて。そうすると朝、マラソンしているような人がたまたま見かけていいねって言ってくれて、それが鳥居さん（上田にある古本販売の事業を行う株式会社バリューブックスの取締役）が「ポエムの会」をしてくださるきっかけにもなったりつながっていきました。

――AIKAさんの中では、最初はポエムを書いているという意識はなかったんですかね。

武捨：そうですね。こちらからするとポエムに見えているんですけど、本人は伝えきれない言葉をノートに記している。単純な連絡事項というよりは、私のことを認めてほしいみたいなのが中心にあって、それがあまり文章的ではなくて、段落の形とかがポエムっぽかったことが印象的ですね。

――その時したためていた連絡帳からもう一冊ノートを用意して書いていたものと、今、米袋の裏に書いているものとは、だいぶ変わりましたか？

武捨：そうですね。米袋に書いているものは、もう少しAIKAさんが形式的に獲得したようなものですね。

――そうですよね。タイトルがあって、誰から見ても詩、ポエムだと思えるものですけど、以前は、書きなぐっているというか、文章形式だったんですか？

武捨：もっと生々しいというか。私は我慢しているんだ、みたいな。

――ある種の訴えみたいなものもそこに書かれていた。

武捨：本人の性格的なところは変わっていないので。ポエムの反骨精神的な内容と同じように、スタッフさんは忙しいけれど私もっと頑張るね、みたいな内容です。そんなこと言われたら、よけいに僕らちょっと気になるみたいな(笑)

――すごいポジティブですよね。本人の中の哲学というか、どこか頑張りたいところに相当強い意思があるなって思います。

武捨：加えて、自宅では歌詞を書き写すっていうことをしていて、AIKAさんは3つくらい並行してやっていて。で、いつのタイミングかはわからないんですけれど、ノートに歌詞を写しているものがポエムに変換される時期がありました。そこら辺がこちらのポエムのプログラムで書き始めた時期と被っていたんですよ。もしかしたらお母さんがその取り組みを知ってくださっていて、著作権NGだよって話をAIKAさんにしてくれて、あの詩になっていったのかもしれません。

――そうか。ただの読みですが、連絡帳に書いていた訴えというかスタッフさんに知っててほしいという思いが独立して言葉になっていく部分と、CDを聴きながら歌詞を写すという部分の一個一個があって。歌詞を写すことから、自分の言葉の感覚をレッスンしていくようなものもきっとあったし、こっちはこっちで自分の想いをストレートに伝える、それが混じっていって今の形があるっていう感じがします。今の手法が確立されるまでに何系統かの道があって、それが一つの表現を作りあげるっていう気がすごくして。本人の中で歌詞を写してきた歴史もとても大事なんだろうなって。

武捨：そうですね。ジャニーズとか、聴いている曲の人間像にすごいあこがれている部分があり、それを身近な人に当てはめているようなところがあって。投影する人が確定するとすごい量の作品というかポエムが生まれてくるんです。おととしまでだと、今やめちゃったスタッフ。もう少し前だと黒岩っていうスタッフがその対象になっていて。今はお二人の男性が心配だし気になるし。（AIKAさんは）毎回LINEをしているんですけど、まぁ僕が恋を邪魔する障害になりよけいふくらんでて(笑)。変わっていって、成長もあるしおもしろいなと思います。

――送りたい対象も変わるし、場合によっては小さなコミュニティというか人がつながっているから、伝えるときに誰かが間に入っていたりすることでコミュニケーションを学んでいくというところも。基本的には誰かに向けて書いているというモードがあって、それをポエムの会とか開いていくという、両方兼ね備えている感じですね。

武捨：ドラマとか芸能人もよく見ているので、そうなりたいなという思いは彼女の中にある。「ポエムの会」みたいに僕らから発信するというよりも外の人がたまたま用意してくれた中で、カチッと入ってしまったところがあるんだと思います。

――外の人が入ってきたっていいですね。ここのスタッフさんじゃなくて、外の本屋さんが入ってくるとか大きなことだと思います。

武捨：「ポエムの会」は僕らも大事なタイミングというか、作品としてAIKAさんをどうしていこうかっていう話もあったし。詩集とかグッズとか。

――詩だったら、詩集を出すっていうのがストレートな表現としてありますよね。あとは朗読CDとか。

武捨：自分たちのものとしてどう出すかどうかというときに、外からAIKAさん自身をフィーチャーしてくれて、こっちとしてもそういうのありなんだ、とか。AIKAさんもそんなに違和感なく、24時間テレビみたいなノリでやってくれて、いい機会でしたね。

――なるほど。

武捨：人見知りしやすいタイプなので、そんなにうまく関係を作れていないのかなと思っていたんです。でも、イベントをやった会場の店長が辞めるというときに、お別れ会にAIKAさんと一緒に行くとノート一冊、半分くらいに書き綴ったポエムをプレゼントしていたんです。2,3回しか会っていないのに、本人がかなりわかっているというか、関係をちゃんとつくっているということが新鮮でした。外のつながりができてリベルテ以外のコミュニティに接続しているときに、本人がその関係性をキャッチして、しかもポエムとして渡しているのがすごいことだな、と。

――そこも一貫していますね。外とつながるきっかけもポエムだったし、自分が外とつながったことを意識して、つながっていこうという気持ちもポエムで伝えるということが一貫しているんですね。

武捨：僕らも7年やってきて、また改めて（AIKAさんとの）関係がいったんフラットになりつつあるというか、知らない一面はまだまだあるし、どう変化していくのかおもしろい時期だなって思っています。「ポエムの会」とかでAIKAさんをフィーチャーすると、何か新しい側面が見えて、リベルテにとっても振り返る機会になるし、リベルテをどう外に出していくかってときに、作品もそうだし、人もそうだし、この場もそうだけど、どういう切り口だったら面白いものとして、地域に向けて、福祉というものではなく見せられるか考えているところで。伝え足りていないこととか、見ている人が自由に感じてほしいというものを提供するときに、ポエムは相手に投げて、投げざるをえないから。

――そうですよね。ポエムってすごくいいコミュニケーションの表現ですよね。

武捨：AIKAさんをもう1回フィーチャーする。改めてAIKAさんをフィーチャーしているのは、そういう意味もあるのかなって今思っているんです。

――なるほど。誰をということだけじゃないかもしれないのですけど、その時々にリベルテで起きている風景をどうフィーチャーして伝えるか。展覧会なのかトークイベントなのか販売会なのか、（今回の企画でも）形式を含めて考えてもらえたと思うんですけど、そのなかでひとつ、AIKAさんがやってきた表現を出すというのは、今のリベルテを表現するっていう意味でも、とても合っているんじゃないかということですね。

武捨：そうですね。

（ジングル挿入）

勝山直斗さんのラジオ

「勝山直斗さんのラジオ」は、Rightsのウェブサイトhttps://rights-tokyo.com/katsuyamaradio/ から聴くことができます

トラック01：オープニング

みなさん、こんにちは。東京アール・ブリュットサポートセンターRightsがお届けする「まなざしラジオ!! in 芸劇」パーソナリティのアサダワタルです。

さて、これよりお送りする内容はこちらです。

「勝山直斗さんのラジオ」

13歳の勝山直斗さんが暮らすさいたま市緑区の久美学園には、壁一面に絵が描かれている部屋があります。絵を描くのが好きな勝山さんは、スタッフから鉛筆や画用紙をもらい、乗り物や動物、植物などを描くのが日課です。しかし、インフルエンザにかかったある日の晩、他の人と接触しないよう絵を描く道具がない状態で個室で過ごすことになり、唾液を指につけゴシゴシとゆっくり壁紙を剥がすという「創作」を開始しました。そこで生まれた「壁画」はとても優しい模様で、壁紙の層によって色合いも豊かになります。剥がした壁紙の断片は、丸めて宙に投げられ、粘着力が残った状態でそれらが天井に付着しています。畳にまで絵を描き出すなど、部屋全体が彼の表現で埋め尽くされるようになっていきました。その後は彼が過ごした部屋ごとにこの表現は広がり、いまでは5部屋に及んでいます。施設長の柏田愛希子さんとスタッフの小川順子さんは、勝山さんの行為に対し、一方では問題行動であると認識しつつも、もう一方では「これはアートである」という「まなざし」を持って向き合っています。「他の方の居室でもあるので、消えていく可能性もある」と語りながら、「もしあの壁を外せるなら、一枚だけでもキープしたい」と語るその言葉は、日頃の支援の可能性を緩やかに広げていく希望に満ち溢れているのです。このスタジオでは、勝山さんの壁画の一部を、記録写真を通じて体感していただきながら、施設長柏田さんと小川さん、そして勝山さんご本人に部屋を案内してもらいながら実施したインタビューを臨場感いっぱいでお届けします。

まずは、まだ勝山さんが学校から帰ってきていない時間帯に、こっそり部屋にいれていただき、スタッフの小川さんと施設長の柏田さんからお話をいただきました。それではどうぞ。

トラック02：創作のあらまし

小川：夜な夜な、ちょこっとずつやってる感じですね。夜に。

――ちょっとずつやっているんですね。

小川：そうですね、でも広範囲に。

――ちょっとずつやって、時間がずいぶん経ってこういう形になっていったと。

小川：そうですね。（何を描いているか）一つずつ決まってて「猫」とか「犬」とか。一緒にいるとちゃんと説明してくれます。「カニ」とか、これだと「アンパンマン」とか「カタツムリ」とか。

――エビ？

小川：これ、カタツムリですね。

――あ、これもカタツムリなんですね。これとかはっきりカタツムリですね。

小川：乗り物が特に好きで、壁だと動物が増えますね。実際に描くのは乗り物が多いんですけど。

――剥がしている層によって、本当に色が違うんですね。

柏田：一番はじめに壁紙があるからそれをバーッと剥がして、ここをこう。何層にも…5層くらいになっているんですよね。ここをこう、削っていきます。

小川：ずらして唾で削っていく。

――茶色い部分が一番下の層ですよね。その前にこれがあって、さらにこれがある。今でもやられているんですね。やるときはこの部屋で？

小川：ここにはもういないので、別のところの自分のお部屋で。

トラック03：勝山さんと共にお部屋めぐり

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「勝山直斗さんのラジオ」をお送りしております。

あっ、勝山さんが帰ってこられましたね。他の子供たちもいて、なにやらとても賑やかな様子です。

（何と言っているか聞き取りづらい声で勝山さんが「大型バスに」と言って近づいて来る）

小川：これなーんだ？

勝山：蝶々。

小川：あ、今蝶々って言った。

柏田：「大型バスに」って言ってるのは、「大型バスに乗ってます」の歌のYouTubeを見せろって。

――あぁ、「大型バスに乗ってます♪」のやつ。あります、あります。

勝山：大型バスに。

小川：101（号室）も勝山さん説明して。お絵描きしよう。

勝山：大型バスに。大型バスに。

小川：お絵描きしよう。

勝山：大型バスに。大型バスに。

（部屋に移動して）

――部屋を渡り歩いている。

小川：これけっこう（絵が）つながってる。

――つながってますね。

柏田：これが入所のけっこうきついところなんです。普段多床室で彼は寝ているんですけど、彼がインフルエンザになったときに隔離しなきゃってなって、この部屋で寝ているときにやったんです。

――ここがそうですか？

柏田：ここは隔離したときにやったんです。体調不良のときに。

――順番でいくとあっちが先？

小川：あっちが先ですね。

――それで、インフルエンザ隔離したときにここでもやったのか。そうなんだ。

柏田：それで、居室移動の関係で、今は彼の部屋が2階なんですよ。今は、2階がきれいにできあがっている。

（2階の部屋に移動）

小川：勝山さん、お部屋あがっていい？

――わぁ、すごい！わぁ。

（勝山さんは、これらの会話中、ずっと「大型バスに」と言い続けている）

――お邪魔します。

小川：畳の部屋になったら、畳に目覚め（笑）

――バスだ。これ大型バスだよね。

勝山：大型バスに！

――これ、大型バス？

勝山：うん。（というような応答のあとに歌う）

トラック04：壁紙コリコリ天井にまで飛ばす

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「勝山直斗さんのラジオ」をお送りしております。

勝山さんは僕らの目の前で、指に唾液をつけて、実際に絵を描いてくれました。小川さん曰く、これは「下絵」の段階だと。その様子が会場に展示されている動画でも観ることができますので、ぜひどうぞ。そして、記録写真には、壁画はもとより、壁紙を剥がした断片を天井に投げてくっつけてしまったその状態や、「い～と～まきまき♪」などと文字をぎっしり書き込んでいる様子などもみられます。

小川：ここまた消しちゃったな。

――消すという事ができるわけね。じゃあ、つなげちゃうね。

――消すってどういうこと？ 壁食べちゃうってこと？

――ああ、あれか。なるほどついてますね。

――どれどれどれどれ？これ！？これってこと？

――どうやって！？

――取ったやつを、手で！？ぺたってくっつくんだ。神業じゃない！？…唾つけて投げてるんかな。

（部屋を見回しているような間のあと）

――糸巻の歌詞も。

（何か描いている音が聞こえる）

勝山：しん、かん、せん。

小川：うん、新幹線だね。

――タイヤ、いっぱいあるね。

小川：これ（唾）だと消えていってしまうので、こうさらに剥がして。コリコリ、コリコリ。

——人がいてもやることもあるんですか?

小川: あんまりいないときにやることが多いです。寝たあとに少しずつ。

——これやってたら寝られないよね(笑)。こんな量…ちゃんと寝れてる?夜な夜なだよね。すごい量だね。剥がすのを考えたらすごい時間だよね。

勝山: しん、かん、せん。

——新幹線。

勝山: でー、んー、しゃ!

——何かの絵本とかを見て描いているんですか?

小川: そうですね、乗り物図鑑とかを見て。フリーハンドで。見たあとは、自分の記憶で。

トラック05:表現が生まれたきっかけ

(ジングル挿入)

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「勝山直斗さんのラジオ」をお送りしております。

引き続き、小川さんと施設長の柏田さんに他の部屋も案内していただきながら、この勝山さんの表現が生まれたきっかけについてお話していただきました。

——どれくらい今やられてるんですか?

小川: 以前仮設だったり、久美学園は移動してるんですけど、ここの施設になってから始まったんですよね、壁っていうのは。唾吐きとかいう行為はあったんですけど、壁に実際に描くのはここに来てから。

柏田: お隣もあるんですけど。ここが一番きれい。

——お隣もあるんですか?

柏田: 過ごした部屋、過ごした部屋でやるので。

——今はここに寝泊まりされてるんですか?

小川: 今寝ているのは、211です。

——210は違う方?

小川: 風邪とかで移動していったときにまたつくられていく。

柏田: 体調不良とかでどうしても部屋を移動して寝ることがあったりすると、その何回かの夜の間にこうなっちゃう。

——ちょっと過ごした中で、もうできていく。

柏田: そうなんですよ。ここは今ガッツリ暮らしているので。

——一番長期制作をここでしている。

柏田: 一番最初のお部屋も長くいたので。そこは多床室で何人かで暮らしていましたけど、ここは一人部屋なんです。

——今年に入ってから壁紙や畳に描いているんですね。

柏田: 畳は最近ですね。ちょっとずつ増えていったり、消していったり。

——消すっていうのは、もともと剥がれていたのをさらに剥がすということで、結局元々の絵はなくなっているという?

柏田: なくなっちゃう。

——こういうのもそうですね?上からさらに。

小川: 描いて終わったら丸めて、という。

——残すっていうような感覚ではないんですね。

柏田: 窓ガラスも、はーって息を吹きかけて描くんです。とにかく描きたくて。材料がないので壁とかに。

トラック06:スタッフ柏田さんと小川さんのまなざし

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「勝山直斗さんのラジオ」をお送りしております。

最後に、施設の事務室に戻って、改めて、柏田さんと小川さんに、勝山直斗さんの表現に対する「まなざし」についてインタビューしました。埼玉のアートセンター集さんが中心になって行っている、障害福祉事業者たちのネットーワークがきっかけで、「問題行動をアートというまなざしで捉えるという考え方を知った」。柏田さん小川さんのその言葉、まさに「まなざし」の獲得のエピソードですよね。そして、壁をなんとか一枚でも取り外して保存したいという言葉はなかなか考えさせられます。では勝山直斗さんのラジオ、最後のトークです。どうぞお聞きください。

——壁紙を差し替えるわけでもなく。

柏田: やっぱり生活の場なので、一番最初の部屋も守りたいは守りたいんですけど、他の方の居室でもあるので、他の人が剥いてしまうのも、止めようがなく。消えていく可能性もある。

——そのあたりが関心深いというか、本当に現場のなかで生まれていますもんね。…今まで勝山さんのこの作品というか模様というかは、基本的には写真パネルで展示して他の方に観ていただく工夫をされたということなんですよね?

柏田: そうですね。障害でいうとかなり重度で、目を離すといなくなっちゃうんですよね。ちょっとあいていればいなくなってしまって。外出するにも職員が手を離せないような子で。最近は力も強くなってきたので、女子職員じゃなかなか難しかったり。通院はなんとか行け

ますけれど。人混みだったりすると振り払って好きなところに行くっていう。そのなかでも描くときは静かで、多動でも落ち着いて集中しているところがあるんです。

——さっきもそうでしたね。（描いている）あの時の流れている時間がすごかったですね。シーンって一瞬して、みんな見ているっていう。

柏田：21日に、この建物を建てた建築会社の方を呼んでいて、壁外せるかなって相談をしようとは思ってて。

——えーっ！

柏田：予算の関係で一回だけになっちゃうんですけど。あの壁が外れるなら、今の状態だけでもせめて一枚キープしてあげたいな、と。多分消していっちゃうんで、本人も周りも。

——すごい相談ですね。

柏田：出入りしている電気屋さんに聞いたら、石膏ボードって外すと壊れちゃうって言われたんですね。それが何とかならないか、建てた人にってことで建築会社呼んで聞くんですけど。

——それ自体すごい。そのやりとりを録音したいくらい。

柏田：何とか外したいんですよね。

——そういう話し合いをしていること自体がすごいことですね。

スタッフ：実際、集のTAMAPの活動に参加したからそこまでこれたっていう感じで。

柏田：そうなんですよ。もっと前から描いてはいて、みんなすごいね、上手だねって言ってたところが、「あぁ、アートっていう見方があるんだ」となったのが本当に最近です。

——すごいですね。TAMAPの活動からこうやってネットワークで視点が共有されて、まさに見方が変わる。

柏田：うまいとしか言ってなかったのに、「アート」っていう。

——いやぁ、すごいですね。

スタッフ：実際ここまですごいんだっていう感覚が職員の中になくて。

柏田：見方によってはとっても問題行動は問題行動なんですよね。壁を剥がすって。

——「止めさせた方がいいんじゃないか」ってことになりがちだと思うんですけれど。

柏田：修繕する暇もなかったけど(笑)。（勝山さんは）顔の傷にもよだれを塗るんですよ。唾液を。冬とか乾燥してくるとますます塗って。あれも唾液へのこだわりが。唾吐きも小さいときは床にぺーっと吐いて、唾をためているときもあったり。

——今はいわゆる唾吐きはやらないんですか？

柏田：今は下には垂らさないですね。

小川：壁沿いで。下の方が多いですね。

柏田：唾を垂らすのはやらないですね。

——洞窟壁画を思い出しますね。絵画の一番最初というのを想起させますよね。

柏田：画材を与えられなかったからっていうのがあるんですけど（笑）

——反省会みたいになってる（笑）

柏田：畳とかこの絵も、決してペンを渡したんじゃなくて、ペンを持っていっちゃったんですよ、知らないうちに。描かせてあげたわけじゃなく、描いちゃった。

——画材がなくても絵が描けるっていう。

柏田：描きたかったんだと思います。描きたくて、描きたくて。

——でもやっぱり、描いている姿はものすごい美しかったですね。それも含めてとても感動しました。

柏田：冬場になって窓が曇り始めると、ハーっと息を吹きかけて、同じように描いています。字を描いたり、絵を描いたり。

——最近、字が好きみたいですね。

柏田：夜空を見ながら体を揺らしながら歌いながら描いていたり。何考えているんだろうなぁと思って。

——この前の展覧会もパネル写真でしたけど、勝山さん自身が映っている映像が出るってことはこれまでなかったですよね。

柏田：ないです。

——あの時間はすごいですね。

——今日、（勝山さんが壁を）剥がすまでには至らなかったのは、そこまで気持ちが乗っていなかったから？

小川：人がいるとやってなかったですね。「やって」って言って今日はやってくださったんですけど、夜な夜なこう…

——静かにちょこちょこやっていって。

柏田：周りが寝静まるんですよね。8時半くらいになるとだんだん静かになっていって。彼、ちょっとふらふらしている時間があるので、そのときにやってたりして。

——だいぶ時間がかかりますよね。

柏田：でもけっこう早いんですよね。

小川：早くなりましたね。

——スピードあがっているんですね！

柏田：3ヶ月とかかからないんですよ。あっという間に一晩でポコポコポコポコ増えていって。

――結構集中してやっている時間帯があるんですね。音とか聞こえそうですけど。ちゃんと夜、寝てるのかなって思っちゃうけど。

柏田：夜、（子供たちは）40人なんですけど、泊まり職員は二人だけになっちゃうんですよ。二人でこの広いところを全部見回りながらなので、勝山さんだけに目を向けることもできず、一人でやるっていうね。それも切ないんですけど、一人ぼっちで描いているところもあるっていう。暇をつぶす方法だったり。

――個室と、何人か寝ているところがあるんですよね。

柏田：はい。勝山さんは今は個室です。下のときは何人かと。

――そういう意味でも部屋が移っていくなかで痕跡が残っているとは。（描いてある部屋が）5つもあるとは思わなかったので、びっくりしました。

――土日は勝山さんはどう過ごしているんですか？

小川：土日も子供たちほとんど全員ここにいて、職員が数人なので、行事があれば出掛けますけども、中でフリーな感じですね。テレビ見たり、DVD見たり、絵を描いたり。絵を描くのも、ある部屋の中に職員がいて、画材出して数人で一緒に。そこから鉛筆なんかが出ると刺してしまうと危ないので、その部屋の中でっていう。

――部屋はどんどん変わるものなんですか？

柏田：たまに変わりますね。相性だったり。

小川：（勝山さんは）前は三人部屋だったんですけど、あまり相性がよくなくて。出ていって鍵を締めちゃったりして（笑）

柏田：ほとんどが相性ですよね。

――そういうことですね。ありがとうございました。

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsプレゼンツ「まなざしラジオ!! in 芸劇」2020年1月11日から1月15日まで。東京都豊島区・東京芸術劇場 ギャラリー2をメインスタジオにお届けしています。

ぎんがさんのラジオ

「ぎんがさんのラジオ」は、Rightsのウェブサイトhttps://rights-tokyo.com/gingaradio/ から聴くことができます

トラック01：オープニング

みなさん、こんにちは。東京アール・ブリュットサポートセンターRightsがお届けする「まなざしラジオ!! in 芸劇」パーソナリティのアサダワタルです。

さて、これよりお送りする内容はこちらです。

「ぎんがさんのラジオ」

ぎんがさんは、オリジナルの「文字列」を生み出します。数学の教科書や妖怪図鑑、カラオケ集、また身の回りにあるチラシなどから言葉を選び出し、組み合わせて描きます。さらにはその紙面がハサミで切り刻まれ、別の紙面に貼られ、コラージュと化していきます。より複雑な文字列が奏でるリズムは不思議と心地よくて、幼い頃から自分なりの字や絵を描き、特別支援学校や放課後デイサービスでも、裏紙を見つけては描き続けてきたというぎんがさん。卒業後も、好きなことをやり続けながら仕事ができる場所を探して、ひまわりばたけに辿り着きました。ぎんがさんの創作は、オリジナリティがありながら、一方でその環境やスタッフとの関わりのなかでその可能性を広げていってるんですね。文字列にしても目の前でスタッフが見ていたチラシや本の内容が彼のフィルターを通じて「サンプリング」されています。また、扱う素材、例えば長い紙やマスキングテープ、トレーシングペーパーな

ど。そういったもののバリエーションもスタッフとのやりとりのなかでどんどん広がっていくんです。アトリエ担当スタッフの佐藤久美子さんは、身の回りにあるものを何でも「遊びの道具」として使いこなす彼の才能を丁寧に見つめ、ときに問題行動とされることも「表現として認められる」ような環境づくりに努めてきました。このスタジオでは、ぎんがさんの作品展示とともに、いわゆる創作に限らない「遊び」に着目した行為の記録写真、ならびに、佐藤さんと施設長の國武洋絵さんのまなざし溢れる音声と写真をお届けします。

まずは、國武さんから、ぎんがさんがひまわりばたけに通う以前から取り組んでいた創作活動について伺いつつ、佐藤さんからぎんがさんのコラージュ作品の特徴を少し伺いました。

トラック02：創作のあらまし

――いつぐらいから、ぎんがさんは字を書（描）いたりというのをやっていらっしゃるんですか？

國武：もう小さい頃からってお母さんがおっしゃっていました。学校でも授業の合間合間に自分なりの字と絵を描いていたということで。相談事業所の放課後デイ（サービス）に通っていたときも、裏紙によく書いていたというお話で。とにかくそういうものが好きで、卒業後一気に仕事に専念するのではなく、そういうものもできるようなところを探しているということで、うちを選んでいただいたということです。

――字は何かを見てではなく、ぎんがさんが思いつくままに描いているんですか？

國武：昔は、自分なりのものが多かった、オリジナルの文字が多かったと先生たちがおっしゃっていましたね。

佐藤：今は妖怪の本とか。目の前の支援している人の影響をけっこう受けているのか、（支援員が）チラシを見ていたらチラシ（の文字）を、とかが多いです。高校の数学Ⅰとか数学Ⅱの教科書とか。あとは、古い辞典とかを見て描いていることもあります。

――図鑑的なものとか、そのときそのときに見ながら新しいネタを仕入れて描いているんですね。

佐藤：どちらかというと、（文字というよりも）記号としてとらえている感じがあるんです。あとは、自分の文字に関わる漢字がわりと多いです。「宀（うかんむり）」であったり、四角が続くものだったりとか。最近は自分で枠組みをつくって数字を組んでいくということがすごく多くて。

トラック03：ぎんがさんと環境との関わり

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「ぎんがさんのラジオ」をお送りしています。

では、改めまして、ぎんがさんご本人の登場です。引き続きスタッフ佐藤さんから、ぎんがさんの創作にまつわる特徴が語られます。実際に使っている道具や、また、ぎんがさんが作り出す文字列のもとになっている本をはじめとした、このひまわりばたけの環境との関わりなど。それではどうぞ。

――ぎんがさん、創作されているのを見せてもらっていいですか？

ぎんが：はい（とも「うん」とも取れる言い方で）。

――ありがとうございます。すごい楽しみです。現物見れるのが。…おぉ、思っていたよりでかい。すごい！

佐藤：自分でマスキングテープで枠をつくっているんですよね。枠をつくった中に描いていて。

――なるほど。先に枠をつくっている。

佐藤：枠つくっていますね。あとからつけているときもあるので、あれ（順番）はないと思うんですが。先に描いてから枠をつくっている場合もあります。

――どちらのパターンもあるんですね。先に枠をつくって中に描くこともあれば。ぎんがさん、これは何をつくっているんですか？

佐藤：何つくったの？って。

ぎんが：えーっと、かびかび。

佐藤：かびかび？

――かびかび！？

ぎんが：うん。

――か、び、か、び！？かびかびってなんだろう。どういう世界なんだろう。ぎんがさんしかわからない世界かな。

――「ナ」？

佐藤：「オ」かな？

――「オ」か。「ゴ」？

佐藤：「オゴドン」？「ゴードン」？

――「ゴードンに」？「オゴドンに」？すごい、なんだろうこれは。

（ぎんがさん二人のやりとりに「うん」「うん」と反応している）

佐藤：未知数なんですよね、できることが。でもいつもすごいことをやっています。

國武：「こういうものをつくって」ってお願いするとちょっと嫌がるんです。

――オリジナルのものをつくるんですね。

佐藤：そうですね。好きなものをつくっていいよって言ったら、メキメキと。

——形も柄とかも何もかも一から新しいものをつくりたいっていう感じですね。

佐藤：そうですね。誰もこういうのやってなかったんですけど（笑）。一人でやり出して。

國武：でも、いいもので。

——もともと描くだけじゃなくて、切ったり貼ったりということも、ぎんがさんのなかでの表現として定着されているんですか？

佐藤：いや、そこまで（ハサミを使って）切れるとはわからなくて。渡してみて、無理なようだったら別なものに変えようと思っていたんです。そしたら思いのほか自分で位置を考えて自分で切っていて、これ、出来るんだ、と思ってそのまま。じゃあついでに貼れるかなと思って糊を渡したら、糊も自分で貼り出しているので。

——道具が増えたんですね。

佐藤：そう、道具が増えて。使い方も良くわかっているんです。ただ、左利きなのでさっきみたいにピッと破いてしまってることもあるんですけど。両利きのハサミを渡すと上手に切るんです。右利き用のハサミはストレスなんですよね。ハサミ変えたらけっこうスムーズに切り出していました。

——これはやらないというのはありますか？

佐藤：絵具はあまりやらないですね。汚れるから。

——汚れるから。そういう方いますもんね。

佐藤：けど糊は平気なので。

——（笑）色がつくのが嫌なんですかね。どうなんだろう。

佐藤：手を洗う行為があまり好きではないという感じは受けますね。陶芸のときも、洗いたいけど、こういうふうには洗いたくないという。汚れたくない手段として、これなのかなと思っていたんですけど。

——本人の中でそういうセーブがかかっている可能性が。

——ホールニューワールドって書いてありますね。

佐藤：カラオケ本見たやつかもしれない。

——フランク永井『夜空ノムコウ』って。

佐藤：カラオケの機械があるんですけど、これをたまに見て。けっこうありますよね。

——ありますね、『ガンダーラ』とか。

佐藤：（笑）こっちもカラオケリストを描いているやつがあるような。

——そっか、そっか。なるほど、謎が解けるやつがありますね。カラオケリストを描いている。

佐藤：“たっぷりミルクの何とかプリン”とか描いてるのを見ると、多分目の前にあった生協のチラシを見てたんだなとか（笑）

——そのときに見た資料がそのまま反映されていたりもしている。

佐藤：『高原列車は行く』『ジングルベル』とか。こっち、カラオケ多いですね。

——ほんとですね。

國武：たまたま目の前で見ている人がいる。

——なるほど。それを見て影響を受けて。それで入ってきて描く、みたいな。

佐藤：周りにすごい影響されているので、見てはいるのかもしれないです。

——本人がここにある情報を何かしら読み取ったものが出されていで…

佐藤：そうですね。インプットしたものが紙でアウトプットされているような状態というか。オリジナルで。フィルター通して。

——かなりフィルター通ってますもんね。字の感じとか、言葉も。

トラック04：表現と心持ちの変化

（ジングル挿入）

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「ぎんがさんのラジオ」をお送りしています。

ぎんがさん、ひまわりばたけで過ごされている様子をみると、とても楽しそうで。スタッフさんとのコミュニケーションも取りながら、すっかりこの環境に馴染んでいる様子ですが、実は、ここに通いだした当初は、顔をあげることもなく、内向きな感じだったよう。取材時は通いだして半年の頃で、その間の変化について、施設長の國武さんに聞いてみました。

國武：うちに来出した頃は、常に顔を隠していたんです。

——最初に来られたときですか？

國武：お家でもそうなってしまってたと聞いています。高校3年生になったら急に隠れるようになっちゃったと、お母さんたちも心配されていたので。そのときから、ちょっとずつこういう（創作）のも少なくなっていったというのも言っていて。多分、次の仕事場に向けて動き出したときに、自由がなくなったのかもしれないですよね。こういう時間が少なくなってちょっと内気になってしまったのかなって。

——ここではかなり今自由にやっていらっしゃる。

國武：佐藤がやってくれているように、創作をやりだしたら、ちょっとずつ顔が上がるようにはなってて。前はずっとこうだったもんね。

——顔を隠すって感じ。両手を横にして。下を向いたりもしていたけど、それがなくなったと。

國武：自信が出てきているのかなと。あと、自由にできるっていうのが彼のモチベーションに

なっているのかなと思います。

——ぎんがさんが通いだして半年くらいですもんね。そっか、そっか。創作をしつづける、自分の好きな何かをつくり続ける場があることで…

國武：そうですね。それによってルーティンがある自主製品の制作とかにも、集中力ができて長くやれていたりするので、ここがあってこそのお仕事だったりが出来ていくんじゃないかなと思ってます。

——かなりはっきりと創作がペースとしてあったんですよね。ご自宅だったり、学校だったりで。

國武：大好きなことなんだと思います。

——ぎんがさんが最初に入ってこられて、特別支援学校の先生から引き継ぎもあったと思うんですけど、創作活動をしていくっていうのは最初から思っていらっしゃったんですか？

國武：そうですね。これが好きで、休み時間もずっと続けているというのは先生からもお話があったので、そこを閉ざしてしまうと彼は内にこもってしまうんじゃないかというのがありました。そこは自由にぎんがさんの可能性を見ながら。でも親御さんとしてはぎんがさんはまだ若いので、次のステップとして就労に向けていきたいということなので、そういうところでやっていけたらというお話はしています。

——最初に、こういう文字の創作活動を見たとき、どう感じましたか？

國武：やっぱりおもしろいなと思いました。佐藤の引き出し方がうまいのもあるんですけど、ご本人の頭の中はすごいおもしろいものだなと思っていて。幾何学的な字の形は本当におもしろいな、と。あと楽しそうに書いているのできっと何か色々考えながら書いているんだろうなって姿はかわいらしく。

——こういう作品というか、文字を描かれたり、コラージュされたりとか、ここに来て（表現が）広がっていますよね。ちょうど小平の方でも出展されていますよね。いろいろな方に見てもらうというのはここ最近始められたんですか？

國武：そうです、ここ最近ですね。去年はまだ開所したばかりだったので数点だけ出させていただいたりしていたんですけど、今年度は本格的に、佐藤を中心にやっていて、どんどん出品できる場所には出していっています。

——人に見られたり、表現おもしろいねって言ってもらうことで、ぎんがさん自身にも変化はあるんですか？

國武：今日の取材の話をしていた時もうれしそうではいたので、そこはモチベーションにつながっていると思います。私自身が生活介護事業でアートが必要だなと感じたのは、褒められる場所が障害のある方には重要だと思っていて。自分の作品が褒められてダイレクトに嬉しいのは、やっぱりアートによるものだと思うんですよね。色が好きな利用者さんや字が好きな利用者さんは結構いたので、なにかちゃんと発表できる場があって、褒められる場所になればうれしいなと思っていて。それがあることによって本人たちの次のステップにつながっていくのが大事かな、と。ぎんがさんは、それが今一番目に見えてわかる。当初は顔を上げて歩いていなかったので、自信につながってきているんじゃないかなと思います。

トラック05：遊びの達人

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「ぎんがさんのラジオ」をお送りしております。

この会場でも展示されているぎんがさんの記録写真。明らかに「創作している！」って感じのものもありますが、「遊んでいる」感じのものもあるでしょう。そう、ぎんがさんの表現は日常のなかの遊びと地続きのようなんです。そのあたりのぎんがさんの、クリエイティビティ、発想力を佐藤さんに語っていただきました。

佐藤：なんでも遊びと創造にしてしまうんです。

——本当ですね。いろんな道具を自分で遊びに見立ててやっていらっしゃるんですね。

佐藤：そうなんです。どんなものでも遊びに変えて、自分の創作に使うんですよ。ものづくりは遊びの一環なのかなということもありますかね。

——創作で他の方が見ているものとかいろいろなものが影響しているというのは、ぎんがさんがひまわりばたけに通うようになって、他の利用者さんとの関係とかで作品が変化していってるのかなと聞いていて思ったんですけど。

佐藤：そうですね、それもあると思います。見ていないようですごく見ていらっしゃる方なので。どこでそれ見ていたんだろうと思うようなものを持ってきたりとか。それ、他の利用者さんが使っていたもんね、というのもあったり。見ていないようで見ていて、自分のものにしていることがあると思います。今日はずっとブランコのところで遊んだりしています。虫取り網で。

——虫取り網を使って自分なりに遊んでいたんですか？

佐藤：机に置いて、重石を置いて。水風船のヨーヨーを風船にしてあるのが残っていたのでそれを投げて入れるという遊びをしていました。

——夜店みたいな（笑）

佐藤：そうそう、でもそれを自分で考えて遊んで、お片付けも自分でします。とても遊び上手で、とても発想が上手なんでしょうね。豊かなんだなと思っています。

——わかりやすく字を描いたりとかの創作もですけど、木の枠を使って積み木にするとか、虫網の話とか。こういうのを書くことといろんなものを使って遊ぶことの境目があまりないのかなと思いました。

佐藤：私もそれは思っています。どれもが本人の中では遊びだと思っていて。

——なんでも使える道具というか。

佐藤：うんうん。

トラック06：佐藤久美子さんのまなざし

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「ぎんがさんのラジオ」をお送りしています。

スタッフの佐藤さんは、ぎんがさんに限らず、ひまわりばたけに通うメンバーさんの表現に対する「まなざし」がとても豊かな方です。障害福祉現場に勤めて10年ほどという佐藤さんは、日頃現場で、どんなことを考え、どんな工夫を施しているのか。メンバーさん一人ひとりのストレングスを引き出すために、スタッフができることとは何か。ぎんがさんのラジオの最後のトークとして、改めてうかがいました。それではお聞きください。

――佐藤さんは、基本的にアトリエ活動を担当されているんですか？

佐藤：はい。支援もしているんですけど。

――もともと美術をなさっていたんですか？

佐藤：いいえ、全然別のことをやっていて。5年くらい前に、前の職場なんですけど、（アート活動の）担当になって。金子光史先生（アートの先生）がいるんですけど、その方が（職場に）よく来てくださってそれで活動の概念が変わったという感じがあるんです。その前は、写真のスタジオにもいたんですけど、大成もしないし…

――もともと写真やっていらっしゃったんですか？

佐藤：写真のスタジオマンだったんですよ。けど、嫌になって。若干中二病な（笑）。もういいやと思ってバックパッカーになろうって。

――いろんな変遷があったんですね。

佐藤：戻ってきて、すぐ結婚したんですけど、そのときに代理店でウェブの校正とかやっていたんですが、子供がいるとなかなかできないというのがあって。そこで見つけたのが、障害者施設だったんです。

――そういう流れで出会ったんですね。

佐藤：障害者施設は10年くらいしか働いたことなくて、そのうちの5年はアートの活動に関わらせてもらっています。美術的要素がないとダメなんじゃないかとか、美大出ていないとできないんじゃないかというフラストレーションの中で1年間やっていたんですけど、その金子先生に会ってから、どちらかというと支援の要素が強いと気づいたときに、一気におもしろくなった感じです。

――ここに通っている方のいろんな創作活動をご覧になっていると思うんですけど、一人ひとりに合った…例えば、ぎんがさんの場合だったら使える道具とか選択肢が増えていることと比例して、トレーシングペーパー使うとか作品が多様になっている感じがしたんですが、その辺で心がけていることはありますか？

佐藤：心がけているのは、本人が持っているもの、ストレングスを高めるというか。ここに来ている人で最初から絵を描けている人はいないので。描かなくてどうやって興味を持ってもらえるかが大きいです。しかも美術が嫌いという人も多いです。健常者でも障害者でも、授業で美術が好きかと聞いて手を挙げるのは2割なんですって。そこは健常者も障害者もほとんど変わらないという事実があって。苦手意識のある「美術」という固定概念をまず取っ払うところから始めます。「表現」と「美術とアート」は別、っていう。

――何をやってもいいんだよ。答えがあるわけじゃないし、っていう。

佐藤：できたものをどんなものでも「そんなのできるんだ、すごいね」って高めていくのが強いのかな。そこからどんどん、自分から「ああしたい、こうしたい」という思いが沸いてくるというか、本人のストレングスになっていく。認められたことがそれが次の欲求につながっていくというのを重視しています。どちらかというと支援的要素が強いんじゃないかなと。出来ることをプラスしていくというか、なんだろう。ただなんとなくやらせていくのではないというか、画材で変わるのかとか、額に入れて変わるのか、とかで考えています。

この方だったらもっと太いペンで描いていたし、絵の具も使っていたんですけど、彼はこんな細かいのを筆で描いていたりしたので、だったら0.5以下のペンで使った方がやりやすいでしょ、っていう感じです。うまく言えないんですけど。重身（重度身体障害者）の方もいるんですが、ボールにビー玉入れて一緒に遊ぶとか、それを投げたら怒られるようなことをしているのに、みんなが上手だねって言ってくれるとか。

問題行動から生まれるもの、別に問題行動でもないんですけど、行動から生まれるもの。机の上に箱があって落としたら怒られるじゃないですか、でもわざと置いといて、落としたら「すごいね」って本人が嬉しくなっていく。認められているんだっていう。集中できることって、楽しいこと以外はないと自分も思っていて、つまらないことには集中できないんですよね。本人が何度も何度も描いていたり、できる力を最大限に使うと、時間が経って面白いかもなというものが出てくる感じがしています。

――ぎんがさんに関しては、素材を変えていったりする中で、新しい発見がどんどん生まれていっている感じですかね。

佐藤：彼はクリエイターじゃないですか（笑）

――何でも使える感じですね。

佐藤：彼は何でも使えるし、何でもできるし、ただ手が汚れるのは嫌いなんだなというくらいで。だからけっこう自由にさせています。もちろん机（の上）で寝ていたら怒るとか当然の注意はしていくけれど、好きにどうぞって。

――それは、最初から？

佐藤：いや、最初は施設長が言っていたように、顔を隠していたり、自分の思うことができている感じがなかったんです。集中力も続かなかったし。けど、好きにやらしたらやるんだな、と。トレーシングペーパー、こういう大きいものって家で見なくないですか？

――ないです、ないです。トレーシングペーパーは意識的に持っとかないと。

佐藤：わりと面白いものは揃えているんですよ。こんなに大きいものは見たことないとか、クーピーもこんな色見たことないとか、そういう意味ではまず興味をひくものを持ってくる。あんな長い紙ないでしょ、こんな筒ないでしょ、とか。これは触ってみたい、いたずらしてみたいというものを揃えています。ぎんがさんも、これ（トレーシングペーパー）は、はまったんでしょうね。机一面に貼っていたので。「好きにどうぞ」って油性ペンを転がしておいたり、いちいち過剰なくらい画材を揃えている場合があるんですよ。

――結構画材にお金かかりますよね。

佐藤：かかるけど、安いの探して来たりしています。

――たしかに、画材で引き出されるというか。さっきおっしゃったみたいに、「なんだろう、これ」みたいな感じで。

佐藤：そう、興味がわくというとか、おもちゃの延長みたいな感じで、これは触ってみたいとか。こんな魔法の杖みたいなのやってみたくないですか？ぎんがさんは、これに筆とかつけて描いたりするので。

――なるほど。でも、ぎんがさんは、この間、1時間ちょっと滞在している間にも、いろんなものを使って、ずっと創作していますね。

佐藤：何でここにほうきがあるんだろう？これがあるんだろう？というのはだいたい彼で、この前なんか、砂場に水風船を埋めて帰っていったんですよ。超迷惑〜と思って（笑）。全部水風船。水風船生えるのかな？とか言って（笑）

――いろんな道具を使っては、移動して、またやり散らかして、また戻って来て、みたいなことをひたすらやっているんですね。

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsプレゼンツ「まなざしラジオ!! in 芸劇」2020年1月11日から1月15日まで。東京都豊島区・東京芸術劇場 ギャラリー2をメインスタジオにお届けしています。

関根悠一郎さんのラジオ

「関根悠一郎さんのラジオ」は、Rightsのウェブサイトhttps://rights-tokyo.com/sekineradio/ から聴くことができます

トラック01：オープニング

みなさん、こんにちは。東京アール・ブリュットサポートセンターRightsがお届けする「まなざしラジオ!! in 芸劇」パーソナリティのアサダワタルです。

さて、これよりお送りする内容はこちらです。

「関根悠一郎さんのラジオ」

幼い頃から絵を描くことも、オブジェをつくることも、庭を作り野菜を育てることも「当たり前にやってきた」という、現在20歳で山梨県甲府市在住の関根悠一郎さん。母親の涼子さんをはじめ、母方の祖父母が培った文化的環境の影響を受け、とりわけ多くの絵本や図鑑から創作の源を得ています。多彩な作風のなかでも「船」というモチーフが扱われることは多く、10代の間に数年かけて、実際に自分が乗れる船の制作を行いました。しかし、その夢を周囲から理解されず、また素材や道具、そして、今の自分の技術における理想と現実の遠さに悩むことに。17歳で「一旦完成」させたのち、絵を描くことも船をつくることも休み、現在はひたすら世界中から古道具を収集し、工法を研究する日々を送っています。

関根さんの大きな関心ごとは、「病を治す独自の方法」です。小学校高学年から幻聴と幻視が現れ、2010年にアスペルガー症候群、2013年に統合失調症と診断された彼は、独学

で「森田療法」に辿り着きます。人間の心は、生の欲望と死の恐怖が表裏一体のものであるという考えに共感し、生の欲望に着目した思考への転換を図り続け、創作への向かい方も「何をつくるか」から「どうつくるか」という問いへと変化していきました。

このスタジオでは、ときに病に苦しみ、ときに生きのびるための道を根っこから問い直し、「つくりかたからつくる」ことにこだわり続ける悠一郎さんの船にまつわるドローイングや実物、収集中の道具や絵本を展示します。また彼の創作と治療にとことん寄り添う母・涼子さんの音声と写真を含めたまなざしもご覧下さい。

まずは、船づくりのきっかけについて、お二人に伺いました。家庭環境の変化に伴う病状と創作にまつわる変化などもあわせてお聞きください。

トラック02：「船」との出会い

関根：うちの幼稚園の先生がドクロの旗を作ってね。

母：悠が、「骸骨、骸骨」ってすっごく好きだった。それで私がお弁当箱にいつも骸骨の絵を描いた紙をいれて、持たせたの。私と離れるのがすごく嫌で泣いていたから、一日いつもその紙を持っていたって幼稚園の佳代子先生が言ってた。それから佳代子先生がいろいろ作るようになったんだよね、どくろの旗とか。優しい先生で。そこから始まっているのかな。

関根：うんうんうん。物語にはよく船が出てくるじゃない。あと、海の旅とか面白そうだなってずっと考えていた。

母：船で航海する絵本とかね。

――物語というのは、おばあちゃんが読んでくれた絵本とかに船がよく出てきたりとか？

母：そうそう。あとは飛行船とかも出てくる。

関根：飛行船とかねぇ。

母：空飛ぶ船。そういうのもあるかも。画集の中に、空を飛ぶ魚がいっぱい出てくるじゃないですか。あれはみんなそれの影響かな。

――絵のモチーフに、船的なものがいっぱいあるなって。モチーフとして船がつくられていくっていうのは、ずっとつながっているんだろうなっていうのは画集を見てもずっと思っていたことなんだけど、現物の船のオブジェというよりは本当に乗れる船をつくろうってことになるのがすごいなって。

母：これ一応、浮かべたら大丈夫だった。水漏れなかったし。

――いつぐらいからつくったんでしたっけ？

関根：こっちにあるんだけどね。ポリネシア？ 沖縄の美ら海水族館の隣にポリネシアの船を集めた博物館があって。この船がすごかったんですよ。ものすごくいいものでね、何しろ心がこもっているというか。だんだんだんだん、芸術家っていうのが権力を持つようになったというか、社会で芸術というものの価値が高まってくると、わざとらしかったりとか、心がこもっていないものが逆に増えちゃうような気がするんですよね。商売になっちゃって。

母：これが一番最初。

――お。

関根：ポリネシアの船は本当にね、楽しんでるって感じだった。見ているだけで楽しくなってくるんですよ、形をね。その船がポリネシアからいろんなところに人が行ったりするのに使ったり、道具ではあったけど美しいもので。それを見てね、あぁやっぱ、もうつくらなきゃなと思ってね。そろそろつくる時期だな、と。

――自分の中でもつくる決心がついたんだ。

母：次にこれをこういう感じで。曲線が難しいみたいで。ここは貼り合わせないといけない。水が漏れないように。だよね？

関根：船がね…設計図を何百枚も描いたけど、全部合わなくて頭の中で。大量に描いたんだけど、最後一枚うまくいったのがあってね。何しろ、それの模型がこれ。いろんなところに持って行ったから帆柱が消えちゃった。

母：モンブラン号って名前がもう決まってたし。マルバッチ・モンブラン号だっけ。

関根：そう、マルバッチ・モンブラン号。

母：マルバッチってどういう意味だっけ。多分おばあちゃんが読んでくれた本に、モンブラン号っていう…

――「おばあちゃん」「絵本」が、でかい存在ですね。

母：そうですね。毎日こういう同じ本を…何回読み聞かせした？私もしたけど、（祖母が）本当にやってくれるんですよ。何回も何回も何回も。ずっと読んでくれる。膝にのせて。

――この読み聞かせを、涼子さんも悠一郎さんにしていた？

母：やった、やった。おばあちゃんもやったし、私もやったし。おばあちゃんは寝付くまでベッドの中で何冊も読んでくれて。実はうちの子ね、苦しいことがたくさんあったり、プラスα、アスペルガーもあったじゃないですか。あまりにも苦しいから、楽しい絵を描くことでその世界の中に入り込むみたいなところがあったんですよ。幼少期の絵が明るかったりするのはそれで。だけど離婚してこの家に暮らし始めて、3人（母、悠一郎、弟）になって、そういう理不尽なことが一個も起こらない世界に変わったんですよね。調子は悪かったけど。そうすると絵を描く必要がなくなったっていうのもあって。あんまり描かないでいられるようになったっていうのはあるよね。

関根：そう。具合が悪くなって、良くなるときに、だいたい描くんだよね。

母：具合がすごく悪くなって、少しずつ上っていって良くなるじゃないですか。そうしたときにすごい大作みたいなのが出るんですよ。この中でも大作は数点なんですけど。その前は一番具合が悪い状態を通ってますね。

別居して離婚してから何年になる？7年か8年になる？

関根：まぁ、そのくらいじゃないかな。

母：10歳のときだもんね。9年くらいかな。全然描く必要がないんだよね。

関根：っていうか、思い浮かばない。

――思い浮かばない？

関根：何も降りてこない。うちは絵をどんな風に描こうとか考えたことは一回もなかった。今まで。

――なるほど。ただ降りてきてそれを描くって感じ？

関根：思いつくんですよ。で、描く感じだから、描いているときは絵のことはちっとも考えていない。ただ単にパッと思いつくから描いているだけで他のことをいつも考えていて。

母：手が勝手に動いていく感じなんだって言ってたよ。

関根：そう、そうだね。

母：いつもリビングで描いているんですよ。私がいたりする方が安心で。個室で集中して描くという感じではなくて食器を洗っている音が聞こえてきたりとか。ほとんどの絵が短期間だよね。30分とか1時間以内に描いちゃったりとか。

関根：1時間以内だね。

母：題名も決まっているし、途中で変えることもないし、色も決まっていて、だから色を付けないときは絶対付けないし。誰がすすめても。

――そっか、だからもう描こうと思って描くっていうよりも、描くときは勝手に描いているみたいな感じで。

関根：そうですね。

トラック03：船づくりと病の始まり

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「関根悠一郎さんのラジオ」をお送りしています。

保育園に通っていたころから「船」というテーマへの関心を深め、絵を描き、設計図を描いて、まずは小さな模型をつくり――このスタジオにあるマルバッチ・モンブラン号がそうですね。そして実際に水に浮かべ人が乗ることができる現物の船――スタジオの中央にあるこの船。そういったものをつくろうと思っていく過程をお聞かせいただきましたが、次はその船づくりの「夢」にまつわる人間関係の悩みについて。それは小学校のときも、10代後半に一時期通った船づくりの工房においても続きます。話は徐々に悠一郎さん自身の病の具体的な内容にまでつながっていきます。それではどうぞ。

母：小学校の卒業式のちょっと手前に、6年生の頃かな、友達に「うちは自分で船を作ってね、それを河口湖か山中湖に浮かべて、進水式をやるから、できたときにはみんなを呼んで、サイダーを飲もう」って言ったら、けっこう友達に引かれたって。ショックだったって。「そんなことできるわけねーだろう」とか、「何馬鹿なこと言ってたんだ」とか。

――まだ川越にいたときですかね？

母：いや、こっちですけど。笑うんだよ、その夢を友達が。「親が協力するわけないだろうとか。船なんて作れるわけないだろうとか。でもみんな12歳とかまだ若いのに、なのになんであんなになっちゃってるんだろう」って言ってた。「親が船をトラックに載せて河口湖まで運んでくれるわけない」とか言ってたって。そのあと学校に行かなくなっちゃった。だから中学も行かなかった。みんなが大人になりかける時期かな。

――小学校は行ってたんですか？

母：小学校はなんとか行ってました。まだみんな小学生って子供の心を持っているから。特にこっちは田舎だったから。でも卒業する頃に、船の話をそういう風に言われて。周りのみんなが中学くらいになると現実的になってくるのかな、だんだん。

関根：それにね、その頃調子が悪かったの、精神の。

母：そうなんだ。

関根：具合が悪くなってきて、幻聴も始まったし、そのときに。

母：そうかそうか。その頃統合失調症が始まったから。

――小学校高学年のときくらい？

母：そう、無理に行ってたんだよね。

関根：無理にやって病気がひどくなった。限界までやっちゃってね、無理しちゃって。

母：（船づくりを学びに行ったとき）私がついていけなくて、ホテルに泊まってたんですよ。中学生って言えば、まだ子供じゃないですか。親が見ていなかったら何やってもばれないでしょう。なにか悠が木にこだわったからなの。この子が一本一本、いいやつを引っ張ってくるとか。いいやつを切ってくださいって頼んだりとかしてて。面倒くさいお客さん、向こうからしてみると。でもひかないでしょ、これ欲しいですとか言うから。だから私が見ていないところでいじめられたみたいなのがあって。

関根：疲れたね。

母：それで船が完成する前に引き取ったんですよ。トラックで取りに行って。

関根：その時に具合が悪くなった。プラスαで。

母：そのときは人間が嫌なものだと思っちゃって。それでこの家に来たけれど、でも病気が始まっていたから、つくれなくなっちゃったんですよ。つくっていると声が聞こえてきて、失敗するぞって言ったりするみたいで。一本もくぎも打てなくなったし、何にもできなくなっちゃって。

関根：強迫観念症と統合失調症があってね、二つが入り混じっててね、お医者さんもわかってなかった。わかんないね、お医者さん。

母：何しろ船を成功させなきゃいけないという気持ちがすごく強くて、つくろうとすると声が聞こえてくるみたいな。

関根：記憶は入ってくるんだけど、忘れて出ていかないの。うちが絵が描けるのもそれが吉と出てくるんだと思うけれど、こういう部品とか見ると…

母：覚えちゃうもんね。

関根：覚えているし、そっくりに描けるから。

――そっか。

関根：いわゆる海馬が壊れてるんだよね。

母：デジカメが頭の中に入ってるのかなってちっちゃい頃思ったりして。外で遊んでいると葉っぱの血筋の後ろの模様まで覚えて描いたりするから。

関根：そっくりに描ける。

母：その代わり、苦しいことも入ってきちゃう。まぶしいとか寒いとか。全部入ってきちゃうから。

関根：第二次障害を起こしやすいんですよ。トラウマってみんな知ってるし、その状態じゃないのに、似たようになってるとその状態と同じような感情だけが出ちゃう。そのサイレンが過剰反応しやすくなっちゃったのが、だいたいの精神病の基礎なんですよ。統合失調症も、強迫観念症なんかもそうなんですよ。例えば、ただみかんがあるだけなのに、触ろうとすると怖いことがあるような気がする。みかんを触ると誰かが死ぬような気がするっていうのが、声になって出てきたりとか。そうすると、誰かが死ぬ決断をするときくらいこわい。それがね、一日中、出るんですよ。ベッドに入ろうとしてもなるし、服を着ようとしても怖いから一日中裸でいたこともあるし。スーパーに行くのでも大変。一個一個の野菜を選ぶのも。本当に大変でね。前までね。でも今はよくなった。完全に治りはしないけど。よくなった。

母：いっときトイレとかお風呂も行けなくなったし。

関根：行けなかったよね。外でしてたよね、トイレ。

母：階段を上るときも、怖いから、ママ、手をつないでほしいって言って手をつないで上っていたりしましたよ。

トラック04：病をなおす独自のやり方

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「関根悠一郎さんのラジオ」をお送りしています。

次は、悠一郎さんが統合失調症と向き合い、自らの力で改善してゆく、その彼なりの方法について、語ってくれます。

関根：あるとき気づいたの。病院に行っていると、何年も前から同じ人が同じ薬をもらって、同じ顔しているの。治らない。一向に。良くならない。何かが間違ってるんだよ。自分でやるしかないなと思って。精神学とか難しいし。人間は他のものを見るのは得意なんですよ。カエルはいつ産卵するだとか。人間が人間自体を見ることが難しいんだよ。自分自身だから。うちはね、あんまり人間観察みたいなのは得意じゃない。今でもよくわからないし。だからずっとやってなかったんだけどね、そのときはこりゃダメだな、やらなきゃと思ってね。やったね。

母：勉強したんだよね。森田療法とか。

関根：精神学の本は全部読んだ。

母：全部読んだよね。

関根：知らないのはない。ほとんど。森田療法って知ってますか？でもね、森田さんがかなり昔の人でね、森田療法って言っていても森田療法じゃないのがほとんど。

――森田療法っていうのはどういう療法なんですか？

関根：なんて言うのかな。まずヨーロッパのやり方が、どんな人でも、なにか症状が出たと。例えば夜眠れないとか。そうしたら、眠れるように自分を変えるの。変えるところは自分なの。自分が変わる。眠れるように。自分が変わるための薬、自分が変わるためのセラピーだとか、カウンセリングだとか。何にしろ変わるものは自分なの。森田療法は、自分は変われないと。アドラーが言ったのは、水を飲みたくない馬に水は飲ませられないって。だから水を飲ませられない馬にするのはやめようって言ったんだけど、森田さんは、水を飲ませたいと思っている人間も変われないって言ったの。環境を変える、場所を変える、注目する場所を変える。

母：自分は変わらないけど。

関根：自分は変わらない。注目する場所を変わると、また変わってくるっていう話。そうすると知らないうちに病気が消えているっていう話。簡単に説明するとね。

母：新しいことを入れるっていうことでしょ？

関根：うーん、新しいことを入れるというよりは…

母：私で言えば、ずっと家にいたけど、週一でいいから、これは楽しいなと感じる趣味を入れてみるとか。そういうことじゃなくて？

関根：簡単に言うとそうだね。ただ、病気になっている場合はそれができないから、病気なの。そういう新しいことを入れようとすると苦しみが発生するから入れられない状況なの。それをうまく入れられるようにするっていうのが、森田療法なんだよね。

母：どうやって？

関根：まぁ長い、ここから話が。2時間スペシャルになるからやめたほうがいい（笑）。何しろ、人間には生きる欲望と死ぬ恐怖が、ごちゃまぜになって、一個の感情になっていると。何かがいいとか何かが悪いっていう感覚は感覚であって、感覚ってものは決して正しいもので

はないけど、その人は何かっていうと感覚であるって考える。だから、感じていることは正しいかどうかはわからないけれど、そう感じていることはあなた自身ですよ、っていう考え方。だから、今のアメリカの療法は、あなた自身を変える療法なの。感じ方を変える療法だから。そうすると、無理が出る。なんで眠れないかというと、他の原因があるから眠れないの。眠れないのを薬で押さえつけても、薬がなくなったとたんにまた眠れなくなるから。だからその療法は儲かるんですよ。薬屋が儲かるの。日本のお医者さんもそのアメリカの対処療法が基本となって学校で教える。そこから始まっているから、日本のお医者さんが全部間違っていると言ってもいい。

母：悠さん、すごい過激な発言（笑）

関根：過激な発言だよ、うちは。なんでかってその人たちは治せてないもん。自慢しているみたいだけど、うちは、ほぼ治らない、90%かもっと治らないと言われている統合失調症と、同じくらい治らない強迫観念症を薬を飲まず治したんだから。森田さんの考え方だったり、いろいろな考えもあるけれども。

母：ママがいるしとか言って（笑）

関根：まあね。

――まあね、って（笑）

母：いつもサポートしてるじゃん（笑）

関根：そうそう、サポートね（笑）

トラック05：伝えたい大切なこと

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「関根悠一郎さんのラジオ」をお送りしています。

悠一郎さんは、絵を発表することや、こうしてラジオで話してくれていることも含めて、今この社会に何を伝えたいと思っているのでしょうか。基本的に「絵は日記みたいなもので、できれば他人に見せたくない」と語るその一方で、おそらく特異な才能を持ち、独自の精神的経験をした立場だからこそ、伝えられることがある、とも考えているようです。ここはこのラジオでは、もっとも大切なところだと思います。ぜひじっくり聴いてください。

関根：うちがやりたいことのもう一つはね…。今ね、それでひどく苦しめられているんですよ。アメリカの製薬会社のせいで、人が。なんだろう。自分で考えることをしてほしいね。これがいいですよ、とは言えないの。これがいいですよって勧めるとそれが腐敗するから。みんなが使うようになると金が絡んできて。何が正しいのかってその人によって違うから、それを探すようにしてほしいってことを発信したい。でも今はそのタイミングじゃないけどね。いつかもしかして絵が有名になったりして、発言権が出てきたら、うちに。そういうことは広めたいなと思っている。あとは食べ物をよくしてほしいってのを広めたいね。だからね、あれがいい、これがいいと思うよりは、自分の湧いてきた感情はどっちなんだろうって見るんですよ。生きる欲望か、死ぬ恐怖か。おいしいものを食べたいと思ったときに、食べないと調子が悪くなるだろうなとか、おなかがすいて向こうに着くまでの間に倒れちゃうんじゃないかっていうどちらかというと悪い方、死ぬ恐怖の方。もう一つは、おいしいものが食べたいっていう生きる欲望の方。両方がミックスになって、人間って感じるんですよ。死の恐怖があまりに大きくなっちゃった状況が、精神病なんですよ。だから、生きる欲望に着目することは悪いことじゃないって言いたい。ほとんどのうつ病の患者さんも、統合失調症じゃないけど、強迫観念の方も、禁欲主義者なんですよ。自分が色々望むのは悪いことだと言われて育ってきたというか。親からとか、周りからとか。欲を出してハングリーになっちゃだめだよ、汚らしいよ、ってメッセージを受け取り続けて育った人がなるんですよ。それだけじゃないけどそれも原因して。「生きる欲望」に率直に生きることはいいことだと思っている。うちが汚いものが嫌い、貧乏なのに高いものを買いたがる、と。それは傍から見れば贅沢だとか、まぁ、贅沢なんだろうけど、だけど、生きる欲望に率直になっていると。自分が幸せになることはほかの人に迷惑はかけないし、自分の幸せが誰かに伝染してくれればすばらしいと思うんですよね。禁欲主義にならずに。だからこうやって家計が赤字なのに道具も僕そろえちゃっているし。このままじゃ無理だから今度から自分でタダで作れるようになる技術も今学んでいるし。だから、だんだん、価値観が病気でひどい目に遭っているうちに、正しいのか間違っているのか自問自答するようになって進化したという感じですかね。

――そうかそうか。

関根：だから、「生きる欲望」に着目していこうかなと思って。

――悠一郎さん、今まで個展とかやってきた中で、取材されたりとか、画集の中では、病気のことも出てくるじゃない？出てくるけど、作品を展示するときに、わざわざそれを前面に出すことはないじゃない。

関根：まぁ、確かにね。

――僕もいつもそこを思っていて。でもどこかで、そんなに表現された絵とかと、本人が生きてきた人生って、作品は作品として独立して見るもんだとかって美術にはよくあるけれど、そんな簡単に切り分けられないと思っていて。

関根：まぁそうですよね。

――その人の人生がいろんなレベルで。病だけじゃなくて。

関根：うちの中でもそれは分裂しているんですよ。うちの方法を知ってほしいというのはあるの。

――方法？

関根：病気を治す。結構大変だから。自殺する人も多いし。病気になっちゃうと。うちもスーパーに行くときは、きつすぎて行けないから。痛いと忘れるんですよ。だから自分も画鋲を指しながら行ってててね、スーパーに。それくらい大変だからね。だからうちの絵も見て欲しい。うちはそんなに個展は好きではないんですよ。でも、前にうつ病の人が個展に来てくれて、す

ごいパワーをもらえたって喜んでたんですよね。あと、《けつだらけバーガー》っていうお尻に目がついている絵で、その絵を見て、ある学生さんが、笑ってたんですよ、クスクス。それがちょっとうれしかった。そういう気持ちはある。本当はもともと、日記みたいなものでね、うちの絵は。あまり見せたいとは思わないんですよね。

――なるほどね。そっか、ずっとそうなんだね。別に自分から作品を見せようという感じではないんだよね。

関根：どっちかというとプライベートなものだから見て欲しくないっていう方が多いかもしれないんだけどね。前までは、病気と闘いながら個展会場にいたから本当に大変だった。スーパーにも行けない状況だし、人間が特に怖いし。話をすればきりがないんだけどね。

母：へへへへ。

――一方でさっき言っていた、自分がもうちょっと世に出て伝えたいみたいな欲求は？

関根：伝えたいというのはない。伝えたくないけど、かわいそうなのは嫌だ。

母：苦しんでいる人をちょっとでも、なんていうのかな。

関根：ていうか、うちがひどい目に遭っても誰にも助けてもらえなかった。医者も助けてくれなかった。誰も助けてくれなくて苦しんだ。でもってうちが病気になったら友達だと思っていた人がみんな逃げ出したの。あまりの異変ぶりに。うちも病気じゃなかったら逃げ出したかもしれない、他の人がなっていたら。それを見て、やっぱり嫌だったね。けっこう生物学的な感じで厳しい反応されるなってことに気づいて。それをなんとかしたいなと思ってる。なんかうまい方法で、その人が一歩を踏み出せられるようにしたいなと。

――なるほど。

関根：それは思っている。だけど、一般の人はわからないんですよ。うちがどういう人間かは、話さないと。テレパシーみたいな、AIとは違って脳のチップを変えてその人が今までどう感じてきたかがわかれば本当にいいなと最近思うんだけど。それはできないから。その場合、言葉で伝える、絵で伝えるとかしないと、広がらないんですよね。それは困るというか嫌だなと。病気は完全には治りはしないけれど、少しマシになる方法があるし、考え方があるし、とは思ってる。

トラック06：船づくりは休憩中！

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「関根悠一郎さんのラジオ」をお送りしています。

最後に、現在の悠一郎さんの創作状況についてうかがいました。船づくりは休憩中のようですが、どうやら道具を集めたり、今後に向けた様々な研究を重ねられているようです。それではどうぞ。

――船は途中で、今あれはどういう状態？

関根：一番最初、何も知らなかったんです。船をつくるときに、丸太から切り出すのかとか。昔のでっかいバイキングの船とかも、大きい丸太から切り出すのかなと思ってたんですよ、ああいう形に。木工技術もなかったしカッターナイフしか工具を持ってなかったんですよ。（自分の知識の程度が）その時代に、よしつくるかと思って（船づくりを学びに）行ったんですよ。何にも木のことを知らないときに行ったから、いわゆるFRPとか化学物質を使ったりする、うちの嫌いな、合板の作り方と似た作り方だったんですよ。見かけは木だけど。それでつくり終わろうと思ったんだけど、プラスα、病気になってできなくなっちゃって。昔はそれがみんなが作れと言うから作らないといけないって感じで、お金もいっぱい払っちゃったしって頑張っていたんだけど、そのせいで病気がひどくなっちゃって。家に持って帰ってやってたんだけど、楽しくないし、いいものをつくっている感覚がないなと思って。その辺りで森田療法に出会ったんです。それで「生きる欲望」と「死ぬ恐怖」で、生きる欲望にフォーカスすることが、自分自身、感じ方をいたわることだっていう考え方に出会って、それで、自分が苦しいと感じることはやめようかなと思って、今、休憩中。

この前たまたまね、YouTubeですごいのつくってる人がいたんですよ。昔の木の工法でつくっている人がいて、バイキング船なんだけど、家族で斧から木を切り出してのこぎり引いて。それで、この家くらいの長さの船をつくっちゃって。どこからどこまで行ったって言ったかな。

母：奥さんと旦那さんと子供のみんなでつくってる。家族でつくってる。そこに乗って半年間くらいクルーズするらしい。

関根：もうしたの。で、見たときに、電動工具何も使ってなかった。製材機もないし、その人の工具はどんな工具だろうって調べていたらいろいろ出てきたんですよ。その本を読んでいるうちに、これはこの時代のものなんだ、こうなんだ、この系統なんだとか。それで、日本の工具も調べだしたんですよ。宮大工がすごい、いいじゃないと思って。それで鉋（かんな）を集めている感じ。

――なるほど。

関根：でもまずは船は難しいから。まず日本の鉋を使えるようになって。家具とか集めるのが趣味なんですよ。それが楽しみでね。その家具が作れるじゃんと思って。プラスα、木の勉強にもなるし木の質もわかるし。それでそろそろつくろうかなって思ってる。

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsプレゼンツ「まなざしラジオ!! in 芸劇」2020年1月11日から1月15日まで。東京都豊島区・東京芸術劇場 ギャラリー2をメインスタジオにお届けしています。

西野克さんのラジオ

「西野克さんのラジオ」は、Rightsのウェブサイトhttps://rights-tokyo.com/nishinoradio/ から聴くことができます

トラック01：オープニング

　みなさん、こんにちは。

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsがお届けする「まなざしラジオ!! in芸劇」パーソナリティのアサダワタルです。

　さて、これよりお送りする内容はこちらです。

「西野克さんのラジオ」

　埼玉県川口市の川口太陽の家に通う西野克さんは、常に何かを探しているようです。全盲の彼は施設を歩き回りながら何かを触り、かじり、耳や目に入れることを繰り返します。靴の底、古着、自身のトレーナーのタグなど。その行為は身の回りのものの確認であると同時に、その意図だけでは説明できないほど、彼にとって何か、感覚的に大切なものをじっくり味わう時間になっているのかもしれません。その静謐な時間は、せわしなく動き回る他の利用者の方々との関係の中でより際立ち、彼の存在がより一層魅力的にあらわれていきます。

　ウエス、機械類の油を拭き取るための布ですね、このウエスを製作する作業班にいる西野さんに寄り添うのは、スタッフの森田博子さん。彼女は西野さんの行為をとても丁寧に観察し、それらをユニークかつ優しい言葉で表現します。「靴底などを口の中に入れてすごーく丁寧に噛んだり」とか。彼にとって手がとても大切な機能なので、何かに手で触るときは、「ほんとこの辺りで、そーっと、タッチはそーっと」などですね。こういった言葉で語られます。「気がついたら捨てずに取っておくようにしています」と言いながら、行為の痕跡の物品を一つひとつ保存しているというのですから、この「まなざし」は一体どうやって現場で培われていったのか、とても興味深いところです。

　このスタジオでは西野さんの行為の記録写真と映像、並びに痕跡としての「モノ」の展示を行うとともに、森田さんのまなざしがあふれる音声と写真を紹介します。

まずは、西野さんの一つひとつの行為の特徴、その際に使われるモノの種類などを、スタッフ森田さんからご紹介いただきました。現場の川口太陽の家の他の利用者さんが奏でるサウンドスケープ（他の利用者の方々の声や生活音）とともにお楽しみください。

トラック02：西野さんの日常行為

森田：噛んじゃう、噛むというよりは最近、そこのワイシャツの襟のとんがっているところ。ワイシャツを選んで。

――ここの部分ってことですね。

森田：そうですね。こん中に顔をうずめて、いろいろ探って。今ここにはもうなくなっちゃったんですけど、ワイシャツの襟の部分、あ、これそうかな？こういうところを耳に入れて。

――はあ。

森田：今週は、ここにこだわっています。

――週ごとに結構違うんですか？

森田：そうですね。マットの端っこばっかり噛みちぎっている週もありますし。ご本人がどういう心情にあるか私たちはちょっと計り知れないんですけど。

――関心を持たれるものもそうですし、目とか耳とか、場所、確認する場所も変わるんですか？

森田：そうですね。目の中の淵にゴムっぽいものを、こうやっているときもありますし。

――それは極端に硬いものじゃなくて？

森田：極端に硬いものをやっているときもあります。

――あるんだ。

森田：プラスチックみたいなものとか。あとは、こういう椅子の脚についている緩衝材というか音を小さくする、傷が付かないようにピンがついてますよね。ああいうのをやっていたりすることもあるくらい、そのときに手にするもの、関心を持つものは、かなり違っています。

——かなり多岐に渡っているんですか?

森田: この秋は散々、靴をやってたんですけど。ご自分の靴もやります。この手の感触がとても好きみたい。

——ゴム。ちょっと硬めで。

森田: はい。歯ごたえがあって。

——噛むわけですよね?

森田: 噛んだり、噛みちぎったやつでまた耳を刺激していたり、目を刺激していたり。今はちょっとおさまっていて。あとはここのタグ。左側についていますよね。あれを触っていると安心するみたいで、輪っかになっているやつなんかは、指を入れて。よその人のをいきなり探したりします(笑)

——今は洋服がお好きなんですね。

森田: 家でもいろいろやっているみたいなんですけれど。ゴムっぽいものが好みのときもあれば、紙コップの淵の硬い部分、あれだけをちぎったりしているときもあります。それでちょっと耳をやってみたりとか。あとは野菜。野菜でも例えばレタスの芯のちょっと硬いところとか。そういうのをやっていることもあります。

——歯ごたえとかちょっとあって、噛みちぎれるかどうかとか。挑戦的なところもありますね。

森田: 確認だけではないような気もしますし。

——(行為の)これはこれで終わりというタイミングも、はっきりしているわけではないんですよね?

森田: そうですね。ポイッてやめてしまわれるときもある。それが絶対、というわけではないんですよね。

——基本的には結構、こうやって座っていらっしゃるんですか?

森田: けっこう座ってますね。あと、寝ているときもありました。

——あぐらをかいてらっしゃるんだなと思って。

森田: どういう部分を私たちが携わって、ちぎって引っ張りあって切っているかはわかりづらいと思うんですよね。本当に。

——ビリビリというのは、何を破っているんですか? どういう作業?

森田: 今、ウエスを作っているんですが。

宮本(アートセンター集センター長): この仕事もあるんですよ。ウエスって言って、工場で油を拭く用の布なんですけど、それを、その人ができる課題で、課題というかその人ができることで、一対一で関わったりしながら。引き裂く人は引き裂くし、ハサミを使える人はハサミを使って。

——油拭いたりするボロ切れみたいな形のものを、みんなで分担してちぎっていって、溜めて?

宮本: で、工場に納品するっていう仕事もしているんです。

——その素材は服だったり、いろんな切れ端だったりするんですよね?

森田: 主に、綿100%のタオルや服、シーツですね。

——なるほど。それは素材がいろいろで手触りがいっぱいあるんだな。普段から、西野さんは自分で確認する作業と同時に、ちぎる作業もやっていらっしゃる?

森田: あまり積極的には。でも「やって」って言うと、引っ張って、お互いに、びりびりびりプチン、ていう感触を味わったりしていますね。

——その一環で、ここに素材があるのでわかっていらっしゃると。

森田: そうですね。少し前は玄関先にずっと座って、いろいろやっている。

——靴とか。

宮本: はい。玄関のマットの周りとかバラバラになっていましたね(笑)

森田: 黒い養生テープは、あれを留めておかないと、あのマットのヘリのゴムのところを噛み切ってしまうんですね。レンタル屋さんが一生懸命、養生してくれて。

トラック03:変化と表現

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「西野克さんのラジオ」をお送りしています。

現在は以前よりも落ち着かれたという西野さんのこの生活。ここに通い始めた数年前のエピソードをお聞かせいただきつつも、スタッフ森田さんが西野さんの日常をどれほど丁寧に見つめてきたか、その様子が、森田さんの発する言葉一つひとつから受け取れます。それでは、どうぞ。

宮本: 穏やかになりましたよね。

森田: ええ。

——今ここに来られて何年目ですか?

森田: 5年目ですね。

宮本: すっかり落ち着いちゃってね、今。

——そうなんですね。もっと多動というか、動きが激しかったんですか?

森田: 動きはゆっくりです。本当にゆっくりなんだけど、ここに来たときも、まずは全部舐める。舐めて一周。触るっていうよりか舐める。彼の顔の高さにずーっと線がついてた。

宮本: 全部線がついてるんですよ。もうなくなりましたよね。そうやって地図を作って。

森田：もう一人、全盲の方が同じ班にいたんですけれど、彼なんかよりは、幼い頃に視力を失っているので、やっぱり探り方が全然違って。手で探るというよりは、靴も、上履きも履きませんし、足の裏からも記録を取っている感じですよね。

――いろんなところで感覚を、環境を感じながら。

森田：なので、手探りでという感じではなくて、地図を作るまではすごく早かったです。環境を感じるのは、もう一人の方より早かったです。

――スキャニングというか、自分の中でここはこうだなというのが把握できたらその行為は一旦落ち着いて、次に向かうというような？

森田：舐める行為はなくなって、っていう感じでしたね。ここに移ったときは。

――活動されているのは、主にこの部屋なんですか？

森田：そうですね。

――他の部屋に行ったりとかは？

森田：はい、行きます。

（他の利用者の方々が発している声でインタビューの声が聞こえにくくなるほど周囲は賑やか）

――じゃあ西野さんは他のフロアもなんとなく把握されているんですね。

森田：してますね。

――その中で落ち着いていって。

森田：そうです。ご飯が遅いと、先に席に座ってたりします。

――そうか（笑）。全盲でも、把握されている感じですね。

森田：あえてぶつかって曲がる、みたいなところもあります（笑）

――なるほど、あえてぶつかって曲がる（笑）

森田：だからやっぱり常にいろんなものを口に入れて、それってどんな味なんだろうなと思っちゃうようなものまで口に入れたりもするんですけれども、おそらく彼はずっと幼い頃からそれを繰り返して、大してお腹も壊さないし。口の中に入れて、すごーく丁寧に噛んでいたりします。

――丁寧に。飲み込んでしまうことはないですか？

森田：口にけっこう入れてますね。上手にそれだけ食べないで、あとから出してみたりとか。他のものは飲んじゃっているのに、豆だけ噛まないで出してみたり。ここらの仲間って、違うところも発達するというか。

――本人の中で確認するためのいろんな手段がそうやって確立されているんですね。

森田：そうですね。

――痛覚というか、痛さ、耳に入れたり目に入れたりする痛い感覚って、想像したら誰でもあると思うんですけど。

森田：はい、痛いとは思いますね。

――本人の中で確認する感覚とのバランスが取れているんですかね？ どこまで入れるのかとか、これ以上やると痛いんだろうなとか、ついつい思っちゃうけれど。

森田：それが止まらなくなっちゃうこだわりがある方だと、目を潰しちゃったりとかする方もいますけどね。自分で叩いて。血を出すための行為ではないので。血を出して確認する方もいるんですけど、彼の場合は、そうじゃないんです。けっこう、耳とか目とかで確認していますね。

――目に入れるときはけっこう長く？

森田：淵に、トゥー、トゥーって、ゴムのヘリを入れていたりとかもしますね。だから目ヤニがすごーくなっていたりとか、耳がすごーくなっちゃったりしているときもあります。で、人に触れる時って、彼、手が過敏で敏感で大事な器官なので、こうやってあまり触んないんですよ。手を取られるのが好きじゃない。だからこっちの外側で、すっと触って、それでもう「確認」みたいなところがあったんですけど。最近、パンとかバンとか、やっとやってくれるようになりましたね。やっと。だから、手のひらでハイタッチとかは。

――される方ではなかったんですね。

森田：そういう感じではないんですよね、まだまだ。とても親しい方とかは、お母さんとか、ずっと担当されているケースワーカーさんとかハイハイ、とかやったりできるんですけど。ほんとこの辺で、そーっと、こう。

――慣れてくると、こちら側で。

森田：でもタッチはそーっとですね。今日、このズボンを何度も手にしてますね。朝、これを見つけて。

――朝からなんですね。この時間の中でもずっと触ってらっしゃいますね。

森田：今日これ気に入っているみたい（笑）。ほんと同じものを取るんですよね。

――すごいですね。全部舐めてスキャンしてっていうのを認めて、やってもらうようにしたからこそ落ち着いているというのはあるんですかね？

森田：約束でそれをしたわけではないんですけど。本当に全部（跡が）ついているから。

――全部ってすごいですね。

森田：それがわかるのが、ガラス窓なんですけど。

――はっきりわかりますものね、線が。

森田：あとはボタンをよく噛んでましたね。パキッて割って、それが欠けた尖ったところで。最初に私が出会った頃は、けっこう尖ってチクチクするような刺激だったんですよ。それがだん

だん、このくらいのボールペンのキャップくらいの感じになったりとか。そういうのちょびっと、ああ、好みがあるんだなというのがわかってきて。こういう戸棚に入っているのも、開けて全部出したりしちゃう。気づいたらもう手にしてる。椅子とかも重ねてあったら、底のところを噛んで取って。（破片は）気がついたら、見つけたら取っておく。

トラック04：森田博子さんのまなざし

「まなざしラジオ!! in芸劇」現在は「西野克さんのラジオ」をお送りしております。

西野さんが噛んだものや、耳や目に入れたものなど。こういった行為のさまざまなかけらを、スタッフ森田さんたちは、気がむいたら拾って取っておくようにしていると、話しています。だからこそ、今回のような展示が成立するわけですが、まさに「まなざし」あふれる状況がこの現場では育まれているわけですよね。西野さんの行為がご本人にとって実際にはどういう意味を持っているのか、どこまでいってもわからないことかもしれませんが、森田さんをはじめ、スタッフの方々がずっとこれらの行為に想像力を持って接していることは、とても大切なことなのではないかと思った次第です。

では、最後のコーナーです。どうぞ。

森田：こんな風に、こういう風に、ちょっと取っておいてあって。この中は全部西野くんのですね。

――手に取ってもいいですか？

森田：どうぞ。これは靴ばっかりですね。夏までに4足くらい食べて、お母さんが新しいのを買ってくれていました。

――これはご自身の靴？

森田：これはご自分の靴ですね。

――こういうのも、全部噛んでいらっしゃったものを取ってあるんですね。靴ってわかるものあるけど…。あ、これ軽い。これ好きそう。これなんだろう？

森田：お母さん、こういう硬いのもわざわざ買うんですよ。だけどやっぱり噛んじゃった。ずいぶん長持ちしたけれど（笑）

――ああ、硬いと大丈夫っていうことで。

森田：コンバースみたいに硬いやつとか。あとはマットですね。やたら集まったときがあって。これ拾い集めたものだけなんですけど、本当はもっともっといっぱいあって。

――選んでいる基準はありますか？

森田：選んだわけでは。あとは「はい、落ちてました」とか職員さんたちが持ってきてくれたりとか。この間も、「これ動物の形してません？」ってわざわざ持ってきてくれた人もいた。

――素晴らしい。それは向こうの方にあったんですか？

森田：この辺にあったんですけど。たまたまなんですけど、これが2枚くっついてこんなになっていたんですよ。「これは作品ですよね」とか言って。

――実はこういうのが好きなのかもとか、集めるとわかったりするかも、ということなんですか？ 角っことか。

森田：こういうのをこうやって、こうやって。

――角をつくって？

森田：好きな形はあると思うんですよ。だからあえて私もとんがっているものをつくって渡してみるんですけど。これ紙コップのヘリなんですが。20個くらいつくって、「これは？」「これは？」ってこの間やってみたんですけど（笑）

――それは興味ない…？

森田：やっぱり自分で噛み切って、自分の形にしたい。つくってみたんですけど、ダメでした。

――歯で噛んで、ちぎって、耳か目に入れて確認したい、というのが一連にあるんですね。

森田：それが、どういう意味かはわからないけれども。

（ジングル挿入）

森田博康さんのラジオ

「森田博康さんのラジオ」は、Rightsのウェブサイトhttps://rights-tokyo.com/moritaradio/ から聴くことができます

トラック01：オープニング

みなさん、こんにちは。

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsがお届けする「まなざしラジオ!! in 芸劇」パーソナリティのアサダワタルです。

さて、これよりお送りする内容はこちらです。

「森田博康さんのラジオ」

長野県佐久市の緑の牧場学園で暮らす森田博康さんは、これまで大量の衣類を破いてきました。トレーナー、ロングTシャツ、デニムパンツ、靴下など。ときに縫い目を手がかりに、ときにど真ん中から大胆に。福祉現場では問題行動とされる「破衣行為」。服破りのことですが、2017年に長野県内の公募展「ザワメキアート展」に参加したことをきっかけに、スタッフの間で新たな「まなざし」が生まれることになります。言葉でのコミュニケーションを主としない森田さんのこの行為は、見方を変えれば何か大切なことを伝えている「表現」なのかもしれない、と。

現在、森田さんを担当するスタッフの山口貴史さんは、「今年（2019年）に入ってから破く行為がなくなったんです」と語っていますが、その理由は定かではありません。「自室にテレビを設置したから、破く行為に関心が向かなくなったのでは？」という説もありますが、何かがきっかけとなりこの行為をする必要がなくなったとも考えられ、想像は膨らむばかり。「ピーク時は1日1枚以上」という行為が「パタンとなくなった」というのだから、この「変化」をどう捉えるかは、実に興味深いです。

このスタジオでは、森田さんのかつての行為の記録写真と、行為が途絶えたあとの現在の記録写真を並行して展示し、また山口さんをはじめとした複数のスタッフの証言をもとに、「表現が後退するその変化の意味」について考えます。

まずは、僕らが訪ねていって最初に衝撃だったのは、スタッフ山口さんによる、森田さんの服破りがここ最近急激になくなったというお話。これは想定外の展開でした。さぁ、森田さんにどんな変化があったのか。どうぞお聴きください。

トラック02：なぜ服破きはなくなった？

山口：今年度に入ってから服を破く行為がなくなりまして。

――完全になくなったんですか？

山口：靴下を破っちゃうのと、あとたまに他の利用者さんでタグを気にして取っちゃう方がいるんですけど、タグを取られちゃって穴が開いたところを気にして、そこを破っちゃうということはあるんですけど。何でもないのを破ったりとか、そういう行為がほぼほぼなくなってきているような状態なんですよ。

――なるほど。それは何か変化のきっかけが、山口さんから見てあったのでしょうか？

山口：昨年度末くらいから自室でもゆっくり過ごせるようにという形で、（森田さんの自室に）テレビを設置するようになりました。それで自室で一人で過ごせる環境が増えてきて。課題行動として私たちも（服破きを）捉えていたもので、そういうのをどうにかしたいなと思って、声をかけたり関わる機会を少し増やしていくなかで、関わりや環境が整ってきたということで、本人なりに、何か落ち着いた部分があるのかなという印象は受けています。

――なるほど。

山口：先日、「思いを汲み取るセミナー」というものに参加させていただいたときに、本人の思いとアートをつなげて、というような話を伺ったんです。アートといっても絵とかだけじゃなくて、ご本人たちが自分の思いを表現しようとして何かやっているということが、ちゃんとした作品じゃなくてもアートと呼んでもいいんじゃないか。そういう何か成果物というようなものから本人の思いを汲み取ることも必要じゃないのかっていう話をちょうどお伺いしまして。以前あった服破きという行為も、本人なりに、発語がない中で、自分の想いをきちんと形にして伝えられないんだけど、自分の中にあるモヤモヤとか不満とか、そういったものの表現としてああいうことがあったのかなと捉えているような状態ですね。

――そういう意味では、服破きをすることで、コミュニケーション、何かを訴えたいとひょっとしたらずっと思ってこられたところの思いがかなったのか、自分にとって生きやすい環境になって、そういうことをされなくなったという可能性がある、ということですか?

山口：可能性としてはそういうこともあるのかなという。最近一緒に外出して、一緒に服を選んで買ったりするんですけど。買ってきて服を渡すじゃないですか。そういう時に買ったのを着ていると、周りの人に「これ買った」と喜んでアピールしているから。今、服という点では、自分も一緒に行って買って、「新しいのを買った」って着るっていう、それが嬉しいのかなって。

――それまでは、服をご本人が直接見て買うということはあまりなかったんですか?

山口：そういう機会もあったんですけど、以前よりも最近の方がそういうアピールが多いなという感じもしています。私も今年4月から担当になったもので。前任の担当の人とも一緒に買い物に行って買ったりはしていたんですけど、今の方がそういうアピールが多いかなという感じがするので。そういうところでも少し落ち着いてきて、そういう気持ちになるようになったのかなと見ている状態ですね。

トラック03：問題行動がアートとして

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「森田博康さんのラジオ」をお送りしております。

さて、ここで2017年に森田さんの服破りが「アート」として認められるきっかけとなった「ザワメキアート展」当時の話をうかがいました。

――「ザワメキアート展」が確か、森田さんは2017年に出展されていたと思うんですけど、その当時はリアルタイムで破いていらっしゃったわけですよね。それ自体が取り上げられること、写真を撮られたりとか…ご本人が写っている写真も見ましたけども、森田さん自身はどういう風に認識しているかというのはあったんですかね。

山口：作品展に出品、展示していただいたとき、（森田さんが）担当スタッフと展覧会を見に行って、そのときはすごいうれしそうにしていたという話は聞いています。

スタッフA：写真も見ていただいたと思うんですけど。自慢げな顔で。

――そうですね。ものすごくいい表情をされて、赤いロングTシャツを着て、写っている写真。はい、拝見しました。

スタッフA：今は（服を破く行為が）かなり減ってしまって。減ってしまってって言うこともないんですけど。減って。

――減ったんですね。いつも破られたTシャツはご自身でまた着たりとか、けっこうたまっている状態だったわけですよね?

山口：はい。すごく正直なことを言うと、服を10着くらい買ってきても、半月持つか持たないかというペースで。朝、新しいものを着ていたと思ったらもうお昼くらいには破けていることもあるというペースでした。

――特にピークがあったということですか?破られる行為には。

山口：あの辺がピークですね。1日1枚以上くらいのペースで破いていたので。

――それはすごいな。…すごいですね。

スタッフ：そういうのが出ていたのかなと思います。

――今は落ち着かれているということですね。（破くときは）何も道具を使わずに、手でひたすら破くんですか?

山口：爪をひっかけて、つなぎ目のところから、まず。糸の縫い目のところを爪でひっかいて穴をあけてそこからこう裂いていくみたいな。あとはちょっと痛んでいるところとか。

――そこを狙って。ずっと同じように頻繁にこれまでもやっていたというよりは、波というか。ちょっとはやっていたんだけど、ある時にピークが来て、今また落ち着いてみたいな。ここで暮らされている中でかなり長いこと頻繁にやっていたということではなかったんですね。

スタッフA：そうですね。前はパンツを破くぐらいですかね。

――下着をってことですか?

スタッフA：はい。

山口：「ザワメキアート」に出展したくらいからしばらく…上着もそうなんですけど、ズボンとかもけっこう破ったりとか。どちらかというと、人との関わりはすごく喜んで、関わりたいという感じはある方なので。

――新しい出会いとか、人とコミュニケーションをとることに関しては。

山口：実際、外部講師の方が来られて、音楽活動とか施設でやってもらっているんですけど、そういったことに参加するのも、すごく楽しんでおられます。

――積極的に。

山口：そうですね。継続的に参加してて。参加して戻ってくると、「やってきた」みたいな格好して本人なりに表現して、伝えようとしてくれるんですけど。すごく色々なことに関わりたいという方なので、ああいう（展覧会などの）場でいろいろな方に触れ合うという意味では、本人にとってうれしいイベントだったのかなと思います。

トラック04：いざ！森田さんの自室へ

（ジングル挿入）

では、森田さんがちょうどおやつを食べながら、ゆっくり休憩しているところにお邪魔してみました。

森田さんの個室にも入らせていただきましたが、その整頓さに驚き。ほんとうに服破りの

行為はなくなってしまったのでしょうか。

――こんにちは、森田さん、アサダと申します。今日は森田さんに会いに来ました。

山口：お話したりするために来てくれたんですよ。今日はよろしくお願いします。うれしい？よかったね。

――森田さんが出てた展覧会を見て、会いたいなと思って来たんです。

山口：覚えてる？「ザワメキアート」。吉田さんと一緒に展覧会に行ったでしょ、覚えてる？覚えてないか。洋服を飾りに行ったじゃん。大谷さんと吉田さんとさ、一緒に。洋服を額に入れて飾ってさ。見に行ったじゃん。キョトンとしてるけど（笑）

――今、すごいキョトンとされた表情しましたね（笑）

山口：忘れちゃった？！忘れちゃったの？本当？

――その洋服を着ていらっしゃる写真を見て、すごい素敵な笑顔をされていたので、会いたいなと思って。今日ご本人にお会いできて、僕すごくうれしいです。

山口：あれを見てね、森田さんに会いたくなって来てくれたんだって。

――そうなんです。

山口：あれですか、お部屋の方も？

――いいですか？ 見せていただいても。

山口：お部屋一緒にも見てもらってもいい？ 自分のお部屋。

――ありがとうございます。

（森田さんのお部屋に移動して）

――じゃあ、お邪魔します。すごい整ってますね。じゃあ森田さんがご自身で破られた服はもう今はないということですよね、ここには。

山口：ちょっと今はないんですよ。

――破って、その時残っているものがあるという感じだったんですよね、あの展示のときは。

山口：そうですね。それこそ、日に1枚破けちゃっているという感じだったので。実際服は今そこがタンスになっていて、そこに入れていっています。

――なるほど。ここのところに。たたんで、普通にシャツを入れていらっしゃる感じですね。

山口：こっちでたたんでいくんですけど、本人も色々見ているみたいで、開けるとぐちゃぐちゃになっていたりするんですけど（笑）

――よかったら、森田さんの今日着ている以外のお気に入りの服を見せていただいていいですか？ 今日、何のために来たのか伝わりにくくてごめんなさい。森田さんに会いに来たのと、森田さんのファッションチェックをしに来たんです。実は。

山口：こうやって自分で開けてみてね。

――きれいなTシャツ。

山口：森田さん、それ、押し入れから出したね？（笑）

――もう衣替えしたはずの半袖が2枚も入っている（笑）

山口：けっこう自分でいろいろいじってね。その都度こっちの方で、じゃあまたしまうよ、ってしまったりとかしてるんですけど。

――なるほど。すごい服きれいにされてますね。

山口：ちょっと期待されていたものはないんですけれど。

――もともと、その行為が収まって最近やっていらっしゃらないというのは聞いていたので。でも、思っていた以上でした。本当に今は落ち着かれているんですね。森田さん、ありがとうございます。お邪魔しました！

トラック05：スタッフ間で飛び交う憶測

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「森田博康さんのラジオ」をお送りしております。

スタッフ山口さんが、他のスタッフの方々にも、森田さんの服破りの動向について、聞いてくれました。みなさんそれぞれが「あの当時は、本当によくやっていて…」と振り返っていただきながらも、なんと実際に破っている瞬間をリアルタイムで見たスタッフはいないとのことなんですね。これは興味深いですね。そして、どうも縫い目からだけでないかもしれないと。うーん、証言が集まれば集まるほど、今その行為がなくなってしまったことについて、いろいろ思いを馳せるんですけどね…

スタッフB：始まったのから含めるとずいぶん前なんですね。最初は下着から。

――始まったのは？

スタッフ一同：10年くらい前。

――逆に20代30代のころはそんなになかったんですね。

スタッフB：全然なかった。

――ある時集中的に。

スタッフB：（スタッフCを指さして）彼と同じ部屋の頃が多かった。

スタッフC：俺の担当のときだ（笑）

山口：森田さんと（他の利用者さんである）○○さん、同じ担当（Cさん）で。

スタッフB：同じ部屋で。

――なるほど。

スタッフB：同じ部屋で。だから○○さんも破られちゃったりしてました。

——ご自分のだけじゃないんだ。

スタッフA：○○さんのだけ買ってくると（それも破いてしまう）。そのあと自分のだけになった。だから同じ日に買うようにしたんです、服は。

——工夫されたんですね。

スタッフB：なんかうらやましいみたいな。

——うらやましいと思われることがないように揃えて買って。なるほどそういう工夫があったんですね。

スタッフA：そうしたら少し減ったんです。でもパンツだけはあの頃も破ってたんだよね。

スタッフB：そうですね。パンツは結構ひどかったですね。回数としては多かった。

——破いているときの表情はどうなんですか？

スタッフB：それが、破いている瞬間はほとんど見ていなくて。

——なるほど、皆さん見られていないんですね。気が付いたら「あぁ、破れてる！」って。

スタッフB：そうなんですよね。

——そういうことか。

スタッフB：どうやってこのジーンズを破いているのかとか。同じデニムの生地を。腕力がすごいあるわけではないんですよね。

——そうですよね。よっぽど工夫しないとそう簡単には破れないと思うので。

スタッフB：ひょっとしてカッターとかハサミを持っているんじゃないか疑惑もあったんですけど、そういうこともなかったんですけど。

——道具なく手だけでやってる。

山口：破ってたときは、すっと自分の部屋に行ったりして、誰も見ていないところで。で、破った後に出てきて。

——破った後に出てきたときはその服を着てらっしゃるんですよね。明らかに見たら破ったことはわかるけれど、破っている行為自体は自分の部屋でこっそりやって来る、と。

山口：行為自体はみんなが集まっている所ではあまりやっていなくて、気が付いたらやっている。

——そういう意味ではみなさんも破っているところをリアルタイムでじっと見ていることはあまりないんですね。

山口：破っている瞬間はないですね。

——それは面白いというか、面白いと言ったら変な言い方ですけど、不思議なことですね。あんなにたくさん破られていたと聞いていたから、てっきり、行為自体を見られているのかと思ったので。

山口：夜、夕食が終わって歯磨きが終わって、そのあとは自由時間、就寝というタイミングで、お部屋に入ってて。朝、見たら破れているみたいなことはあったので。そういうときが一番多かったので。

——1日1枚破いているときがあるということは、トータルではもう何百枚も破いているんですか？

スタッフA：そうですね、買って来るのも追いつかないくらい。1日1枚では済まないよね。

スタッフB：済まなかったですね。

——それは総数すごそうですね。

スタッフA：「Mサイズの服をここからここまで」みたいな買い方を多分してたと思うんですけど。

——相当、安く買わないといけないですね。破られる前提で買っていらっしゃったわけですもんね。

山口：けっこう安く買ってきても、月の洋服代が3-4万。

——大変だそれは。

山口：一着1000円いかないものを買ってましたものね。それでもそのペース。30着って単純計算しても3万いきますもんね。

山口：破くとすると靴下？

スタッフB：ああそうだね、靴下くらいだね、最近は。

山口：靴下は破っちゃうときが今もあるんですけど、それでも前に比べたら全然少ないですよね。

スタッフB：今日、タンス行って来た？

山口：タンス行って来ました。

——「タンス行って来た？」って言い方（笑）

スタッフB：なんかなかった？（笑）

——タンスご紹介いただいて。すごくきれいに。どの服も本当にきれいだったので。

スタッフB： 10年前の破いたコレクションを見ていただきたかった。

——うわぁ。

スタッフB：なかなかほんとね、デニムってどうやって破くのかなって思うんですけど。縫い目から破いているわけではないんですよ。こういうところから破いているんですよ。

——そうなんですか。真ん中から。

山口：こういうところから破いて、さらに縫い目もいきますよ。ばらばらばらばらっていう感じになっていって。

――すごいですね。

スタッフB：ある意味、そっちが芸術かもね。

――その行為はほんとに。

スタッフB：プロセスが芸術かも。

トラック06：スタッフ山口さんのまなざし

山口さんと改めてこの服破りがなくなってしまった実際の理由について、もう一回考えてみました。まぁすべては憶測でしかないのですが。

山口：結局、何がきっかけっていうのが掴みにくいというか。いろいろなことが重なっていたとは思うんだけれども、何かこれが決定的というのは。

――普段一番近くにおられる山口さんでも、そこの決定打みたいなのは掴みきれてないわけですもんね。これは…すごい。

山口：テレビですかね。

――テレビを置いたこと、部屋に。立派なテレビですしね。

山口：っていう話もあるんですけど、職員のなかでは。テレビを置いて、自室でああやって。

――自分のお部屋での時間の過ごし方として、今はテレビがある。

山口：けっこうテレビを自分でつけて見るので。

――逆にテレビがなかったときは…

山口：ただこうベッドに座っている感じもあって。

――そこだけの部分で考えると、時間潰しというか。ちょっと退屈であることとかによって？

山口：その可能性がないわけではない。

――何か関心がこっちにいって、破るかってなっていたかもしれない。

山口：かといってそれだけって考えると今度は量がちょっと…

――あまりにも途端にばつっと。

山口：いろいろ要因があってなんだろうけれども、っていう話になっているんだけれど。あとは本人が落ち着いて、穏やかに過ごせているならいいかって。

――穏やかですよね。

トラック07：スタッフ吉田さんのまなざし

「まなざしラジオ!! in 芸劇」現在は「森田博康さんのラジオ」をお送りしております。

さて、このインタビューの一週間後に、僕らが2度目に緑の牧場学園を訪問した際に、もともと、「ザワメキアート展」に出展した2017年当時、森田さんを担当したり、森田さんの服破りに関心を持っていたスタッフがおられまして。その吉田さんに話を伺うことができました。そして、ザワメキアート展実行委員でもある元麻布ギャラリー佐久平のコーディネーター大谷典子さんの存在も大きく、吉田さんも出展を決めたとのこと。そしてその当時、ザワメキアート展で展示された衣類は、残念ながら処分されていたこともわかりました。かなりしつこくインタビューしたこの森田博康さんの「服破りがなくなってしまった変化」。結局原因はわからずでしたが、なんとこの僕らの1回目とこの2回目の取材の一週間の間に、一着だけグレーのトレーナーが破られていたとのことで。吉田さんの口からもおもわず「久しぶりの作品」という言葉が。そのトレーナーはこの芸劇の会場にもお借りしてきましたので、どうぞご覧ください。それでは、森田博康さんのラジオ、最後のトークとなります。聞き手は米津いつかさんです。それではどうぞ。

吉田：「ザワメキアート展」に出すということが決まって、それがアートだと言われたときはこっちもびっくり。（森田さんに話しかけて）ね、でもよかったね。見てもらって。

――「ザワメキアート展」を見に行ったんですよね。お写真拝見しました。

吉田：はい、森田さんと一緒に。うれしそうにしていましたね。

――ザワメキアートに出品されていたときの洋服はもうないと聞いています。あれは出品後、戻って来て、そのあとに処分という形なんですかね？

吉田：はい。

――じゃあ、久しぶりに生まれた…

吉田：はい、久しぶりのこの作品です。作品っていうとあれですけど。今もそうですけど学園としては破衣行為は課題行動という捉え方をどうしてもしているので、実際に出品するかどうかってなったときも、賛否両論。施設の中ではいろいろ意見も出て。まぁ出してみようというかたちになって、出たら、見事に…。自分はやっぱり元担当だったということもあって、それを「作品」としては見れなかったですよね。当時、アート作業の担当をこの施設でしていたんです。

――アート作業というのは？

吉田：月1回、大谷さんとかに来ていただいて、やりたいという有志の利用者さんと絵を描いたりとか粘土をやったりとかして担当をやらせてもらっていました。自分は森田さんの元担当だったので、破れたものをどうしても「アート」とみられなかったところを、当時森田さんの担当だった方が、「おもしろいんじゃない？」って持ってきたのがはじまり。

（森田さんは）部屋では基本テレビを見ているんですよね。

――「おもしろいんじゃない？」と言われて、出品を決めたのはどなたが？

吉田：私と大谷さんと話して決めました。出品するものを選んでいたのは自分なので。大谷さ

んもこれがいいっておっしゃって。

――そうなんですね。

吉田：ああ、荒れるなこれって思いましたよ（笑）

――ちょっとアート作品としては捉えるのは難しいけれど、「おもしろいのかな？」と思って、大谷さんにこういう方もいるけど、っていう経緯だったんですね。

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsプレゼンツ「まなざしラジオ!! in 芸劇」2020年1月11日から1月15日まで。東京都豊島区・東京芸術劇場 ギャラリー2をメインスタジオにお届けしています。

写真家。1989年よりニューヨークと東京を拠点に、広告・音楽・ファッション・アートの分野で活動。2009年にはNewsWeekの「世界で尊敬される日本人100人」に選ばれる。現在は、アスリート、職人、日本酒作り、伝統芸能などが大好物な被写体。多様性が大好きで、障害、高齢者福祉にも興味を持ち、共に生きる方法を模索中。

まなざしを撮るということ

たかはしじゅんいち

本人が見ているモノ、向けている「まなざし」、そして支援者が向ける「まなざし」を撮りながら、私自身の「まなざし」を意識する。「まなざし」の中には愛情や感情があって、そのふわふわしているモノを「写真」として表現するというとても難しい撮影でした。モノを創っている人たちはどの方もとても魅力的で、時に、動いていること、生きていること自体が創作になっていたり。そして「本人」と「その行動」を全部受け止めてもらえることが羨ましくもありました。それはつまり支援者の「まなざし」や理解、愛情があってのことだと知るにつけ、今回のプロジェクトの意義を強く感じたのでした。「障害者」と言葉で括ってしまうと個人が見えにくく、だから記録や強引な表現になりがちだけれど、「個人」としてひとりひとりとの関係から始めると、その人を理解するための撮影、出会いでしかない、という当たり前のことに気がつきます。魅力的な人たちとの出会いと学びに感謝しています。

演劇的な展示

牧野宏一

今回は「演劇的な展示」を意識し、会場をラジオスタジオに見立てています。机に向かいヘッドホンで鑑賞している様子自体が、ラジオスタジオのセットの役を演じる事で、他の鑑賞者の視線から解放されます。展示写真を等身大に近づける事で作家さんの生活が、舞台を鑑賞するように臨場感をもって感じられます。まなざしにまつわるストーリーに無意識に没入できるような状況を大切にしたいと思いました。展示壁については総厚が24.6mmと極薄です。たわみが小さく組立てやすいビニルハウス資材を骨組みとし、建材というよりは図工の感覚で画材のように扱える5.5mm合板や1mmの塩ビ板を貼りました。合計45mの壁を完成した状態で搬入し、1時間程度で軽々と空間を立ち上げる事ができたのは、実働7日間で壁を完成させた地域活動支援センターHIKARIさんの協力が絶大でした。展示会場を超えて、この壁が現場のまなざしにも参加できたらと思います。

建築家。2005年乾久美子建築設計事務所入社ののち、2016年MNoKa Architectsを設立。主に障害福祉施設の設計を行っている。2017年度熱海ふれあい作業所、2019年度 社会福祉法人フラットの設計でグッドデザイン賞を受賞。障害福祉施設が、だれにとっても使いやすいものとなることを目指している。

もうこれ以上 誰にも殺させないための「まなざし」のちからについて

鈴木励滋（NPO法人カプカプ 生活介護事業所「カプカプ」所長／演劇ライター）

この原稿が世に出るころには、彼に下された死刑判決は確定していることだろう。

「意思疎通の取れない重度障害者は生きる価値がない」という暴論を振りかざし凶行に及んだ彼の主張に、わたしたちはあまりきちんと反論できているように思えなくて、なんだか総毛立つものがある。「妄言」と捨て置くと、いつかまた彼と同じようなことをする者が出てくるのではないかという恐れもあるのだが、彼の主張とこの社会の価値観とが決して相容れないものではないから、この社会の片棒を担ぐわたしたちには反論ができないのではないか、という恐ろしい仮説が頭に浮かんだまま居座っている。

だからこそ大げさではなく、この原稿を彼へのわたしたちの反論の序章とするべく綴ろう。「役に立たない」ものであったと自分の人生を捉えていた彼に、「まなざし」の愉楽を味わわせられていたら、あんなことには至らなかったはずだと歯噛みしながら。

まなざしの「ま」は「目/眼」であり、それを「指す/差す」ということは、目を向ける相手をどのように認識するのか、つまり単に見るだけではなくて価値判断をともなう行為といえる。

彼の主張とわたしたちの社会の価値観の親和性についてはすでに触れたが、わたしは、この国で過ごす障害がある人たちが「支援」という名の下で受けていることの多くは、彼の蛮行と根が一緒なのではないかとさえ考えている。

たとえば、「課題行動」という言葉がある。もともと障害福祉や高齢福祉の現場で「問題行動」と呼ばれていた、まさしく「問題」のある「行動」を指す。そして、それをいくら前向きに「課題」と言い換えたとしても、直すことが「是」とされているのには変わりはない。これほど「社会モデル」という考え方も広まり、障害が個人にではなく社会の側にあるのだと言われて久しいのに、実践の現場においては「課題」が社会の側にあるということにはなかなかならず、直されるのはいつもマイノリティの方なのだ。これでは彼には反論できるはずもない。

これまでもずっと、わたしが「作品」への評価に偏っているこの国の「障害×アート」に食傷気味だと言いつづけているのも、なにも作品そのものを否定したいわけではなくて、往々にして既存の価値観を纏ってしまう「評価」というものの貧しさを批判している。その貧しい価値観こそが、上述したようにわたしたちの社会を隅々まで覆っていて、マイノリティを「審査」する基準になっている。「障害×アート」が「作品展」という形をとるとどうしても、パラリンピックや障害者雇用のように、マジョリティが引いたラインを越えられたと「評価」を受けた人だけを掬いあげるものになりがちなのも、狭量な評価軸のせいだろう。

「まなざしラジオ!! in 芸劇」では、「作品」よりも「日常的な表現」に、もっと言えば表現する人に寄り添う人たちの「まなざし」そのものに、スポットライトを当てていた。だからこそ、本展が画期的だったのだと思っているのだが、それは何ゆえ画期的なのだろうか。また、「日常的な表現」がただ闇雲に展示してあったとしてもまなざしを感じるわけではないし、いわゆる「作品」の周辺にまなざしが皆無だという風にも思わない。まなざしとは一体なんであろうか。

20年ほど前につくられた佐藤真監督の「まひるのほし」というドキュメンタリー映画では、暴言暴力とさまざまな「問題行動」をやらかす西尾繁さんをなんとかしようとする工房絵の関根幹司さん（現在はstudio COOCA施設長）のまなざしと、西尾さんが気になる女性に「電話を下さい」と毎日書いて渡していた膨大な紙片の展示「シゲちゃんコレクション」が映し出される。

数年前に東京都美術館での工房集の展示で見た「箱の展開図」では、どう見ても箱にはならない型紙が、しかも尋常ではない枚数のそれが重ねられて展示されていたのだが、この奇妙な「展開図」をおもしろがって、捨てずにいた人のまなざしを想像すると、なんだか嬉しくなった。昨年の大阪梅田での「about me 2」展でのYELLOWのスタッフが記していた、描いた人に会いたくなるような「キャプション」にもそれは潜んでいた。

おそらく、「正しいまなざし」というのが自明なものとしてあるのではない。今回展示された「まなざし」も一つの「正解」に収斂するようなものではなくて、六人に対して六様、いや、関わる人の数だけまなざしはさまざまであった。

何度も声を出して笑ってしまった「森田博康さんのスタジオ」では、10年以上に及んだ「破衣行為」を施設で関わってきたスタッフの証言をコラージュし、実にスリリングな番組に仕立て上げていた。「多い時期は一日一枚以上」「どうして破るのか」「デニムでも素手で?」「誰も破っている所を見たことがない」「これはアートではないか?」「ザワメキアート展へ出品!」「じつはもう破らなくなってしまった」「と思ったら……」（詳細はウェブで公開されるラジオ番組をぜひ聴いてほしいが）スタッフたちは楽しそうに語る者もあれば戸惑いを隠さない者もいたのだけれど、それぞれのやり方で彼のことを想っていて、それは差異に対する敬意のようにも思えた。ブースにあった森田さんの写真が、破った上着を羽織って誇らしげな表情であるのも、彼がその行為を含めたまるごとの存在として周囲の人たちに愛されている証のように見えた。

ブースを一つひとつ渡り歩きながら、添えられている写真や映像、展示物を見つつラジオを聴いていると、通奏低音のように本展を企画したアサダワタルさんたちの想いが流れているのがわかる。これは「アートのため」の作品の展示ではなく「人間を肯定するため」のアートの用い方の展示であったのだ。この、相手の存在を肯定しようという意志こそがまなざしの「正体」ではないか。たとえ既存の価値観では評価できなかろうとも、この人のことをなんとしてでも肯定するのだ、という人々のまなざしに接して、わたしの胸も熱くなっていった。それはきっと、わたしの中のマイノリティ性までも肯定してくれる可能性がそこに見えたからだ。

6人（出演のみのカプカプーズも含めれば7組）に関わってきた人たちのまなざしがなかったら、かけがえのないものであるとは見なされぬまま、彼や彼女の表現はわたしとも出会うことはなかった。だからこそ、このアサダさんたちのまなざしによって形にされた「まなざし」そのものの画期的な展示が、各地に巡回していくことを強く望んでいる。今もまだ誰にも気づかれないまま、何も為さない「無価値」な存在だと思われている人たちを肯定する、そんなまなざしをこの社会のあちこちで育んでいくためにも。

「まなざしラジオ!! in 芸劇」トクバン!

2020.1.11・13　東京芸術劇場　シンフォニースペース
パーソナリティ：アサダワタル

1月11日（土）　トクバン!① どちらかと言えば舞台寄りなまなざし編

■ オープニングラジオ

■ セッション1
現場での「まなざし」を知ろう ーカプカプや「スタ☆タン!!」の実践からー
ゲスト：鈴木励滋（NPO法人カプカプ 生活介護事業所「カプカプ」所長／演劇ライター）
佐藤啓太（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ 障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァ生活介護主任／「～雑多な音楽の祭典～スタ☆タン!!」プロデューサー）

■ セッション2
「まなざし」をつないでいこう ー千葉と神奈川の中間支援からー
ゲスト：吉原 廣（千葉県障害者芸術文化活動支援センターHONGERA（オンゲラ）！センター長／劇作・演出家）
小川智紀（認定NPO法人STスポット横浜 理事長）

■ セッション3
ラジオ座談会 ーみんなの「まなざし」を分かち合い、それらを持続させるための「仕組み」について語り合おうー

■ クロージングラジオ

1月13日（月・祝）　トクバン!② どちらかと言えば美術寄りなまなざし編

■ オープニングラジオ

■ セッション1
現場での「まなざし」を知ろう
ーハーモニーの実践やメインスタジオの表現から見えたことー
ゲスト：新澤克憲（就労継続支援B型事業所ハーモニー 施設長）
細馬宏通（人間行動学者／早稲田大学文化構想学部 教授）

■ セッション2
「まなざし」をつないでいこう ー埼玉と静岡の中間支援からー
ゲスト：宮本恵美（埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集）
鈴木一郎太（静岡県文化プログラムコーディネーター／株式会社大と小とレフ 取締役）

■ セッション3
ラジオ座談会 ーみんなの「まなざし」を分かち合い、それらを持続させるための「仕組み」について語り合おうー

■ クロージングラジオ

会場におけるバリアフリーコーディネイト：Palabra株式会社

トクバン!①
どちらかと言えば舞台寄りなまなざし編

2020年1月11日（土）13:30-18:00

オープニングラジオ

アサダ：障害のある人の「表現」と寄り添う人の「声」を集めた5日間限定のラジオスタジオ「まなざしラジオ!! in 芸劇」の「トクバン！」を始めます。東京アール・ブリュットサポートセンターRightsのディレクターのアサダワタルです。美術作品とか舞台作品というところでは語れない障害のある方の日常行為として繰り返される表現行為、そしてそれを見守り続けている人たちの「まなざし」について、言葉でしっかり語り合う機会として、どちらかというと「舞台寄り」なまなざし編と、どちらかというと「美術寄り」なまなざし編の2本の「トクバン！」を企画しました。また、本日、資料とともに「まなざしレター」という小さな紙をお配りしていますので、ゲストの方に聞きたいことや感想を是非書いて近くのスタッフに渡してください。セッション1のゲストは、カプカプ所長で演劇ライターでもある鈴木励滋さん、クリエイティブサポートレッツの佐藤啓太さんです。

セッション1　現場での「まなざし」を知ろう ーカプカプや「スタ☆タン!!」の実践からー

鈴木：カプカプは、神奈川県横浜市旭区の西ひかりが丘団地の商店街にある生活介護事業所です。3000世帯ほどある団地の一角で、喫茶店や、クッキーやプリンなどお菓子をつくる工房をやっています。目指しているのは、作業にメンバーをはめるのでなくて、一人ひとりがやりたいことを仕事にして、できるだけ稼ぐ。「アート」は、いろいろある選択肢の一つとして大切なものです。一人ひとりがやっているなんだかよくわからないものを、仕事だと言い張るいい方便になるので。

アサダ：カプカプでは、画家で絵本作家のミロコマチコさんや、体奏家の新井英夫さんなどがワークショップをなさっていますよね。

鈴木：うちはアート系ではないと言い続けているけれど、メンバーさんをいかに売るかというときに、アートは使い勝手がいいんですよね。描くことに拒絶がある人も含めて楽しんでいいんだというワークショップをミロコさんはやってくれています。

アサダ：絵とかの形になる人以外はどういう表現をしているかは、まさに今回のテーマなんです。

鈴木：新井さんのダンスのワークショップは、振付を覚えて踊るのではなくて、関係をつくっていくものです。一人ひとりのおもしろさを拾って、みんなで遊ぶ。重要なのは、こういうのありなんだというのをスタッフが経験すること。福祉の現場では「問題行動」として社会の中で適応するために矯正されがちだけれど、それをOKにする手はないかなということを考える力が培われるんです。

アサダ：ワークショップを重ねていく中で、日常の中でも変化が起こっていくんですね。

鈴木：ハレの日的にやるのではなくて、ベースを厚くしていくような。今の世の中ではよしとされない差異を世の中に合わせていくのではなくて、それをおもしろがって、魅了することをやれればやれるほど、アウトじゃないかなっていうような人たちが、OKになってくる。「人に話しかけたい」欲求がある人がいたら接客ということで似顔絵を描きながら話をさせちゃう。リサイクル品のカツラを延々と被る人がいたらカツラ愛好会をつくるし、バザーのために店先に並べる途中の服を自分で着ちゃう人がいたらファッションショーにしてしまう。そういうことを、地域を巻き込みながらやっていく。

アサダ：僕がやっている「カプカプラジオ」もそうですね。電波には乗らないし、映らないのにバザーで集まった服を着てビジュアルから準備したり。近所のスーパーで買い物する様子を（放送もしないのに）ラジオ中継したこともありましたね。

鈴木：それが何になるのかってどうでもよくて、何でもありにしていくと、存分に表現してくれるんです。

アサダ：今回、各ゲストに「まなざし」＝「私の視点」ということで、「私が表現したくなる曲」をリクエストいただいています。

鈴木励滋さんのリクエスト曲♪
FUKAIPRODUCE羽衣『サロメvsヨカナーン』
劇中歌『ゾロ目の歌』

鈴木：奇妙なミュージカル「妙ージカル」を名乗る劇団FUKAIPRODUCE羽衣の劇中歌です。0歳～99歳、その先までの人生を過剰なまでに繰り返し、上手い下手ではない切実さがあることに惹かれます。カプカプでやっているのも、切実な悪ふざけなんです。不謹慎なようで過剰なまでの熱量で切実に突き抜けていく。それが現場でもやれたらいいなと思っています。

アサダ：続きましては、佐藤啓太さんです。

佐藤：久保田翠が2000年に静岡の浜松に設立したクリエイティブサポートレッツ(通称：レッツ)というNPOが母体の障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァで生活介護の主任をしています。僕は2010年入社で、現在は生活介護と、雑多な音楽の祭典「スタ☆タン!!」という文化事業などを担当しています。施設見学の方と利用者さんがどっぷり関わる「観光事業」もやっています。

アサダ：佐藤さんはもともと木型職人だったとか？

佐藤：はい。リーマンショックの時期に辞めて、貯金もなくなってきて困っていたところにハローワークで求人を見つけて、今に至ります(笑)。僕自身が何を感じてきたのか、レッツの平成27年度の報告書に書いた「日常の音」というテキストを朗読しますね。

言葉を意思疎通の船として使わない、もしくは使えないとき、思いは身体的な動きや直接的な感情で現されたりしているように思います。あなたの心情へと思いを巡るとき、必要なものは言葉だけではないものと知りながらも言葉に期待してしまう気持ちを抑え、何が在るかなと目を凝らしたり耳を立てたりします。（中略）その人が言葉を用いて表さずともすでに注がれている視点がその場その場に表れているのでは、と期待しているからです。再生音を好みのゆっくりしたスピードに変えて再生する彼は、窓辺で揺らす自分の身体と刻まれる音の拍に眼差しを向けているのかもしれない。（中略）目の前の人が好きなり嫌いなり思う事がフッと見えたとき、私は「あ、わかる…」としみじみ思うのです。

アサダ：「まなざし」という言葉が入ってましたね。意味に還元することができない、形になりきらないものを含めて、その人自身をどう外に出していくのか。普段向ける「まなざし」が重要になってくるのかなと思います。

佐藤：うちは重度の方が多く、「存在そのものが仕事になるように」と久保田は願っているんですけど、地域で彼らを目の当たりにすることがないので、「スタ☆タン!!」においても、直接出会う機会を数多く設けたい、現場でのおもしろみを発信したいという思いがありました。

アサダ：「スタ☆タン!!」を形にして見せようとしたきっかけは何ですか？

佐藤：強度行動障害のある男性と一緒に、毎日4時間とか、汗だくになって音楽セッションしていたんです。宇宙一孤独な儀式だなと思うその濃密な時間を見ていたスタッフが、その熱量を外に出そうと「スタ☆タン!!」というオーディション企画を立ち上げたんです（笑）

アサダ：「スター誕生」の略ですよね。すべて企画化する必要もないでしょうけど、そこにも「まなざし」があるというか、成果を求められる世の中に「こういうのもありだ」と言うことも必要だと。

佐藤啓太さんのリクエスト曲♪
John Zorn『Hath-Arob』

佐藤：John Zornというサックスを吹くプレイヤーの「Masada」というバンドの曲です。がちゃがちゃばっきばきなんです。これをリクエストしつつ、さきほど話した宇宙一孤独な僕らのセッションもお見せしたいです。

（佐藤さんと男性のセッション映像）

アサダ：鈴木さんにも再び登壇いただきます。『ザツゼンに生きる：障害福祉から世界を変える　カプカプのつくりかた』を出すまでは、あえて、活動を言葉にして出さないようにしていたんですよね？

鈴木：日々つき合っていれば、その人のすごさが言葉でなくてもわかるんだけど、言ったとたんにこぼれ落ちるものが出てくる。こぼれちゃうものほど大切だったりする。わからないことも含めてすごさであり豊かさであることを伝えていくには、あの場で表現するものを見てもらうしかない。だから10年間は言葉という理屈を一切使わずに、地域のありとあらゆる人が、おもしろがってうちのメンバーと関わって楽しんでくれる時間を築きたかったんです。

佐藤：閉じている空間は密度がある分、豊かさもあるんだけれど、同時に、開いていくことも必要だと思います。

鈴木：新人のスタッフがよかれと思って当事者の話を延々と聞いてしまったことがあったんですけれど、抱え込まずにお客さんも含んだいろんな人に橋渡しして話せる相手を増やす方がいい。そうやって地域でいろんな人がつながっていく方がいい。

佐藤：僕は「体感せよ！目撃せよ！」と叫び続けてぶっ倒れていたりするので、「それじゃまわらないでしょ」とスタッフがフォロー入れてくれたりします。スタッフも利用者さんも「一人の人」としてあるように。

セッション2　「まなざし」をつないでいこう ー千葉と神奈川の中間支援からー

アサダ：次は、中間支援という立場からの「まなざし」をご紹介します。千葉県障害者芸術文化活動支援センターHONGERA（オンゲラ）！センター長で、劇作家・演出家でもある吉原廣さんです。

吉原：「いちぶんネット」と呼ばれる特定非営利活動法人いちかわ市民文化ネットワークでオンゲラという支援センターをやっています。2002年から「いちかわ市民ミュージカル」というのを2年に1回行っていて、市川出身の星野道夫さんの業績をミュージカルにしたりしました。あるとき、市民ミュージカルを見ていたお客さんからの「障害のある自分の子供にも舞台活動をやらせたい」という言葉をきっかけに「チャレンジド・ミュージカル」を始めました。参加者の7割が障害のある方です。私はそれまで障害のある人との接点はなかったのですが、この事業を機に障害のある方との活動がどんどん増えて、放課後デイサービスや、「交流カフェ」を開きました。

アサダ：今回の厚生労働省の事業で南関東・甲信ブロックの各県のエリアで障害のある方の支援を行うセンターをつくっていくという中で「HONGERA！」を立ち上げられたわけですが、どうやってネットワークをつくっているんですか？

吉原：「HONGERA！」を設立し、県内4-5ヶ所で福祉施設や団体関係者の交流を深める「アートネットカフェ」を準備しています。その人たちに地域と協働して生み出してもらおうという発想になりました。これまでは、僕ひとりでやってきたんですが、それぞれ主張のある人たちが集まってくると、まあ大変。でもそこを超えていかないとネットワークは生まれていかないですよね。

アサダ：コミュニティセンターや役所の人たちはどうですか？

吉原：具体的なやりとりが必要なのかなと考えています。活動する側が熱意をもってアピールできるかが鍵です。「障害のある人たちに教える視点ではなく、楽しむことが大事」と、今、ワークショップを積極的に行っています。

吉原廣さんのリクエスト曲♪
QUEEN『ボヘミアン・ラプソディー』

吉原：「ママ、僕、人殺しちゃったよ」って少年がつぶやくところから始まる音楽です。ドラマ性があるところが大好きです。ああいうドラマがあることでとたんに音楽の表情が変わりますよね。

アサダ：次に、神奈川の事例をSTスポット横浜 理事長の小川智紀さんにお話いただきます。

小川：1987年に劇場を持つ民間組織としてスタートし、2004年にNPO法人化しました。小さな劇場ですが、劇場を運営しているだけの組織ではなく、地域の芸術機関ということで活動を続けています。横浜市内の小中学校や特別支援学校などへ芸術家が出かけていく教育普及活動や、教職員研修なども行っていて、いろんな文化施設やアートNPOと連携することが重要だと考えるようになりました。助成金の事務局もしていますが、約1/3は福祉系の団体です。文化芸術の領域を広げていくという挑戦を続けています。

アサダ：中間支援をやろうというよりは、仕組みが先にあったのではなく、取り組みが先にあって、自然と地域とつながっていったんじゃないでしょうか。スライドに「つくる」「支える」「考える」と出ていますね。

小川：福祉事業として自分たちの想いを持った現場をやりたい、そして「つくる」現場を、「支える」人たちをどうしたらいいかを考えたい。ここに、出かけている先と具体的な数を挙げているんですが、文化施設に行きたいけど行けない人に向けてのモデル事業をやっています。

アサダ：「まなざし」を持ちながら文化施設を使って社会参加、さらなる扉を開いていくきっかけになれるかということですよね。

小川：施設側は、どうしたら自発性を汲み取れるのか、人との関わりのバリエーションをなんとか増やしたいという気持ちがある。例えば振り付けに合わせて踊ることだけがダンスではない。ダンサーは相手の存在から状況設定を読み取ることのプロ。人の存在そのものを可視化するという取り組みも行いました。

アサダ：コーディネーションが重要というか、表現者が自分のもっているスキルと現場で起きている状況を照らし合わせて、表現者自身もその状況の中でどんな表現が持ち込めるか試される現場なんだと思います。

小川：中間支援的な立場で言うと、自分たちだけでやっていてもダメだというのはわかっているんです。私たちみたいな人たちが神奈川にいっぱいいればいろんなことができるということで勉強会を開催しています。

小川智紀さんのリクエスト曲♪
たま『いなくていい人』

小川：福祉事業をやりたくて、神奈川県にプレゼンテーションをする1週間前に津久井やまゆり園の事件が起こってしまい、打ちひしがれていました。こんなときに「障害とアート」なんて言ってお金を取っていいのかと考えていたとき、ずっと頭の中に流れていたのがこの曲でした。

セッション3　ラジオ座談会ーみんなの「まなざし」を分かち合い、それらを持続させるための「仕組み」について語り合おうー

アサダ：座談会では本日のゲストのみなさんとディスカッションしていきます。鈴木さんのお話に、おもしろがるスタッフを増やすという話がありましたが、セッション2のつながっていく仕組みについて、どうお考えになりましたか？

鈴木：ネットワーキングはとても重要で、少しでも広げていくしかけとして、自立支援協議会などで他の事業所のスタッフのおもしろがる力を伸ばそうとしています。歌あり踊りありのゆるい地域のお祭り「あっぱれフェスタ」では、主催に旭区まで巻き込んでドンチャカやるような実践で、社会の寛容さを増やしていけるとよいなと考えています。

佐藤：吉原さんと小川さんの話を聞いて、中間支援の場があることで、現場でひとりで抱えなくていいんだと言ってもらえたような気持ちになりました。

アサダ：小川さんは、仕組みをつくっていくなかで、行政との付き合いをどう考えていますか？

小川：私たちの事業の95%は、行政からのお金を回している現実があります。でもだから公共的な事業だという考え方は違うと思います。いろいろ思惑はありますが、自分たちは何が必要で、何をやりたいのかが大事だと思います。あえて言えば、これは社会運動なんです。

アサダ：カプカプもレッツも、社会運動をやってると思うんです。現場と、仕組みをつくる中間支援が分かれるべきでないと思いつつ、役割分担しないと、現場は自分のところがまわらなくなる。一方で、中間支援の組織では芸術文化を使いながら福祉とつないでいく専門家はいない。福祉をベースにした団体と芸術をベースにした団体が、ともに中間支援みたいな組織や仕組みをつくるには、どういうことが考えられますか？

小川：超大変ですよね。レッツの職員さんは両方のバックグラウンドを持っている人がいますよね。

佐藤：背景がバラバラなことを尊重したい、という考えがあります。スタッフであれ、利用者であれ、遊びに来た人であれ、それは変わらない。

小川：「働く」とは何なんだろうか。働くということが基準になっているけれど、働く能力がある人だけがいち抜ける社会でいいのか。能力主義反対というやり方でなく、能力というものを「書き換え」ていく作戦が必要なんだと思います。

アサダ：ここで、ラジオネーム「はち」さんからのまなざしレターです。「その場所にいるだけで良い 存在そのものが仕事になる様な現場に変えていくために必要な事が見つけられていません。」まさに能力の「書き換え」の具体的な方法の話ですよね。

鈴木：カプカプでは、存在することも接客、としています。想いを強めていけば、本当になります。共感している人が地域に増えれば、社会に広がり、世界に広がるわけですから。貪欲にいろいろなものを見て、パクってでも、切実に試行錯誤すればよいと思います。

アサダ：ラジオネーム「メロンソーダ」さんからのまなざしレターでは、津久井やまゆり園の事件について書かれていました。みなさんにもコメントいただければ。

吉原：僕は事件の被害者が、なぜ実名報道されないのかずっと疑問を持っているんです。彼らが生き生きとしている表情が好きですし、いい関係でいたい。支援センターを活性化していくときにそんなことも含め、大きな課題があると考えています。

鈴木：事件で殺害された方々や殺害基準を知るに、これはカプカプの半分以上の人たちが殺されると思ったんです。これは私たち社会がつくっている価値観だと思います。それをなんとか変えなくちゃいけない。存在価値がないと見られている人たちがいかに豊かで、関わることがおもしろいかをできるだけ多くの人に伝えて、やりたいという人が増えることが、大げさかもしれないけれども相模原の事件に対する応答だと思っています。

クロージングラジオ

メインスタジオの方でも「まなざしレター」の投函ができるようになっています。いただいたレターの紹介もしていますので是非ご覧ください。ゲストのみなさん、ありがとうございました。

トクバン!① セッション3 座談会の様子
左から鈴木励滋、吉原廣、アサダワタル、千葉薫（音響・録音担当）、小川智紀、佐藤啓太（敬称略）

トクバン！②
どちらかと言えば美術寄りなまなざし編
2020年1月13日（月・祝）13:30-18:00

オープニングラジオ

アサダ：ゲストをご紹介します。東京都世田谷区にある福祉施設「ハーモニー」施設長の新澤克憲さん。ハーモニーでは、とても不思議なかるたをつくっていらっしゃいます。もうお一方は、人間行動学者で、現在は早稲田大学で教鞭をとられている細馬宏通さん。福祉の現場などで、支援スタッフの方々がどうコミュニケーションをとっているかの状況自体をつぶさに観察し、『介護するからだ』という本などにまとめていらっしゃいます。

セッション1　現場での「まなざし」を知ろう ーハーモニーの実践やメインスタジオの表現から見えたことー

新澤：ハーモニーで施設長をしています。うちは比較的年齢層が高めで、精神科に通院している方が多いことが特徴です。「幻聴妄想かるた」は、最初は手作りしていたんです。その後、医学書院で出版され、今は三作目が出ています。週に1回のメンバーとのミーティングで近況報告として話されたことを、かるたにしています。実際にどのようにかるたをつくっているか、今日はメンバーの金原さんが客席にいるので本人に話を聞いてみましょう。

金原：ある夜、突然、携帯が作動しなくなったことがあって、カーテンに虹色のきれいな色の玉がぱーとさしました。それから内視鏡の先端みたいな管がにゅうっとカーテンの間から出てきて、先端がオレンジ色に光ってたんです。近づいていったらカーテンのところが膨らんでて、その膨らみがどんどん上がっていくんですよ。触ってみたら人間の頭みたいな感触がして。電気をつけて戻ってきたら消えてました。カーテンを開けても誰もいなかった。

新澤：そんなことが日常的に起きています。そしてミーティングのときに金原さんにどんなことが起きたか聞くわけですね。宇宙人だとしたらそれはどんな宇宙人なんだろうってみんなが想像して絵を描く。みんなで本人に質問しながら、かるたにしていく。それでできたのが、これ。「あ、宇宙人！先っぽが光ってる」の札。わからない不安なものを形にして外に出すことによって、対策会議を開くことができる。一人の出来事を、みんなでわいわいガヤガヤとつくっているのが特徴なんです。手作りでかるたをつくっていた頃の動画を持ってきました。

（動画再生）

新澤：かるたをつくり始めて「障害者のAさん」ではなくて、一人ひとりを見てもらうべきじゃないかと思うようになりました。「誰かの妄想は私の現実」ってスライドに書きましたが、彼らの頭の中の出来事が僕自身の現実に影響を与えている。何が現実か何が妄想かっていうのはさほど問題ではなくて、困っている彼らがいるっていうことが大事なのであって、妄想というのを切り分けて考えたりはしなくていいんだと思うようになりました。

アサダ：今回、各ゲストに「まなざし」＝「私の視点」ということで、「私が表現したくなる曲」をリクエストいただいています。

新澤克憲さんのリクエスト曲♪
Daniel Johnston『Speeding Motorcycle』

新澤：僕と同じ学年の1961年アメリカ生まれで、躁うつ病を患いながら音楽を制作、去年（2019年）の秋に亡くなりました。ダビングという手法を知らなくて、アルバムカセットを自分で一本ずつつくって、好きな人のカバンに忍ばせたりしていたという(笑)。そういうふうに人に渡すって、すごいなと。

アサダ：つづいて、広く福祉の現場でも関わっていらっしゃる人間行動学者、細馬宏通さんです。

細馬：認知症高齢者の方々のグループホームで、滋賀県のいくつかのグループホームにお邪魔して「参与観察」、やわらかい言い方をすると片隅でぼーっと見ている、ということをしていました。時々レクリエーションに参加したりとか、介助手伝ったりしてましたけども、基本はノータッチです。

アサダ：メインスタジオを見て、気になったことはありますか？

細馬：ラジオということもあって、「声」が気になりました。AIKAさんの「OL」とか。僕が考えているOLより、彼女のOLの方がすごい。勝山さんは、ずっと鼻歌のようなものを歌っているのかな。生活の調子をつけるための声。描くときの時間があるんだって声から感じられる。空間に表れている作品もいいんだけど、つくり手の時間が見えるのがいいなって思いました。

アサダ：知的障害のある人とミュージシャンが集まる神戸の「音遊びの会」で、細馬さんとメンバーの坂口智基さんが即興演奏をしている動画をお持ちいただいています。

（動画再生）

細馬：即興って相手を真似したりすることから始まるんですけど、何回かやっていくとお互い手の内がわかってくるので、関係が逆転するんですね。おもしろい作品ができるのは、予想が覆されて、覆された先に違うことが出てくるとき。描くアートも同じようなことが起こっていると思うんです。作品って一人の作家の名の下に語りがちだけれど、施設で生まれる作品には、支援者の方の力が大きい。僕はそれでいいと思っているんです。毎日のやりとりの中に、即興演奏のような小さな発見や予想の裏切りが埋め込まれている。ぎんがさんの、マスキングテープを使っていると思ったら囲み出した、みたいな。作品という形に定着しないかもしれないけど、作品を作っている現場の時間自体はとても豊かなものになっていると思います。予想を超えてくる変化のおもしろさがわかるもう一つの動画、見てみましょう。

（動画再生）

認知症高齢の女性とスタッフが、ビニールひもの両端に柿を付けて、吊るし柿をつくっています。スタッフは、女性に何をやってもらえるか考える。持ってもらうことはできる。それで柿を持ってもらい、スタッフがひもを結ぶんですが、その関係が変化する瞬間があります。柿を結んだ後にひもが垂れ下がっていたんですよね。そのひもを女性が、あらら、と手繰る。スタッフが、その柿持ちましょうかってスイッチする。日常の中に予期しない役割交代のチャンスがパッと訪れる。この変化に気づけるかどうかは、わりと重要なこと。関係を維持しながらも（その役割が）新しくなるか。

アサダ：変化の潮目を見るというか。支援の中で、一瞬一瞬の行為までも含めて見つめる「まなざし」ということにつながっていきますね。細馬さんは「幻聴妄想かるた」の話にどのような感想をお持ちになりましたか？

細馬：作者ではない人の声で読み上げて、遊ぶ時間がすごく楽しそうだなと。声にしたとたん、その人の時間がそこに出るし、それと同時に勝負の時間になる。人の言葉を使ってそういう緻密な時間を作り上げていくのがおもしろい。

アサダ：かるたは「味わい方」の表現が深い。からだを使って遊ぶので、札に書かれていることを追体験することになるし、言葉ではないところで楽しめる。

細馬：熊谷晋一郎さんが、差別はカテゴライズから始まるとおっしゃっていたことがあります。名前のないカテゴリをつけちゃうっていう。だから個人個人の名前を大事にしよう、と。たとえば入浴介助ひとつとっても、ルーティンでやってしまうと同じパターンでしか捉えられないけれど、実は発見するポイントはものすごくたくさんあるんです。

アサダ：解像度をあげていくというとき、新澤さんは、スタッフ間やチームでどのように、その「まなざし」を共有していますか？

新澤：うちでは、確信犯的に個人情報を漏洩させたいなと思っているんです（笑）。「宇宙人が来た」みたいなことを言いふらして、互いがどんどんクロスしていく機会になって、場が豊かなものになっていったらいいな、と。

アサダ：次のセッションで、事業所の中だけでなくネットワークという話にも繋がっていけばいいなと思います。

細馬宏通さんのリクエスト曲♪
中村佳穂『LINDY』

細馬：久々に新しい歌い方する人が出てきたなと思って、うれしくなっちゃったんです。普段やっちゃいけないことや、失敗だと思われるようなことをみんなに見せてもいい場があると、途端に価値観が変わる。「やってもいいんだ」っていう発見をさせてくれるのが音楽の力だと思います。

セッション2　「まなざし」をつないでいこう ー埼玉と静岡の中間支援からー

アサダ：つづいて、まなざしを現場につなぐという視点から、アートセンター集の宮本さんです。

宮本：埼玉は、平成21年から障害者アート振興策が全国に先駆けて始まりました。実行委員会形式で、音楽、舞台芸術、美術の3つの柱からなっています。人材育成を主眼に、施設職員と学生が障害者アートの展覧会を作り上げるというプログラムも行っています。アートセンター集は、見学者は年間2千人いるんですが、展覧会、ダンスワークショップの開催など、調査・発掘・評価・発信を行政とも連携しながら行っています。埼玉をアップしていこうというTAMAP[正式名称：埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇（タマッププラマイゼロ）]というネットワークがあることも特徴で、11施設からスタートして現在は30ほどのつながりができて、集が事務局になっています。毎月定例会を開催し、情報交換の場にもなっています。

アサダ：今回、工房集からは西野克さんにご出品いただき、TAMAPのつながりで宮本さんからご紹介いただいた勝山直斗さんにも出品していただいています。表現の幅というか、おもしろさの視点を共有していると感じました。

宮本：その表現がアートかどうかを判断するのは外の人だと思っていて、私たちは、おもしろいとか、すごいとかいう視点を大事にしたいです。

アサダ：ここで、勝山直斗さんが生活している久美学園施設長の柏田さんが客席にいらっしゃるので、今回の取り組みで得たことなど少しお話いただけたら。

柏田：勝山さんはこの絵をいつの間にか描くようになっていました。「上手だね」とは言っていたんですが、施設側から見れば「壁の毀損」でもある勝山さんの行為を、工房集さんに出会わなければアートとして捉えることはなかったと思います。どうやったら勝山さんが絵を自由に描けるかという視点は、このTAMAPのつながりを得て、初めて生まれたものだと思います。

アサダ：再び、宮本さんに。グッズ展のような、メンバーさんの就労につながる展覧会の方が、周囲からの理解を得やすかったりしますか？

宮本：そうとも言えず、様々なコンセプトの展覧会を発信しています。グッズありきで形を先に決めてしまうと、つまらないものになってしまって、結局、本人のやる気もなくなってしまって止めてしまうという話もよくあります。また、うちでは美術だけでなく、舞台芸術にも力を入れていて、ダンスのワークショップもやったりしています。

アサダ：今回、トクバン！に「舞台寄り」「美術寄り」というタイトルをつけているんですが、表現してよいという雰囲気をつくることによって、結果としてそれらの表現が生まれるということかなと思いました。

宮本恵美さんリクエスト曲♪
Foorin『パプリカ』

宮本：利用者さんの間でも人気があって、よくこの曲に合わせて歌い踊っています。先日、久美学園の勝山さんのところに行ったときも本人からリクエストされたので。

アサダ：次は、静岡県文化プログラムコーディネーター株式会社大と小とレフ取締役 鈴木一郎太さんです。以前は浜松のレッツにもおられて、今は静岡県の文化プログラムコーディネーターの顔も持ちます。今日は福祉の現場の視点から取り組みをご紹介いただければと思います。

鈴木：普段文化事業をやっていないようなところが、自分たちの課題に文化芸術の手法を取り込んで企画するときの支援をしています。静岡県の文化プログラムの採択団体には様々な団体がいて、その中に福祉の団体も関わっているという枠組みで動いています。

アサダ：福祉のためではないけれど、文化の関わる先を広げていって、文化も一つのアプローチとして福祉の団体が使っていくことも含めた支援をしている。文化事業という枠だけでは広がっていなかったけれど、当然広げていくべきで、その中で福祉も関わってくる話だと思いますが。

鈴木：地元の静岡県浜松市の「浜松市根洗学園」という療育施設で砂連尾理さんが行ったワークショップの事例なんですが、肉食獣と草食獣のペアになって、追いかけて、逃げるというもの。肉食獣役の男性が、草食獣役の女性を追いかける形になって、ロールプレイだとわかっていながらも別の男性が、止めに入ったんです。これがすごくかっこよかった。もう一つは、NPO法人「障がい児・者の学びを保障する会」で行った「超大学」。軽度の知的障害のある人や一般の参加者が、とにかく一緒に会議をする会で、ある40代の男性が「自分は、自分のことだけで精一杯。でもみなさんは、時間とお金とエネルギーを使ってなんで恋愛してるんですか」って質問をしたんです。それが、参加していた大学生の胸に刺さったようで。思ってみなかったような問いかけの話です。

アサダ：鈴木さんは、ずいぶんといろいろな現場で、一言で障害と言ってもかなり広く関わっていらっしゃいますよね。しかも、第三者としての立場でいることが多い。

鈴木：初めての現場のときに意識的にしているのが、福祉の専門用語を使う(笑)。あと、おもしろかった現場のエピソードをたくさん伝えるということです。自分の視点を伝えることにもなるので。

アサダ：まさに、自分なりの「まなざし」を伝えることにもなりますね。

鈴木一郎太さんのリクエスト曲♪
Portishead『All Mine』

鈴木：10代の頃、イギリスに滞在していて、絵画制作中なんかによくかけていました。このバンド、1991年に結成されて、1999年ぐらいまで活動して2005年にまた再結成して、今も続いてるらしいんです。その間、アルバムは3枚だけ。そのペースに憧れますよね。

セッション3　ラジオ座談会 ーみんなの「まなざし」を分かち合い、それらを持続させるための「仕組み」について語り合おうー

アサダ：現場を外に開いて、ネットワークや支援が必要だと思ったとき、新澤さんだったら、どんな言葉をかけますか？

新澤：利用者さんのすごさを、手放しで自慢できる「親バカ」ならぬ「施設長バカ」になる人がもっと増えればいいなと夢見ています。現場で起きている出来事のなかにある「おもしろさ」を発見してくれる外からの客人にも期待しているんです。

宮本：異業種の方々に一緒に発信していっていただかないと、福祉業界だけでは限界があって制度の中でつらい状況です。措置から契約制度に移行してきたなかで、障害のある人にも成果が求められるようになってくると、施設側は事務作業に追われてしまう。目に見えない価値が、なかなかお金にならない現状があります。だけど、そこで光を見つけてくれるのが、外からの視点だと思っています。

アサダ：最近は「アート担当」という役割の人がいる福祉現場も多くなっていますが、みんながまなざしを共有していないと、プログラムをやっているだけで満足するのは、本質的じゃないなと思うんです。例えばワークショップをやることで、スタッフがエンパワメントされるということも大いにありますよね。細馬さんは、『介護するからだ』を書かれたとき、現場で働く方々からは、反応が大きかったんじゃないですか？

細馬：「うちのやり方とは違う」という人もけっこういました。本よりも、先程のような映像を見せたほうが反応は大きいですね。介護の仕事がいかに大変か、低賃金だということばかりで、おもしろさがあまり語られていないように思うんです。個人に視点を向けるのではなく関係に視点を向ける。障害の有無にかかわらず、予想が裏切られたりへこんだりするし、みんな形は違うけれど同じことをやっているという「関係の包摂」が必要だと思います。

鈴木：たとえば「この作品がすごい」ということを伝えようとしたとき、言葉が足りないんです。かと言って批評に使われる言葉は一般社会には難しすぎるし、受賞歴を並べているような方式だと寂しい。じゃあ福祉の現場にいるスタッフの言葉はどうかというと、作品をつくった人の普段のエピソードや周りとの関係性を延々と語ってくれるんです。

アサダ：今回会場で展示しているグレーのトレー

ナーは、森田さんが久しぶりに破いた服なんですが、それは問題行動として捉えられていたところを、アートとして捉えるという「まなざし」があったことで意味の転換がありました。それを最初に展示した「信州ザワメキアート展」実行委員長の関孝之さん（NPO法人ながのアートミーティング代表）にもお越しいただいているのでお話しいただきましょう。

関：アサダさんが取材に行ったとき施設長さんが「残念ながら最近破ってないんですよね」っておっしゃったんです。困ったことだとやり込められていたところが変わったというのが、とてもいいことだと思います。福祉現場ではまだまだ働くことやルールを守ることを重視する施設も多い。そういうところに僕らが出かけていって、アートを体感してもらうことで、少しずつスタッフのまなざしも変わっていきます。

アサダ：「まなざしレター」を紹介します。ラジオネーム「Y.miwa」さん。「『ただ生きていくこと』が表現ということ、『私のなかにもそのような私がいる』という気づきがあった。“あいまい”“不確実”なまなざしについて考えたい。」ということです。今回、表現している方がどのように世界を見ているかの「まなざし」、それをさらに見ている家族やスタッフの「まなざし」というテーマで企画しましたが、「アート」って言葉も含めてであればわかりやすいけれども、あいまいで不確実な状態そのままで知ってもらうことの意味もあるのかなと思っています。

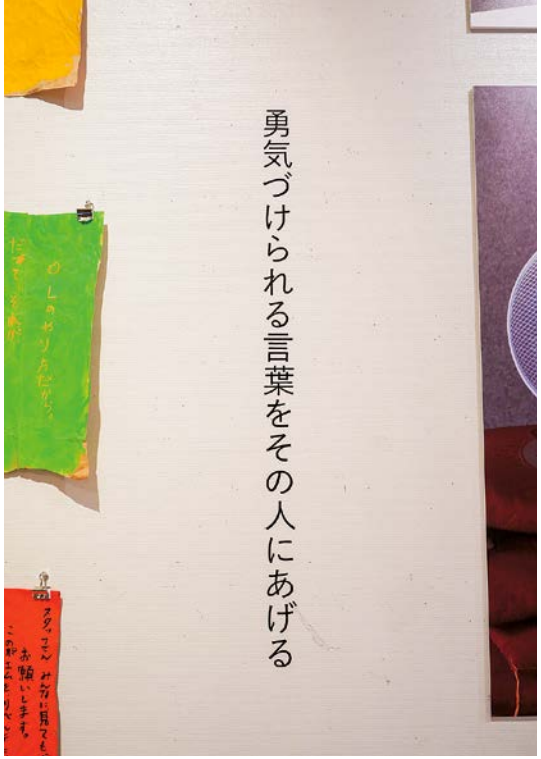
クロージングラジオ

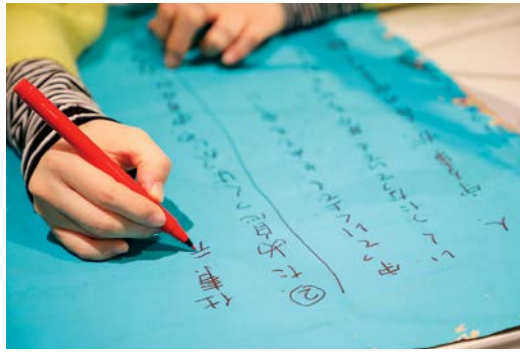
アサダ：2日間、ラジオフォーラム形式でトークをお届けしました。ゲストのみなさん、客席のみなさんも長時間にわたって、メインスタジオとトーク会場を行き来しながらご参加くださいまして、本当にありがとうございました。

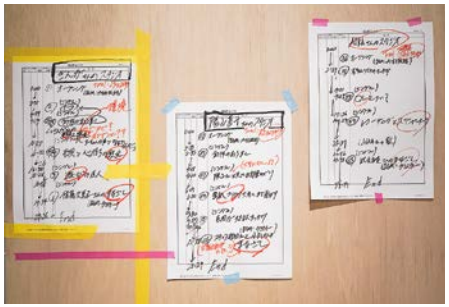
トクバン！② セッション1 会場の様子

まなざしラジオ!! in 芸劇
メインスタジオ

ON AIR
まなざし
セントラルスタジオ


勇気づけられる言葉をその人にあげる

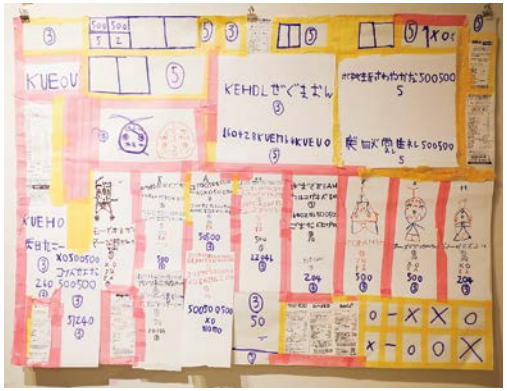




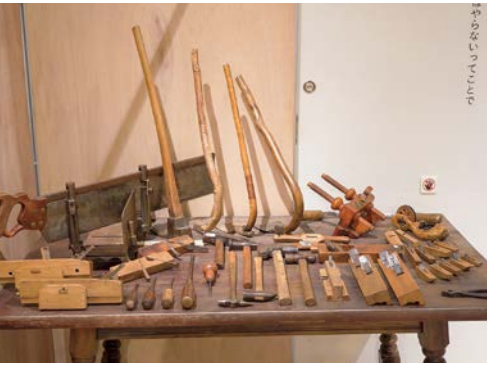
スタジオ
スタジオ

ラジオ!!

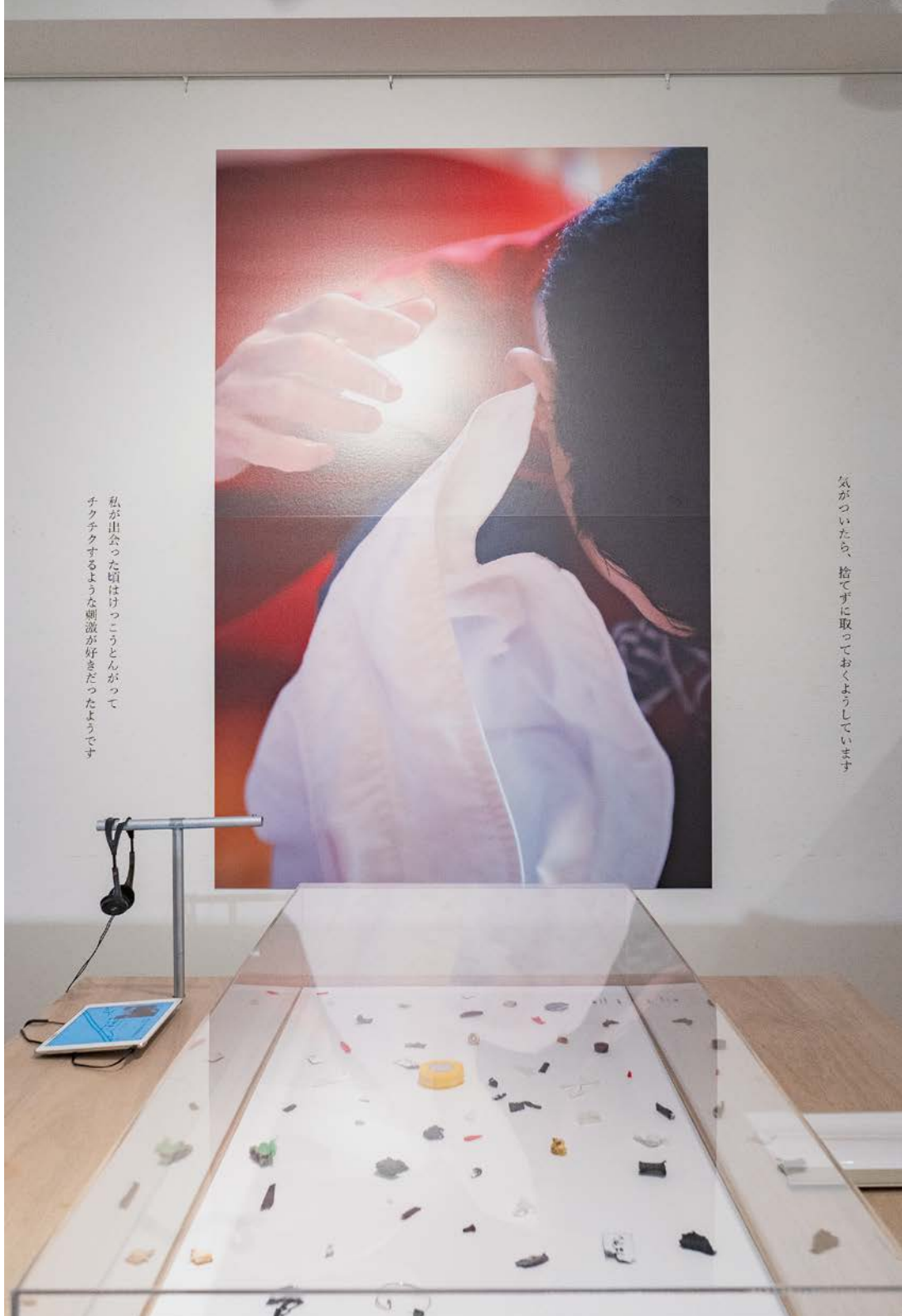
“たっぷりミルクのなんとかプリン”とか書いてるの見ると、
多分目の前にあったチランを見てたんだなとか（笑）



スタジオ



自分が苦しいと感じることはやらないってことで
いまは船づくりは休憩中


気がついたら、捨てずに取っておくようしています
私が出会った頃はけっこうとんがって
チクチクするような刺激が好きだったようです

まなざし

ある意味、芸術かもしれないですね
桑原博彦

ある意味、芸術かもしれないですね

カプカプーズによるカプカプラジオ

2020.1.14・15

「カプカプーズによるカプカプラジオ」in 芸劇

| 日　時 | 2020年1月14日(火)・1月15日(水) ともに11:00-14:00
| 会　場 | 東京芸術劇場　ギャラリー2

神奈川県横浜市のNPO法人カプカプで、アサダワタルと、カプカプのメンバー（愛称：カプカプーズ）が隔月で行っているワークショップ「カプカプラジオ」。今回、カプカプーズが「まなざしラジオ!! in 芸劇」に2日間に渡って出張した。カプカプラジオは、様々な障害のあるカプカプーズが放つ個性や才能を、「ラジオ番組のコーナー」という体裁で、「表現」へと編み上げている。絵画やダンスなど、すでに社会的な発表機会も得ているカプカプーズもいるが、誰もが表立った表現を行うわけではない。その人の生き様そのものや、語る内容、佇まい、生活や思考の癖のようなもの。そういったものが番組として構成され、そこに訪れるリスナー（カプカプに訪れる地域住民やカプカプファン、スタッフなど）と共に分かち合い、愛で合う。まさに「まなざし」を交換するための場が、カプカプラジオである。ここでは、「まなざしラジオ!! in 芸劇」での様子をお届けする。

1月14日（火）のカプカプラジオ

1. ノモトノルーツ（出演：野元好枝）

カプカプラジオではいつも必ずトップバッターとなる番組が、この「ノモトノルーツ」。宮崎県延岡市にルーツを持ち、現在は横浜市内のグループホームで暮らす御年70歳の野元好枝さんは、カプカプの最古参で「おっかさん」的存在だ。そんな野元さんが、中華料理屋をやっていたお母様との思い出、長年の横浜での人生を、歌とトークで振り返るコーナーとなっている。彼女と話していていつも驚かされるのは、その抜群の記憶力。「この曲は昭和〇〇年の曲で、この歌手は平成〇〇年に亡くなったのよ。昭和〇〇年ごろまでお店やっていたときによく聴いたのよ」といった会話が繰り広げられ、エピソードの具体性が増していく。今回は石原裕次郎『夕日の丘』を生唄付きでトーク。

2. ジャニーズ研究部（出演：川崎佐和子【部長】、髙橋智美【副部長】、黒瀧勝【調査員】）

ジャニーズを愛してやまないカプカプーズの3人が、熱い想いを語りつくす番組。会場では雑誌『明星』を持参し歴史を語る姿もあり、推しメンをスライド写真とともに紹介するコーナーも。「王子様」と呼びながらもユニット名の正確な読み方は実は知らないという事態が発覚するわ（A.B.C-Zのこと。「エー.ビー.シー-ズィー」と読む）、ジャニーさん亡き後のジャニーズはどうなる問題も話すわ、恐れを知らない爆笑トークが繰り広げられた。このトークの魅力は、比較的最近人気のあるジャニーズ（King & PrinceやSexy Zoneなど）の話題が多めのなかに、調査員黒瀧さんが、突然「僕は光GENJIとかの世代だから」と旧世代の話題にいき、どんどんジャニーズからも話が逸れていっては、また元に戻すという攻防戦。ジャニーズのことを知らない来場者も彼女たちの熱意あるトークに引き込まれていたようだ。

3. MCシライのコーナー（出演：白井尭夫、福地優樹）

26歳とは思えない落ち着きとおっさん臭さが魅力で、カプカプ内にも多くの女性ファンがいる白井さん。安定感のあるMCを展開しながらも、リクエスト曲は北島三郎『与作』という期待を裏切らない選曲で大盛り上がり。カプカプいちのお祭り男でダメキャラとして定評のある福地さんは謎の覆面男に変身し、近くにいる来場者に話しかけながら、白井さんと肩をくっつけて和気あいあいと場を盛り上げていた。

4. カプカプラジオショッピング　ノモトノシリーズ（出演：野元好枝）

「ノモトノバケツ」「ノモトノバッグ」などなど、手芸が得意な野元さんの手づくり品を、「まなざしラジオ」内だけの特別価格でご提供するコーナー。野元さん自ら、商品を一つひとつエピソード付きで紹介。特別価格をもったいぶって発表するときの高揚感を来場者一体で楽しんだ。野元さん、実はとても編むのが早くて、1日30枚も制作しているのだとか。いつもアサダがカプカプに行くたびに、座椅子に座りながらもくもくと手を動かしている野元さんの表現が、一挙に紹介できる良いコーナーとなった。カプカプでは現在、中細の毛糸を絶賛募集中とのこと。最後にリクエスト曲、石原裕次郎＆八代亜紀『別れの夜明け』をかけて終了。

5. わたしが愛した男たち（出演：髙橋智美）

ジャニーズ研究部でお馴染みの髙橋さんが、これまで「愛した男たち」の経歴や魅力を事細かに調べ、スライド写真を活用しながらたっぷり語るコーナー。児嶋一哉（アンジャッシュ）も好きだけど渡部建（同）も好き。児嶋さん愛をたっぷり語りながらも、どちらかと言えばやっぱり渡部さんが好き？いや、でもナンチャン（南原清隆）も……。でもやっぱりジャニーズ陣か……。山本リンダ『狙い撃ち』を歌いながら溢れる愛をお届けした。髙橋さんが結局、どの男が一番好きなのかは、未だ明かされていない。

6. 黒瀧勝のウニャウニャお悩み相談室（出演：黒瀧勝【悩める人】、白井尭夫【室長】、福地優樹【副室長】、川崎佐和子【美人秘書】、髙橋智美【恋の相談員】、野元好枝【アドバイザー】）

「海苔弁にのっている海苔が引っかかって眠れなかったら」「（11時過ぎに寝て6時過ぎに起きるけど）眠れない」「結婚したい」。尽きることのない悩みを、ときに笑い、ときにツッコミながら、ウニャウニャと進行する新番組。「悩み」とは何か、そもそもそれは「悩んでいるのか？」といった哲学的な問答に立ち向かいつつも、まさにそれこそが本人の個性であり「悩めるという才能」であると再解釈しながら、トークを展開した。

7. ヨビステ（出演：髙橋智美、川崎佐和子、野元良枝）

リスナーが呼び捨てしてもらいたい人の名前とその理由を投稿すると、ヨビステガールズの3人がSexy Zone『よびすて』に乗せ、エコー全開で思いっきり呼び捨てするコーナー。気に入った飼い犬につけた友達の名前、イケメン韓国人俳優の名前、応援したい人の名前が、会場にこだました。

1月15日（水）のカプカプラジオ

1. カツラ愛好会（出演：小林祐樹【会長】、石川郁弥【秘書】、佐々木崇仁【第2秘書】）

カプカプラジオのなかでも最も放送事故が多いカツラ愛好会のお二人が登場。なぜなら小林さんも石川さんもいわゆる「会話」をほとんどしないから。しかしそれでも「ラジオ」として成立するのが、このカプカプラジオの真骨頂。カプカプに寄付されるバザー用の商品の数々から、選りすぐりのカツラを取り出し、そのカツラをセンス抜群に被りこなす様子を、写真とともにご紹介。いつも「お化けの手」をしながらこちらにそーっと寄ってくる小林さんのリクエスト曲は氷川きよし『ゲゲゲの鬼太郎』。石川さんからはFoorin『パプリカ』を受け付けて、大いに盛り上がった。

2.「カプカプテニス部」（出演：馬上美姫【部長】、アゼカワブチョー【部員】、中原真波【部員】）

テニスラケットとバトミントンのシャトルで、ほぼ毎日部活動を行う「カプカプテニス部」の面々が登場。馬上部長が憧れる「不動峰中」（漫画『テニスの王子様』）テニス部の魅力をスライドを使いながらたっぷりお伝えするコーナー。どうも若いイケメン男性しか部員認定されないという噂にも言及し、今後の活動の抱負を語ってもらった。ちなみに部員認定されると馬上部長手作りの団員証が手渡され、カプカプの喫茶でそれを見せればコーヒーが割引になるらしいが、鈴木所長にはそのサービスができたことは事後報告だったらしい。

3.「ゴマフアザラシ物語」（出演：沼舘洋美）

2013年、小田原市などでゴマフアザラシの子供の目撃情報が相次いだ。愛称「オダちゃん」を愛する喫茶カプカプの沼マスターこと沼舘さんをゲストに、その後のオダちゃん情報を追うコーナー。沼マスターが毎日制作しているという「ゴマフアザラシ物語」についてや、オダちゃんに触りたいという夢をじっくりうかがった。リクエスト曲はZARD『揺れる想い』。そのあと、来場者のお一人から、いしだあゆみ『ブルーライトヨコハマ』のリクエストをいただき、会場が一気にカラオケスナック化。展覧会場とは思えない異様な空気が放たれた。

4. カプカプヒーローヒロイン対談（出演：Gマンママ、キヤマン）

カプカプを代表するヒロイン・Gマンママと、ヒーロー・キヤマンの対談がついに実現。Gマンママはシングルマザーで8つ子を育てたというすごい経歴の持ち主。一方のキヤマンは、美少女・沼さんを助けるために生まれたヒーローながら、母に握り拳を上げることがある（！）という背景もあるとか。Gマンママはいつも覆面をしているので、本当の正体は誰なのか不明。しかし、一説によればカプカプーズのTさんなのでは？という噂も。その噂が本当だと言いたいばかりに、時折、ネタをばらそうとしては周囲から突っ込まれまくる姿は今回も健在。リクエスト曲は次のコーナーに続くように、大山のぶ代『ぼくドラえもん』。

5. ラジオドラマ「カプカプ版ドラえもん」（出演：カプカプーズオールキャスト）

カプカプでドラえもんをやるなら配役はどうする？脚本は？ということをカプカプスタッフ鈴木真帆さんが夜な夜な真剣に考え、遂に発表するコーナー。ドラえもんのスペシャルゲストにサザエさんが出たり、テニスの王子様や少年アシベが堂々と混じってくるという展開も飛び出し、カオスな配役でラジオドラマを楽しんだ。

6. カプカプバザーラジオショッピング（出演：小林祐樹、石川郁弥、馬上美姫、中原真波）

前日に行われたラジオショッピング企画の第二弾。カプカプのバザーに寄付された服を、カプカプーズが見事にスタイリングし、ラジオブースを所狭しとブツを取り上げては売りさばくコーナー。お値段なんと30万円（！？）のものも。キラキラしたドレスもズボンもなんでもござれ。2日間走り抜けてきたカプカプラジオも終盤を迎え、カプカプーズの興奮と疲労が混ざってより一層熱いテンションで駆け抜けた。

7. あっぱれ音頭とカプカプテーマソング（出演：カプカプーズオールキャスト）

カプカプラジオの大トリコーナーは、横浜市旭区の区民音頭の替え歌「あっぱれ音頭」をみんなで歌い、カプカプのテーマソングを披露するコーナーをお届けした。

普段とはまったく異なるシチュエーション・会場にも関わらず、カプカプーズはいつもと変わらずに、見事なまでに一人ひとりの表現をこの東京芸術劇場の会場に持ち込んでくれた。そして、「出展」という形ではなく、「生出演」という形で、この「まなざしラジオ!! in 芸劇」の7組目の表現者として参加してくれたことで、「人という存在そのものに表現がある」という「まなざし」をストレートに表せた点は、きっと来場者にも伝わったことだろう。カプカプラジオは2ヶ月に一度、横浜市旭区の喫茶カプカプと工房カプカプで実施されているので、より日常現場におけるカプカプラジオを体験したい方は、一度、カプカプ（045-953-6666）に問い合わせて「放送日」を確認の上で見学してみては。（アサダワタル）

東京アール・ブリュットサポートセンターRights（ライツ）

東京アール・ブリュットサポートセンターRights（ライツ）とは

「東京アール・ブリュットサポートセンターRights（以下、Rights）」は、障害のある方が展覧会に作品を出展したり作品を商品化したりする際に、より安心して創作活動に取り組んでいただけるよう、相談支援体制を整備すべく、社会福祉法人愛成会により運営されています。近年、障害のある方々が創作する作品に対する評価の高まりとともに、展覧会への出展をはじめ、商品へのデザイン使用といった商業的利用の需要や作品の売買についてのお問い合わせが増加してきています。障害者の芸術活動支援の場面においては、権利保護のための相談支援体制の整備や、その担い手の人材育成に取り組むことが、障害者の権利の向上や社会参加を推進していく上で最も重要な観点の一つであると考えます。

そのうえで、Rightsは障害のある方々が生み出す美術・身体表現・音楽などの創作やそれらを取り巻く環境の充実を目指して、「相談支援」「人材育成」「ネットワークづくり」「調査発掘・発信」「発表等の機会の創出」などに取り組んでいます。様々な視点から障害のある方の表現について考え、その創作環境の充実や周囲の方々の理解や知識の拡充に繋げるプロジェクトを展開しています。

令和元年度、Rightsは、厚生労働省 障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック 広域センターとして、そして東京都 障害者芸術活動基盤整備事業 支援センター（美術分野）として、それぞれの補助を受けて活動しました。

Rightsを運営する社会福祉法人愛成会とは

昭和33年（1958年）の創立以降、東京都中野区にて利用者とともに地域づくり・街づくりへ寄与していく取り組みを行っている社会福祉法人です。平成16年（2004年）に地域で暮らす障害のある方々の創作活動の場として生まれた「アトリエpangaea（ぱんげあ）」は、現在では所属や年齢、障害の有無を問わず、一人ひとりのあるがまま、ありのままを大切にする自由な空間として運営しています。平成22年（2010年）からは、中野区内の商店街や地域の方々と協働して「NAKANO街中まるごと美術館！ アール・ブリュット―人の無限の創造力を探求する―」を毎年開催しています。令和2年（2020年）の開催では10周年を迎え、中野駅周辺を中心に実施場所が拡大するなど広がりが見られました。

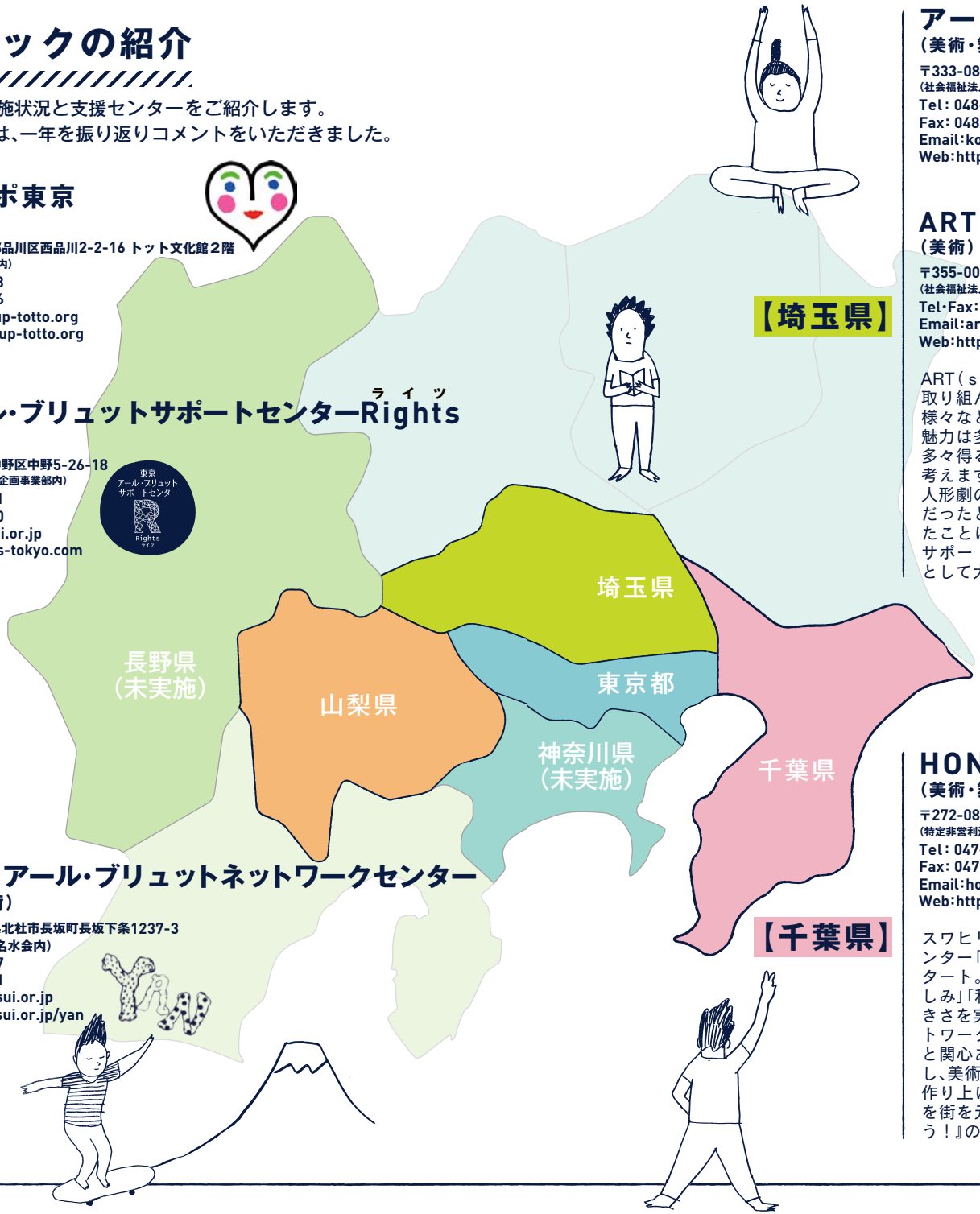
また、海外での日本のアール・ブリュット展の日本側事務局を務め、平成30年度（2018年度）には東京都とパリ市の文化交流事業『パリ東京文化タンデム2018』の一環としてパリ市で行われた「アール・ブリュット ジャポネII」展を主催者の一員として開催しました。

「人はみんな、自分の人生の主人公」という理念のもと、多くの方と共に芸術文化に貢献する活動を展開していきます。

社会福祉法人愛成会 法人企画事業部
〒164-0001　東京都中野区中野5-26-18
電話：03-5942-7259　ファックス：03-3387-0820
Eメール：kikaku@aisei.or.jp
www.aisei.or.jp

南関東・甲信ブロックの紹介

今年度の南関東・甲信ブロックの実施状況と支援センターをご紹介します。
新しく設置された支援センターには、一年を振り返りコメントをいただきました。



【東京都】

アーツサポ東京
（舞台芸術）

〒141-0033　東京都品川区西品川2-2-16 トット文化館２階
（社会福祉法人トット基金内）
Tel：03-3779-0233
Fax：03-3779-0206
Email:info@artssup-totto.org
Web:https://artssup-totto.org

東京アール・ブリュットサポートセンターRights（ライツ）
（美術）

〒164-0001東京都中野区中野5-26-18
（社会福祉法人愛成会 法人企画事業部内）
Tel：03-5942-7251
Fax：03-3387-0820
Email:rights@aisei.or.jp
Web:https://rights-tokyo.com

【山梨県】

YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター
（美術・舞台芸術）

〒408-0025　山梨県北杜市長坂町長坂下条1237-3
（社会福祉法人八ヶ岳名水会内）
Tel：0551-45-7027
Fax：0551-32-6351
Email:yan@y-meisui.or.jp
Web:http://y-meisui.or.jp/yan

【埼玉県】

アートセンター集
（美術・舞台芸術）

〒333-0831　埼玉県川口市木曽呂1445
（社会福祉法人みぬま福祉会 工房集内）
Tel：048-290-7355
Fax：048-290-7356
Email:kobo-syu@marble.ocn.ne.jp
Web:http://artcenter-syu.com

NEW

ART（s）さいほく
（美術）

〒355-0077　埼玉県東松山市上唐子1532-5
（社会福祉法人昴 まちこうばGROOVIN'内）
Tel・Fax：0493-81-4597
Email:arts_saihoku@subaru-swc.com
Web:https://www.subaru-swc.com

ART（s）さいほくでは『人』『地域』『まち』をキーワードに取り組んできました。地域の協力を得るため県内西北部の様々なところを訪れ事業の紹介をおこないました。作品の魅力は多くの人の関心をよび、また地域ならではの協力を多々得ることができ、今後も協働を呼びかけていきたいと考えます。また作品展において特別支援学校の生徒による人形劇の実施をサポートしました。それは彼の長年の『夢』だったとのこと。ルーキーイヤーにして彼の『夢』に関われたことはとても嬉しい経験でした。『ひとりひとりの夢をサポートする』ことも、これからのセンターの活動の指針として大切にしていきたいと思います。

【千葉県】

NEW

HONGERA（オンゲラ）！
（美術・舞台芸術）

〒272-0834　千葉県市川市国分7-12-5
（特定非営利活動法人いちかわ市民文化ネットワーク内）
Tel：047-369-7522
Fax：047-711-8813
Email:hongera@ichibun-net.com
Web:https://ichibun-net.com/hongera

スワヒリ語で”おめでとう！”の意味を持つ千葉県支援センター「HONGERA（オンゲラ）！」は、2019年8月30日にスタート。「待ってました！」「どんな支援をしてくれるか楽しみ」「私も手伝いたい！」と多くの声が集まり、期待の大きさを実感しました。11月開催のフォーラムでは協働ネットワーク結成の呼びかけを行い、働きかけてみれば、好意と関心あふれる反応がいっぱいで「協働する喜び」を堪能し、美術展示とパフォーマンスを同時開催するイベントを作り上げました。今後もHONGERA!は『面白い活動で、人を街を元気にする！障害者アートの満開の花を咲かせよう！』の思いで事業に取り組んで参ります。

人材育成研修

まなざしラジオ!! in 長野

【開催概要】

日　時：2019年9月21日（土）13：30-18：30
会　場：犀の角（長野県上田市中央2-11-20）
参加費：無料
参加者数：25名

【プログラム】

オープニングラジオ

セッション1　長野での「まなざし」を知ろう！
ザワメキアート展やリベルテの実践から
ゲスト：関　孝之（NPO法人ながのアートミーティング代表／信州ザワメキアート展実行委員会委員長）
武捨和貴（特定非営利活動法人リベルテ理事長／スタジオライト施設長）

セッション2　「まなざし」を各地でつないでいくために大切な「仕組み」について、文化政策の専門家からちょっと学んでみよう！
ゲスト：大澤寅雄（文化生態観察／株式会社ニッセイ基礎研究所研究員）

セッション3　いろんな地域でやってます。障害のある人の表現を支える近隣県の「支援センター」を知ろう！
ゲスト：米田昌功（富山県障害者芸術活動支援センター　ばーと◎とやま代表）
堤　鉄博（公益財団法人岐阜県教育文化財団／岐阜県障がい者芸術文化支援センター・TASCぎふ）

ラジオ座談会　みんなの「まなざし」を分かち合い、それらを持続させるためにどんな「仕組み」があったらいいか語り合おう！

クロージングラジオ

【レポート】

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsは、広域センターの採択を受けた平成29年度から、支援センターが未設置の長野県で支援にアートを取り入れている施設や障害者の芸術活動の普及に取り組んできたスポーツ・文化施設などの訪問・調査を行い、人材育成研修や身体表現のワークショップなどを行ってきた。過去2年間、長野県の方々と一緒に考えてきた支援センターの役割について考察するため、今年度は上田市で人材育成研修を開催した。会場は犀の角という劇場である。ゲストハウスを併設し、商店街の一角に位置するこの場所で、地域と密着した活動を行っており、劇場内にあるカフェは、ゲストにお招きした武捨さんが代表のリベルテがその事業に関わっている。

まずは、セッション1において長野県で障害者の表現活動を事業として取り組まれている方々に、実践者がどのようなまなざしをもって障害のある方と向かい合っているかをその経験をもとに語っていただいた。日常の中で見られる障害者の行動や作り出されたものを、アートの視点を入れてまなざしを向ければ、様々な表現が生み出されていることに気づく。たくさんの事例をご紹介いただくことで、自分たちの身の回りにある表現を振り返る時間ともなった。

次に、文化政策の専門家に、障害者の芸術活動がどのように法整備され、現在国がどのような施策を行っているのかをご説明いただいた。その後、中間支援について、また社会包摂についてのお話を通して、支援センターが社会の中でどのような役割を担うのかを考えた。

そして、支援センターとして事業を実際に行っている方により、それぞれどのように事業を実施しているのかが語られた。県内のみならず県外のネットワークを広く作り出し地域と深く関わった活動をしている支援センターや、公共文化施設が支援センターとなり活動しているといった事例から、長野県に根付くにはどのような形の支援センターがいいのかを考えるきっかけとなった。

最後に、全てのゲストによる座談会を開き、中間支援の在り方や障害者に向けるまなざしについて語り合った。

中央は、長野県健康福祉部障がい者支援課 横森洋平さん

ラジオ座談会の様子

会場には、障害者の芸術文化活動の普及に関心を寄せ、そして長野で何か面白いことをやりたい、という思いを持った方々が集まり、長時間のトークだったにもかかわらず、どの方も最後までとても集中している様子が見られた。このトークイベントをラジオ形式で行い、ゲストのみならず参加者からもリクエスト曲カードを集めたが、そこに様々な意見が寄せられたことで、まさしく皆さまに参加いただくことができたのではないか。長野県の障がい者支援課の方に加えて、文化政策課の方も参加され、長野県の障害者による芸術文化活動の普及支援について語り、将来につながる時間になったと感じている。

参加者のアンケートには、「県内外の取り組みや仕組みづくりについて知るために参加した」というものや、「長野県内に今ある文脈をどのように活かし連携していくかを考えたい」といったコメントがあった。「長野で行われている活動の魅力を改めて感じた」「支援現場で何が大切かを確信した」といったご意見からも、長野県で障害者の芸術文化活動が広がる兆しが感じられた。（東京アール・ブリュットサポートセンターRightsセンター長　松山恭子）

左から堤鉄博、米田昌功、大澤寅雄、関孝之、武捨和貴、アサダワタル（敬称略）

芸術鑑賞のバリアフリー化
芸術文化が全ての人に開かれるために―Palabra株式会社の想い

1月11日（土）と13日（月・祝）に開催した「トクバン！」（詳細はP86－P96）において、バリアフリー字幕や音声ガイドを制作するPalabra株式会社にバリアフリーコーディネイトをお願いした。会場での受付では、筆談ボードなどで聴覚障害者への対応、トークでは、手話通訳とリアルタイム字幕表示であるUDトークの導入を行っていただいた。

Palabra株式会社は、主に映画や映像をはじめとする芸術文化を多くの観客に届けるため、字幕や音声ガイドの制作を行う会社である。今回、「トクバン！」のバリアフリーコーディネイトをお願いするにあたり、芸術文化のバリアフリー化に取り組み続ける想いを代表取締役社長の山上庄子さんに伺った。

映画が大好きな山上さんがバリアフリーの世界を作り出しているのは、障害というものに関係なく映画を本当の意味で多くの人と共有したいという気持ちからであり、障害者のためということを特に意識したわけではなく、誰とでも同じように映画を楽しむために、ということから続けているという。一つの映画をバリアフリー化するために、障害当事者や映画監督プロデューサー、字幕音声ガイド制作者の三者で話し合いを重ねて、バリアフリー映画となってもその映画の世界観が変わらず伝わるものとなるまで妥協しない。

聴覚・視覚障害者のためにバリアフリー字幕や音声ガイドをつくるのは、日本人のために外国映画を日本語字幕付きにするのと同じこと、と山上さんは言う。芸術文化こそ全ての人に開かれているべき、そこには障害という概念は必要ないのでないか、大事なのは一人ひとりときちんと向き合うこと。

映画だけでなく演劇やイベントでのバリアフリー化に取り組んでいるPalabra株式会社だが、そこには人と人の間にバリアをつくらない人たちの、人を想う気持ちが集まっている。今回バリアフリーコーディネイトをしていただいたことで、「トクバン！」のようなトークイベントのバリアフリー化が進めば、芸術鑑賞のみならずイベントでも障害の有無に関わらず多くの人が一緒に楽しみ学ぶ機会が広がることを感じている。（松山恭子）

Palabra株式会社

東京都中野区を拠点とするバリアフリー字幕や音声ガイドを制作する会社で、Palabra（パラブラ）は、「言葉」を意味するスペイン語である。バリアフリー字幕や音声ガイドを言語の一つと考え、その言語を使う人々がどのように解釈するのかを確認しながら、字幕・音声ガイドを制作する。

人材育成研修
視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

本事業で企画した人材育成研修として、都内で開かれたアール・ブリュット展で「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」を開催した。

主宰する団体の視覚障害者と晴眼者のスタッフがファシリテーターとなり作り上げ、様々な展覧会でも開催されているこの鑑賞ワークショップは、見えるものと見えないものを考えながら対話することで、美術作品を鑑賞していく。障害のある方とない方が一緒に参加し、最初は見えるものとして作品の色や形、数などを説明するが、その後に見えないもの、作品から感じたことをそれぞれが話す。展示空間で一つの（一人の）作品について数人が時間をかけて言葉を駆使して鑑賞することで、参加者は一人では感じなかった作品の新たな見方を経験しているようだった。

鑑賞をした後は振り返りを行い、このワークショップを通して感じたこと、学んだことなどを話し合い、共有した。障害の有無にかかわらず、誰もが作品について、また美術鑑賞について新しい発見ができるワークショップだった。

開催日時：2019年11月9日（土）　11：00-13：00、15：30-17：30（2回開催）
会　　場：品川区立障害児者総合支援施設 多目的室２（展示室）
「アール・ブリュット展　響きあう、コドモゴコロ」
参加人数：12名

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

2012年発足。代表は林建太。全国の美術館、学校などで、毎月1回のペースで活動する任意団体。目の見える人、見えない人、異なる属性の人が集まり言葉を交わしながらさまざまな視点や経験を持ち寄って「みる」ことについて考えるプログラムを企画運営している。誰もが気軽に美術館を訪れて、感じていることや印象、経験や考えを自由に語り合う、そんな美術鑑賞のスタイルを目指している。

写真：石井和彦

Consultation

相談支援

東京アール・ブリュットサポートセンターRightsでは、障害のある方の芸術文化活動に関する疑問にお応えするため、相談支援を行っています。

センター内に相談窓口を設け、常駐する相談員が主に電話やメールなどで相談を受け付けます。寄せられる内容は、創作の場所を探している、発表の機会はないか、という活動に関するものや、作品の二次利用についての権利関係に関するもの、そして鑑賞の機会についてのものなどがあります。

疑問を解決するために専門的知識が必要な場合には、専門アドバイザーとしてこの事業に関わっていただいている方々にご協力をいただきます。

Advisor

専門アドバイザー紹介

美術分野

山田貴之
板橋区議会議員
元ルイス・C・ティファニー庭園美術館 学芸員

舞台芸術分野

西洋子
東洋英和女学院大学 教授
特定非営利活動法人みんなのダンスフィールド 代表

酒井まゆみ
特定非営利活動法人ハイテンション
生活介護事業所Jump所長
サルサガムテープ サックス

鑑賞支援

山上庄子
Palabra株式会社 代表取締役社長

権利保護

中久保満昭
あさひ法律事務所 弁護士

山崎純
あさひ法律事務所 弁護士

易智久
あさひ法律事務所 弁護士

採澤友香
あさひ法律事務所 弁護士

青木武
中野ブロードウェイ商店街振興組合 理事長

専門アドバイザーからのコメント

中久保満昭　あさひ法律事務所 弁護士

ライツ6年目の活動を終えて

厚生労働省のモデル事業として始まったこの取組みも、今年度ではや6年目の活動を終えた。当初は現場のニーズを手探りで探るところから始まったが、一昨年6月の「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の施行、及びこれを受けた各自治体の取組みなどもあって認知度が上がってきたこともあり、概ね軌道に乗ってきたと評価できるように思う。今年度も従前と同様、著作物利用許諾契約書フォーマットの提供、及びこれを踏まえた個別具体的な契約内容のアレンジに関する（障がいのある作家の権利保護の観点からの）助言など、障がい者の権利保護に資する実務を浸透させるための活動を行った。

毎年感じることであるが、この取組みは、劇的な効果を生むための単発的な取組みとして行うべきものではなく「息の長い、地道な」取組みとして継続していくことにこそ最大の意義がある。このため今年度も、奇をてらうことなく、地道に昨年度までと同様の取組みを、粛々と行った。なお今年度からは、法律相談の担い手である弁護士をさらに1名増員し、障がい者の権利にかかわる問題に従前よりライフワークとして取組んでいる弊所の弁護士1名にも加わってもらい、私も含め総勢4名で法律相談に対応する体制とした。

この取組みを、ニーズのある全国各地に水平展開する一助になればと、3年前に「障害のある人の作品にまつわる権利のことハンドブック」を作成し、この冊子は今なお各方面からの引き合いを受けて頒布し、様々な場面で参照いただいていると聞き及んでいる。本取組みの意義に共鳴し、冊子の内容を具現化し運用する担い手を、ライツのみならず、全国に拡げていくことが、今後の目標であり、課題であるように思う。

この地道な取組みが、毎年、ゆっくりではあっても少しずつ実を結び、10年後に振り返ったときに、社会の変化を僅かでも実感できるような成果を目指し、微力ながら今後も仲間とともに力を尽くしていきたいと思う。

2019年度にRightsへ寄せられた相談

相談者

作家・家族	159件
障害者福祉施設・団体	263件
特別支援学校	5件
大学・研究機関	12件
国・自治体	15件
個人（作家・家族以外）・企業	45件
美術指導・支援関係者	39件
舞台関係者	10件
支援センター	13件
医療機関	1件
その他	27件
総数	**589件**

相談内容

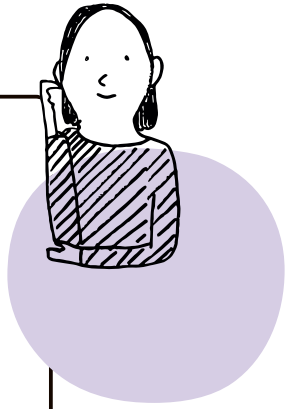
芸術文化活動環境	239件
発表の機会	229件
活動を行う障害者の権利保護	74件
作品の二次利用	275件
作品の販売	90件
作家と作品の取り扱い	37件
作家・事業所への取材	2件
鑑賞支援	12件
舞台芸術	17件
その他	143件
総数	**1,118件**

今年度、

Rightsに寄せられた相談事例

Rightsの相談窓口には今年度多岐にわたる多くの相談が寄せられました（相談内容・件数の詳細はp123）。
支援センターからの相談のほか、展覧会の開催や、舞台芸術活動にまつわる相談も多くありました。
その中から、5つの事例を紹介します。

相談事例 1



【新たに立ち上がった「支援センター」へのサポート】

何かとわからないことも多く、事業の進行について相談にのってほしい

県の担当者との打ち合わせに同席し、事業の進め方について意見交換をしました。初年度は試行錯誤をしながらになるので、もう少し事業を長期的に見据えて計画してもいいのではないか、他団体や協力者との連携を含めたネットワークをどのように作るのかについて話し合いました。また、相談窓口の運営については、他の支援センターや広域センター等と連携を取ることで相談内容を解決する糸口を見つけることが出来る可能性や、寄せられた相談をどのようにデータベース化するかについて、Rightsの経験をもとに話をしました。

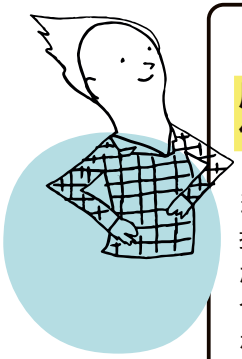
相談事例 2

【作品の発表の機会】

作品を発表する場を探している

公募展など、作品を応募できる機会があることを説明し、その時期に募集していた公募展などの情報を伝えました。応募の手続きについて不安をお持ちだったため、不安点を一緒に解決していくことで、応募に繋がりました。

相談事例 3



【展覧会の開催について】

展覧会を開催したいため、作品の展示方法などについて教えてほしい

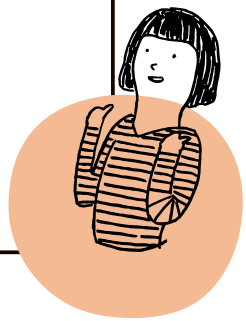
当センターの展示方法に関する資料を提供したほか、東京都の支援センターが主催した展示方法を学ぶ研修を紹介し、参加していただきました。展示方法の資料では、作品の形状（平面、立体）に合わせた展示方法や額装の仕方、簡易的な展示方法のアイデアなどが記され、展示会場に作品を設置する際の注意点などについて説明されています。

相談事例 4

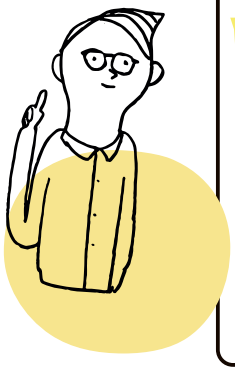
【絵画教室の講師からの相談】

車椅子利用者も参加出来るアトリエや絵画教室はないか

相談者がお住まいの地域周辺では見つかりませんでしたが、外出時のガイドヘルパーなどを依頼することで、なじみ深いアトリエ教室に通い続けられるのではないかと提案しました。



相談事例 5



【鑑賞にまつわる相談】

障害当事者による芸術鑑賞に関する仲間づくりや交流、情報交換の場があれば、教えてほしい

福祉団体や障害者の舞台芸術活動の支援にあたる団体に相談するなどの情報収集を行い、障害当事者をはじめ様々な人が参加し、イベントの開催やスポーツなど多様な活動を企画している団体にたどり着きました。この団体を紹介し、参加につながる方法を一緒に探りました。

2019年度　南関東・甲信ブロックの動き

今年度の南関東・甲信ブロックでは、2つの新たな支援センターが立ち上がりました。千葉県の「HONGERA（オンゲラ）!」と埼玉県の「ART(s)さいほく」です。HONGERA!は、以前より舞台芸術分野において活動してきた団体が運営する、千葉県で初めて設置された支援センターです。千葉県内の各所で行われてきた取り組みがこの事業を通して連携し、県内の障害者による芸術文化活動の普及につながることが今後期待されます。また、ART(s) さいほくが立ち上がったことにより、埼玉県西北部への事業の広がりにつながりました。

このような新しい体制のもと、第1回ブロック連絡会議を2019年9月24日に東京都内で開催しました。支援センター、そして都県の事業担当者の皆さまにご参加いただき、意見交換も活発に行われ、それぞれが行っている事業を知り、また疑問を共有し解決につなげる機会となりました。第2回ブロック連絡会議は、2020年3月2日に予定をしていましたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、中止としました。支援センターと都県の事業担当者の皆さまには資料による情報共有に努めました。

新型コロナウイルスの感染拡大は、支援センターの事業にも影響があり、2月、3月に予定されていたイベントや協力委員会の開催を中止したとのお知らせを受けました。準備を進めてきた支援センターの皆さまには誠に残念でしたが、来年度につながることを願います。

今年度、経験を重ねてきた支援センターは独自の事業を展開し、そして新たな支援センターが加わったことで、当ブロック内での事業の充実と広がりが感じられました。来年度もこの流れが続き、支援センター未設置の神奈川県と長野県における気運が高まることを期待します。

第1回ブロック連絡会議の様子

厚生労働省 令和元年度障害者芸術文化活動普及支援事業
南関東・甲信ブロック 広域センター
東京アール・ブリュットサポートセンターRights

ディレクター　アサダワタル
センター長　松山恭子
副センター長　玉村明日香
主任相談員　石橋美咲
相談員　三澤真弓

〒164-0001　東京都中野区中野5-26-18
（社会福祉法人愛成会　法人企画事業部内）
電話：03-5942-7251　ファックス：03-3387-0820
Eメール：rights@aisei.or.jp　https://rights-tokyo.com/

本年度の事業を終えて

社会福祉法人愛成会
副理事長・アートディレクター
小林瑞恵

厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業 南関東・甲信ブロック 広域センターの事業を行い3年目となりました。今年度は、千葉県に初めて支援センターが設置されたほか、埼玉県でも新たな支援センターが設置され2つの支援センターによる普及支援が行われるなど、本事業が広がっていることを感じられる年となりました。

今年度、当広域センターは「まなざし」をテーマに事業を行ってきました。障害者の芸術文化活動の普及支援のためには、それを支える支援者やご家族など、障害者の周囲にいる方々に目を向けることもとても大切です。そのような方がどのようなまなざしをもって障害のある方の表現を見つめているのかを考える1年としました。昨年度まで広域センターとして行ってきた「表と現 アーツプロジェクト」では、障害者の日常の中にはどのような表現の形があるのかを話し合ってきましたが、今年度は、「まなざしラジオ !! 」として日常の中にある表現に寄り添ってきた支援者やご家族などにも着目したのです。

合同イベントと人材育成研修として開催した「まなざしラジオ !! in 芸劇」では、東京芸術劇場に共催として、またPalabra株式会社には情報保障のコーディネイターとしてご協力をいただきました。文化施設や様々な分野の方に関わっていただくことで、障害者の芸術活動の普及が創作面、鑑賞面共に進んでいくことと思います。

今月、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響から、東京オリンピック・パラリンピック大会の開催延期が決定されました。このような状況であるからこそ、個々が冷静に判断して行動し、それぞれの属性を問わず他者を思いやる心が大切であると考えます。障害のある方がその個性を活かして輝ける、多様な社会の創出につながるよう、今後も障害者による芸術文化活動の普及支援を続けていきたいと思います。

最後となりましたが、本事業の実施にあたり、多大なるご協力を賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

2020年3月

［プロフィール］
こばやしみずえ／社会福祉法人愛成会 副理事長・アートディレクター・法人企画事業部部長。2004年、障害のある人たちが創作活動を行う場「アトリエpangaea（ぱんげあ）」を立ち上げる。近年では、2018-2019年にフランス パリ市で開催された『パリ東京文化タンデム2018「アール・ブリュット ジャポネII」展』の日本側キュレーターや、2016年東京芸術文化評議会アール・ブリュット検討部会委員を務める。共著『スウェーデンのアール・ブリュット発掘―日常と独学の創造価値』（2018年／平凡社）。これらの芸術文化事業を通じ、障害のある方々の理解啓発に取り組んでいる。

厚生労働省 令和元年度 障害者芸術文化活動普及支援事業
南関東・甲信ブロック 広域センター

東京アール・ブリュットサポートセンターRights（ライツ）報告書
まなざしラジオ!!

2020（令和２）年3月31日発行

編集
米津いつか

デザイン
依田正樹

写真
たかはしじゅんいち
[P4-15(P7右下を除く)、P34、P43、P53、P64、P86、P96、P97、P98左下・右下、P99(左上を除く)、P100、P101(左上・左下を除く)、P102-103、P104左中央・右上、P106中央・下、P107、P108、P113左下、P118-P120]
米津いつか
[P7右下、P20、P72、P91、P98(左下・右下を除く)、P99左上、P101左上・左下、P104左上・下、P105、P106上、P109、P110-112、P113上・右下]

印刷・製本
株式会社シナノパブリッシングプレス

制作・発行
社会福祉法人愛成会
〒164-0001　東京都中野区中野5丁目26-18
TEL　03-5942-7259
FAX　03-3387-0820
E-mail　kikaku@aisei.or.jp
URL　www.aisei.or.jp

発行責任者
井上庸一（社会福祉法人愛成会 理事長）

この事業は、厚生労働省 令和元年度 障害者芸術文化活動普及支援事業の補助を受けています。

©Social Welfare Organization Aiseikai 2020 Printed in Japan